

一般国道9号（安来道路）建設予定地内
埋藏文化財発掘調査報告書 西地区13

塩津丘陵遺跡群

(塩津山遺跡 柳遺跡 柳Ⅱ遺跡)

小久白墳墓群

2001年3月

地方整備局松江国道工事事務所
教 育 委 員 会

一般国道9号（安来道路）建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区13

塩津丘陵遺跡群
(塩津山遺跡 柳遺跡 柳Ⅱ遺跡)
小久白墳墓群

2001年3月

国土交通省中国地方整備局松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

国土交通省中国地方整備局松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして高規格道路である安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

この安来道路においても、道路予定地内にある文化財について鳥根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成10年度から平成11年度にかけて実施した、塩津丘陵遺跡群と小久白墳墓群の調査結果をとりまとめたものであります。

本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待するとともに、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力頂いた鳥根県教育委員会並びに関係各位に対し、深堪なる謝意を表するものであります。

平成13年3月

国土交通省中国地方整備局松江国道工事事務所

所長 石井一生

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号（安来道路）建設予定地内遺跡の調査を行っております。この報告書は、平成10年度から平成11年度に実施した塩津丘陵遺跡群と小久白墳墓群の調査成果を取りまとめたものです。

安来道路の建設が進められている安来市周辺は古代から文化が栄えた地域であり、多くの遺跡が知られています。今回調査を実施した遺跡からは、弥生時代の終わり頃から古墳時代後期にかけての遺構が検出されました。

特に、弥生時代の終わり頃は、倭国乱から邪馬台国の時代にあたり、日本列島に大きなまとまりができるつつある激動の時代です。当時の出雲は独特の四隅突出型墳丘墓を造営するなど、地域色豊かな文化を開花させた時代でもありました。前回の平成6年度から同8年度にかけての大規模調査に続き、この度の調査においても、全国的に有数の弥生墳丘墓を造営した荒島地域における人々の生活を知る上で、貴重な資料を得ることができました。

このような発掘調査の成果は、今後、島根県の歴史、ひいては日本の古代史の解明に役立つものと思われます。本報告書が地域の歴史を解明する糸口となり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり御尽力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道工事事務所、ならびに御協力を賜りました地元の皆様はじめ関係各位、安来市教育委員会等関係諸機関に対し厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

島根県教育委員会教育長

山崎 悠雄

例　　言

1. 本書は、島根県教育委員会が、建設省中国地方建設局松江国道工事事務所の委託を受けて平成10年度から同11年度にかけて実施した、一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

平成10年度

塩津山遺跡　　島根県安来市久白町塩津

平成11年度

柳遺跡　　島根県安来市荒鳥町柳

柳Ⅱ遺跡　　島根県安来市荒鳥町柳

小久白墳墓群　島根県安来市久白町小久白

島田遺跡　　島根県八束郡東山雲町掛屋町

2. 調査体制は以下のとおりであった。

平成10年度　塩津山遺跡

調査主体　島根県教育委員会

事務局　島根県教育庁文化財課　勝部　昭（課長）　島地徳郎（課長補佐）

島根県埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）　秋山　実（課長補佐）

松本岩雄（課長補佐）　足立克己（主幹）　川崎　崇（企画調整係主事）

調査員　島根県埋蔵文化財調査センター

大庭俊次（文化財保護主事）　後藤達夫（教諭兼文化財保護主事）

小田川悠美（調査補助員）

平成11年度　塩津山遺跡（報告書作成）・島田遺跡島田横穴墓群2号横穴墓（現地調査）

調査主体　島根県教育委員会

事務局　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　宍道正年（所長）　秋山　実（総務課長）

松本岩雄（調査課長）　西尾克己（主幹）　今岡　宏（総務係長）

調査員　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　大庭俊次（文化財保護主事）

清水初美（調査補助員）　露梨靖子（調査補助員）

遺物整理　神谷登喜美　松野美小恵　三上恭子　柳原准子

平成11年度　柳遺跡・柳Ⅱ遺跡・小久白墳墓群（現地調査）

調査主体　島根県教育委員会

事務局　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　宍道正年（所長）　秋山　実（総務課長）

松本岩雄（調査課長）　今岡　宏（総務係長）　丹羽野　裕（調査第5係長）

調査員　増田浩太（主事）　佐野木信義（講師兼主事）　寺尾　令（調査補助員）

平成12年度　柳遺跡・柳Ⅱ遺跡・小久白墳墓群（以上報告書作成）

事務局　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　宍道正年（所長）　内田　融（総務課長）

松本岩雄（調査課長）　今岡　宏（総務係長）　大庭俊次（文化財保護主事）

調査員 増田浩太（主事）
遺物整理 平成11年度～平成12年度
浅井順子 岩佐百代 小瀧理恵 佐々木澄江 高橋啓子 野田清美 広江香澄
松本百合子

3. 発掘作業（発掘作業員雇用・測量発注・重機借り上げ・プレハブハウス借り上げ・発掘用具調達など）については、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会島根支部

現場担当 布村幹夫（現場事務所長） 中島 勉（技術員） 矢野秀夫（技術員）
藤原 恒（技術員）

事務担当 飯塚春美 深田明子 加納千恵

発掘作業員各位

4. 掘図中の方位は測量法による平面直角座標Ⅲ系の軸方向を示し、レベル高は海拔高を示す。
5. 掘図の縮尺は図中に示した。
6. 本書に掲載した「遺跡位置図」は、島根県教育委員会編『塩津丘陵遺跡群』1998年に掲載されたものを改変して使用した。
7. 本報告書の執筆・編集は主に大庭と増田が、丹羽野ほか島根県教育庁埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て行った。執筆分担は日次に明示した。また、トレース図版・写真図版等の作成には主として以下の者が携わった。
遺物・遺構の実測・整図 大庭 増田 後藤 佐野木 守尾 小田川 出中玲子 露梨
清水 福田市子 神谷 三上 柳原 浅井 小瀧 佐々木 高橋
野田
遺物・遺構の写真撮影 大庭 増田（なお、写真の縮尺は任意である。）
8. 本書で報告した遺跡の出土遺物及び実測図、写真等の資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（島根県松江市打出町33番地）で保管している。

目 次

| | |
|---|---------------|
| 第1章 調査に至る経緯・調査の経過と概要 | (1) |
| 第1節 調査に至る経緯 | (大庭).....(1) |
| 第2節 塩津丘陵遺跡群と平成10年度、平成11年度調査地区 (丹羽野) | (3) |
| 1. 塩津丘陵遺跡群の概要..... | (3) |
| 2. 塩津丘陵遺跡群と平成10年度、平成11年度調査区の関係 | (3) |
| 第2章 位置と環境 | (丹羽野).....(7) |
| 第3章 塩津山遺跡 | (大庭).....(11) |
| 第1節 平成10（1998）年度発掘調査の経過と概要 | (11) |
| 第2節 調査の結果 | (12) |
| 第4章 柳遺跡 | (増田).....(37) |
| 第1節 調査前の状況と経過 | (37) |
| 第2節 柳遺跡北区の調査 | (38) |
| 第3節 柳遺跡南区の調査 | (47) |
| 第4節 遺構外出土遺物 | (51) |
| 第5節 まとめ | (56) |
| 第5章 柳II遺跡 | (増田).....(59) |
| 第1節 調査の状況と経過 | (59) |
| 第2節 調査の結果 | (63) |
| 第3節 まとめ | (65) |
| 第6章 小久白墳墓群 | (増田).....(67) |
| 第1節 調査の状況と経過 | (67) |
| 第2節 調査の結果 | (68) |
| 第3節 まとめ | (70) |

| | |
|---------------------|--------------------|
| 附編 島田遺跡島田横穴墓群第2号横穴墓 |(大庭).....(71) |
| 卷末写真図版 |(83) |
| 塩津山遺跡 |写真図版 1～18 |
| 柳遺跡 |写真図版 19～31 |
| 柳Ⅱ遺跡 |写真図版 32～33 |
| 小久白墳墓群 |写真図版 34～35 |
| 島田遺跡島田横穴墓群第2号横穴墓 |写真図版 36～39 |
| 報告書抄録 |(122) |

挿図表目次

| | |
|---|----|
| 第1章 調査に至る経緯・調査の経過と概要 | 1 |
| 第1図 塩津山遺跡、塩津山古墳群、竹ヶ崎遺跡、柳遺跡の位置関係(S=1/2,000) | 4 |
| 第2図 柳遺跡、柳II遺跡、小久白墳墓群の位置関係(S=1/3,000) | 5 |
| 一般国道9号(安来道路)建設に伴う主要な埋蔵文化財調査一覧表 | 6 |
| 第2章 位置と環境 | 7 |
| 第3図 塩津丘陵遺跡群の位置と周辺の遺跡 (S=1/25,000) | 8 |
| 塩津丘陵遺跡群周辺の遺跡一覧表 | 9 |
| 第3章 塩津山遺跡 | 11 |
| 第4図 塩津山遺跡平成10年度調査前地形図 (S=1/1,000) | 11 |
| 第5図 塩津山遺跡平成10年度調査区造構位置図 (S=1/500) | 12 |
| 第6図 塩津山遺跡加工段1~3造構実測図 (S=1/80) | 13 |
| 第7図 塩津山遺跡加工段1~3土層断面実測図 (S=1/40) | 13 |
| 第8図 塩津山遺跡加工段1造構・遺物実測図 遺構 (S=1/80) 土師器 (S=1/4) | 14 |
| 第9図 塩津山遺跡加工段2造構実測図 (S=1/80) | 14 |
| 第10図 塩津山遺跡加工段3造構・遺物実測図 遺構 (S=1/80) 土師器 (S=1/4) | 15 |
| 第11図 塩津山遺跡SI05・加工段5造構実測図 (S=1/80) | 15 |
| 第12図 塩津山遺跡SI05造構実測図 (S=1/80) | 16 |
| 第13図 塩津山遺跡SI05中央ピット・土柱穴土層断面実測図 (S=1/40) | 16 |
| 第14図 塩津山遺跡SI05造構実測図2 (S=1/80) | 17 |
| 第15図 塩津山遺跡SI05床面までの土層断面実測図 (S=1/40) | 18 |
| 第16図 塩津山遺跡SI05遺物実測図 (S=1/4) | 19 |
| 第17図 塩津山遺跡加工段5造構・遺物実測図 造構 (S=1/80) 弥生土器 (S=1/4) 鉄製品 (S=1/2) | 19 |
| 第18図 塩津山遺跡加工段5壁体溝等土層断面実測図 (S=1/40, S=1/20) | 20 |
| 第19図 塩津山遺跡SI05・加工段5周辺造構外出土遺物実測図1 土師器 (S=1/4) 須恵器 (S=1/4) 石器・石製品 (S=1/3) 土錐 (S=2/3) | 21 |
| 第20図 塩津山遺跡SI05・加工段5周辺造構外出土遺物実測図2 磨石 (右図S=1/2, 左図実物大) | 22 |
| 第21図 塩津山遺跡須恵器溜まり遺物実測図 (S=1/6) | 23 |
| 第22図 塩津山遺跡須恵器溜まり造構実測図 (S=1/20) | 24 |
| 第23図 塩津山遺跡須恵器溜まりおよび加工段4遺物実測図 (S=1/4) | 24 |
| 第24図 塩津山遺跡加工段4造構実測図 (S=1/80) | 25 |
| 第25図 塩津山遺跡土器溜まり土層断面実測図 (S=1/40) | 26 |
| 第26図 塩津山遺跡土器溜まり遺物実測図1 弥生土器 (S=1/4) | 26 |
| 第27図 塩津山遺跡土器溜まり遺物実測図2 土師器 (S=1/4) 須恵器 (S=1/4) 砥石 (S=1/2) | 27 |
| 第28図 塩津山遺跡SI08・加工段6検出面までの土層断面実測図 (S=1/40) | 28 |
| 第29図 塩津山遺跡SI08造構実測図 (S=1/80) | 29 |
| 第30図 塩津山遺跡SI08土層断面実測図 (S=1/40) | 30 |
| 第31図 塩津山遺跡SI08遺物実測図 石核 (S=2/3) 土師器 (S=1/4) 勾玉 (実物大) | 31 |
| 第32図 塩津山遺跡加工段6造構・遺物実測図 遺構 (S=1/80) 遺物 (S=1/4) | 32 |
| 塩津山遺跡造構関係諸表 | 33 |
| 塩津山遺跡遺物観察表 | 35 |

第4章 柳遺跡

| | | |
|------|---|----|
| 第33図 | 柳遺跡北区調査前測量図(S=1/200) | 37 |
| 第34図 | 柳遺跡北区遺構配置図(S=1/200) | 38 |
| 第35図 | 柳遺跡北区SI10実測図(S=1/60) | 39 |
| 第36図 | 柳遺跡北区SI10中央穴実測図(S=1/20) | 40 |
| 第37図 | 柳遺跡北区SI10出土遺物土器(S=1/3) 石器(S=1/1) | 40 |
| 第38図 | 柳遺跡北区SI13・加工段20・加工段59関係図(S=1/60) | 41 |
| 第39図 | 柳遺跡北区SI13実測図(S=1/40) | 42 |
| 第40図 | 柳遺跡北区加工段20実測図(S=1/60) | 43 |
| 第41図 | 柳遺跡北区加工段20出土遺物(S=1/3) | 43 |
| 第42図 | 柳遺跡北区加工段59実測図(S=1/40) | 44 |
| 第43図 | 柳遺跡北区加工段60実測図(S=1/40) | 44 |
| 第44図 | 柳遺跡北区加工段60出土遺物(S=1/3) | 44 |
| 第45図 | 柳遺跡北区S-01実測図(S=1/40) | 45 |
| 第46図 | 柳遺跡北区S-01出土遺物(S=1/3) | 46 |
| 第47図 | 柳遺跡南区調査前測量図(S=1/300) | 47 |
| 第48図 | 柳遺跡南区遺構配置図(S=1/200) 中央部土層実測図(S=1/120) | 47 |
| 第49図 | 柳遺跡南区SI01実測図遺物出土状況図(S=1/60) | 49 |
| 第50図 | 柳遺跡南区SI01出土遺物(S=1/3) | 50 |
| 第51図 | 柳遺跡南区SK101/SK102実測図(S=1/60) | 50 |
| 第52図 | 柳遺跡遺構外出土遺物1(S=1/3) | 51 |
| 第53図 | 柳遺跡遺構外出土遺物2(S=1/3) | 52 |
| 第54図 | 柳遺跡遺構外出土遺物3(S=1/3) | 54 |
| 第55図 | 柳遺跡遺構外出土遺物4(1はS=1/1 2~4はS=2/3) | 55 |
| | 柳遺跡豎穴住居跡・加工段一覧表 | 56 |
| | 柳遺跡出土土器観察表 | 57 |

第5章 柳II遺跡

| | | |
|------|---|----|
| 第56図 | 柳II遺跡調査前測量図(S=1/200) | 59 |
| 第57図 | 柳II遺跡遺構配置図(S=1/200) 調査区南側土層図(S=1/100) | 60 |
| 第58図 | 柳II遺跡遺構配置図(S=1/300) | 61 |
| 第59図 | 柳II遺跡SD06実測図(S=1/100) | 63 |
| 第60図 | 柳II遺跡SD15実測図(S=1/100) | 64 |
| 第61図 | 柳II遺跡SK16実測図(S=1/20) | 64 |
| 第62図 | 柳II遺跡出土遺物(S=1/3) | 65 |

第6章 小久白墳墓群

| | | |
|------|------------------------------|----|
| 第63図 | 小久白墳墓群調査前測量図(S=1/300) | 67 |
| 第64図 | 小久白墳墓群遺構配置図(S=1/400) | 68 |
| 第65図 | 小久白墳墓群SD101実測図(S=1/60) | 69 |
| 第66図 | 小久白墳墓群SD102実測図(S=1/75) | 69 |
| 第67図 | 小久白墳墓群出土遺物(S=1/3) | 69 |

附編 島田遺跡

| | | |
|------|---|----|
| 第68図 | 島田遺跡の位置 | 71 |
| | 島田遺跡の位置と周辺の遺跡表 | 71 |
| 第69図 | 島田遺跡の位置と周辺の遺跡(S=1/25,000) | 72 |
| 第70図 | 安来道路内地区の東出雲町域内で調査を実施した遺跡(S=1/25,000) | 73 |
| | 安来道路西地区の東出雲町域内で調査を実施した遺跡一覧表 | 75 |
| 第71図 | 第2号横穴墓遺構遺物実測図 遺物(S=1/4) 遺構(S=1/50,1/10) | 78 |
| 第72図 | 島田遺跡周辺の地形(S=1/2,500) | 80 |
| 第73図 | 島田遺跡調査後地形測量図(S=1/500) | 81 |

写真図版目次

塩津山遺跡

- 写真図版1 上 加工段1~3検出状況（北から）
中 加工段1~3上器出土状況（東から）
下 加工段1~3床面・柱穴・ピット等検出状況（南東から）
- 写真図版2 上 加工段2床面・柱穴・ピット等検出状況（北東から）
中 SI05検出状況（南から）
下 SI05土層堆積状況（西から）
- 写真図版3 上 SI05床面検出状況（南から）
中 SI05土器出土状況（南から）
下 SI05床面・柱穴・ピット等検出状況（東から）
- 写真図版4 上 SI05発掘状況その1（東から）
中 SI05発掘状況その2（東から）
下 加工段5検出状況（西から）
- 写真図版5 上 加工段5床面・ピット等検出状況（北から）
中 加工段5発掘状況その1（北から）
下 加工段5発掘状況その2（北から）
- 写真図版6 上 SI05と加工段5との位置関係その1（北から）
中 SI05と加工段5との位置関係その2（北から）
下 SI05と加工段5との位置関係その3（北から）
- 写真図版7 上左 加工段5発掘状況その3（北から）
上右 SI05から東方を望む（西から）
下左 加工段4発掘状況（東から）
下右 土器漬まり弥生土器・土師器出土状況（北から）
- 写真図版8 上 須恵器漬まり検出状況その1（西から）
中 須恵器漬まり検出状況その2（西から）
下 加工段4床面・ピット・壁体溝等検出状況（東から）
- 写真図版9 上 加工段4発掘状況（南東から）
中 土器漬まり発掘中（西から）
下 SI08検出状況その1（北から）
- 写真図版10 上左 SI08遺物出土状況（北から）
上右 SI08検出状況その2（北から）
下左 SI08検出状況その3（北から）
下右 SI08検出状況その4（北から）
- 写真図版11 上 SI08発掘状況その1（北から）
中 SI08発掘状況その2（北から）
下 SI08発掘状況その3（北から）
- 写真図版12 上 SI08石核出土状況（北から）
中 SI08と加工段6の切り合い関係（西から）
下 加工段6新旧壁体溝・ピット発掘状況（西から）
- 写真図版13~18 塩津山遺跡遺物写真

柳遺跡

- 写真図版19 上 柳遺跡全景
下 北区完掘状況（南から）
- 写真図版20 上 SI10完掘状況（北から）
下 SI10完掘状況（南から）
- 写真図版21 上 SI10中央穴遺物出土状況
中 SI13,加工段20,加工段59セクション
下 SI13完掘状況（南から）
- 写真図版22 上 加工段20遺物出土状況

- 中 加工段59完掘状況(東から)
 下 加工段60完掘状況(南から)
写真図版23
 上 S-01全景(南東から)
 中 S-01全景(正面東から)
 下 S-01遺物出土状況
写真図版24
 上 南区調査前状況(東から)
 中 南区完掘状況(西から)
 下 南区メインセクション
写真図版25
 上 SI01完掘状況(西から)
 下 SI01完掘状況(北から)
写真図版26
 上 SI01即掘部堀上作業
 中 SK101完掘状況(北から)
 下 SK102完掘状況(北から)
写真図版27
 上中 SI10出土遺物
 下 加工段20出土遺物
写真図版28
 上左 加工段60出土遺物
 上右 SI01出土遺物
 中 S-01出土遺物
 下 S-01遺物出土状況
写真図版29 遺構外出土遺物
写真図版30 遺構外出土遺物
写真図版31 遺構外出土遺物

柳Ⅱ遺跡

- 写真図版32**
 上 柳Ⅱ遺跡調査後全景
 中 SD06完掘状況(北から)
 下 SD15完掘状況(南から)
写真図版33
 上 SK16完掘状況(西から)
 中 SK16出土遺物
 下 柳Ⅱ遺跡出土遺物

小久白墳墓群

- 写真図版34**
 上 小久白墳墓群完掘状況(西から)
 中 SD101完掘状況(西から)
 下 SD101完掘状況(南から)
写真図版35
 上 SD102完掘状況(北から)
 中 SD102完掘状況(南から)
 下 小久白墳墓群出土遺物

島田遺跡島田横穴墓群第2号横穴墓

- 写真図版36**
 上 玄室検出状況(北東から)
 中 玄室内土層堆積状況(北東から)
 下 屑床・埋み石検出状況その1(北東から)
写真図版37
 上 屑床・埋み石検出状況その2(東から)
 中 須恵器坏出土状況
 下 屑床・埋み石検出状況その3(北から)
写真図版38
 上 屑床・埋み石検出状況その4(北東から)
 中 屑床・埋み石検出状況その5(北から)
 下 玄室内完掘状況(北東から)
写真図版39 玄室内出土須恵器

第1章 調査に至る経緯・調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯

一般国道9号松江道路・安来道路建設と埋蔵文化財とのかかわりは昭和47（1972）年に遡る。すなわち、国道9号線の道路網整備に伴い、昭和47（1972）年5月26日付で建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会あてバイパス建設の基本設計資料として鳥取県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無についてその照会があった。

そこで、島根県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て、昭和47（1972）年、翌昭和48（1973）年に当該区間に於ける遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果を踏まえ、建設省からルート案が提示され、昭和48（1973）年7月には松江市東地区の予定ルートにかかる遺跡の取扱いについて協議があった。また、昭和49（1974）年7月には安来地区の清水一月坂間ルート案について協議があった。つづいて、昭和50（1975）年1月22日付けで島根県教育委員会あて、松江東地区と安来地区のうち清水一月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受けて、昭和50（1975）年7月には建設省と契約を取り交わし、昭和50（1975）年度には松江市竹矢町才ノ峠古墳群、同矢町平所遺跡、安来市早田町大坪古墳群の3遺跡の発掘調査を実施することとなった。平所遺跡からは、馬・鹿・家・人物などの形象埴輪が出土し、昭和52（1977）年6月10日付けで重要文化財に指定されている。

昭和55（1980）年度から昭和56（1981）年度には、昭和57年に島根県で開催が決定していた「くにびき」 国体の主要幹線道路となる「松江東バイパス」（以前は「米松バイパス」と呼ばれていた） 東出雲町出雲郷から松江市占吉原町占吉池に至る5.4km間の7遺跡（東出雲町の春日遺跡、夫敷遺跡、松江市の布田遺跡、中竹矢遺跡、才ノ峠遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）のうち2車線分を緊急に調査した。

その後「松江バイパス」は高規格道路に計画変更され、「松江道路」となり、昭和60（1985）年に建設省から前回調査した7遺跡について、残り4車線の本道工部分についての調査依頼があった。協議の結果、昭和61（1986）年度に春日遺跡から発掘調査を再開し、平成3（1991）年度の才ノ峠遺跡まで順次発掘調査を実施した。

一方、昭和61（1986）年度には安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9kmのルートが「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63（1988）年度には高規格道路に計画変更され、「松江道路」につなぐ八束郡東出雲町出雲郷ー安来市吉佐町間18.7kmの「安来道路」として事業が実施されることになった。この計画変更で予定ルートにも変更が生じたため、昭和62（1987）年度・昭和63（1988）年度に再度分布調査が実施された。

これら安来道路にかかる発掘調査は、まず、安来市赤江町から島田町に至る6.9km（インターチェンジ部分を含む安来工区）において、平成元（1989）年度から平成4（1992）年度まで8遺跡（安来市宮内町宮内遺跡、佐久保町大原遺跡、臼コクリ遺跡、岩屋口南遺跡、岩屋口北遺跡、黒井田町越峰遺跡、才ノ神遺跡、島田町島田南遺跡）で継続的に実施された。すなわち、平成元（1989）年度には宮内遺跡、平成2（1990）年度には宮内遺跡と島田南遺跡、平成3（1991）年度には臼コクリ遺跡、岩屋口南遺跡、越峰遺跡と宮内遺跡（工事中に発見されたⅡ区1号横穴墓）、平成4（1992）

年度には岩屋口南遺跡、岩屋口北遺跡、オノ神遺跡を発掘調査した。その後、この区間においては、平成5（1993）年度に、安来道路建設に伴う中国電力送電線鉄塔移設にかかる安来市黒井田町猫ノ谷遺跡の発掘調査が行われた。また、平成6（1994）年度には岩屋口北遺跡において、遺跡内に存在する横穴墓保存の可能性を探る道路再設計協議等を経て、遺構への影響を避けられない横穴墓群について再度発掘調査を実施した。さらに、平成8（1996）年度には臼コクリ遺跡において工事中に発見された横穴墓2穴の発掘調査が行われた。

なお、安来道路建設にかかる発掘調査は、平成4（1992）年度からは、安来市荒島町一八東郡東出雲町出雲郷間を「安来道路西地区」として、さらに、平成5（1993）年度からは、安来市吉佐町一島田町間を「安来道路東地区」としてそれぞれ実施することになった。

「安来道路東地区」においては、平成5（1993）年度に安来市吉佐町石田遺跡（第1次調査）、カンボウ遺跡、国吉遺跡、平ラⅠ遺跡、平ラⅡ遺跡、と安来市島田町島田黒谷Ⅰ遺跡、島田黒谷Ⅱ遺跡、島田黒谷Ⅲ遺跡、普請場遺跡、明子谷遺跡の発掘調査を実施した。平成6（1994）年度には安来市吉佐町石田遺跡（第2次調査）、五反田遺跡、徳見津遺跡、日廻遺跡、山の神遺跡、安来市門生町門生黒谷Ⅰ遺跡、門生黒谷Ⅱ遺跡、門生黒谷Ⅲ遺跡、陽徳遺跡、陽徳寺遺跡の発掘調査を実施した。平成7（1995）年度には安来市吉佐町石田遺跡（第3次調査）、安来市門生町門生黒谷Ⅳ遺跡の発掘調査を実施した。平成8（1996）年度には、石田遺跡（第4次調査）の発掘調査を実施し、「安来道路東地区」の現地発掘調査をすべて終了した。

「安来道路西地区」については、平成4（1992）年度には、東出雲町内の御崎谷遺跡、土元遺跡、清水遺跡の発掘調査を実施した。平成5（1993）年度には、東出雲町内の四ツ廻Ⅱ遺跡、林廻り遺跡、受馬遺跡、巻林遺跡、鶴貫遺跡、安来市内の桐の木Ⅰ遺跡、桐の木Ⅱ遺跡、亀尻Ⅰ遺跡、亀尻Ⅱ遺跡、中山遺跡の発掘調査を実施した。平成6（1994）年度には安来市久白町塩津山遺跡、東出雲町掛尾町および出雲郷にかかる島田池遺跡の発掘調査を実施した。平成7（1995）年度には島田池遺跡、同じく東出雲町堂床古墳、勝負遺跡、渋山池遺跡、渋山池古墳群、原ノ前遺跡、島田遺跡、岸尾遺跡、安来市竹ヶ崎遺跡、柳遺跡、柳Ⅱ遺跡、小久白墳墓群、神庭谷遺跡の用地内全面発掘調査を実施した。

この間、発掘調査と平行して安来市久白町塩津山遺跡内に存在する、出雲地方最古の古墳のひとつである塩津山1号墳の現状保存が実現したほか、安来市吉佐町平ラⅡ遺跡内に存在する、彩飾壁画のある横口式家形石棺を持つ穴神1号横穴墓、東出雲町島田池遺跡、河町渋山池古墳群などの一部横穴墓についても保存措置がとられた。また、ルート内で発見された横穴墓の玄室などから出土した石棺の一部について、移築保存展示施設が設置された。

本書で報告する塩津山遺跡の調査区は、用地内にあった家屋の移転に伴う部分である。委託側の事情によって平成6（1994）年度以降実施された発掘調査工程に盛り込むことができなかつたこの部分について、平成10（1998）年度に建設省から委託を受けて、発掘調査を実施したものである。

また、平成7（1995）年度に発掘調査された島田遺跡において、平成11年5月、法面工事中に、用地外から掘り込まれた横穴墓の玄室が発見され、緊急に発掘調査を実施した。さらに、法面の設計変更に伴い追加買収された区域（柳遺跡、柳Ⅱ遺跡、小久白墳墓群、神庭谷遺跡にかかる）について平成11年7月28日協議が持たれ、平成11年9月～12月まで緊急的に対応し発掘調査した。なお、この設計変更によって、これまで保存が図られてきた中山遺跡骨蔵器埋納遺構が保存できなくなつた。

第2節 塩津丘陵遺跡群と平成10年度、11年度調査地区

1. 塩津丘陵遺跡群の概要

塩津丘陵遺跡群は、島根県教育委員会が平成6年度から7年度にかけて、安来道路建設に伴って発掘調査を実施した塩津山遺跡、塩津山墳墓群、竹ヶ崎遺跡、柳遺跡、柳II遺跡を中心に、これらの遺跡が所在する丘陵一帯を包括的に呼称する名称である。契約に基づく発掘調査の遂行上、別途の遺跡として扱っているが、本来は相互の関連が強く一体的に扱うべき遺跡で、特に前4者の遺跡は相互に遺跡の境界線を引くのが実質的に不可能な状態である。現在塩津丘陵遺跡群として暫定的に線引きしている範囲はおよそ20%に及び、発掘調査面積は7年度まで約22,000m²、今回の調査区を加えて約24,000m²となる。

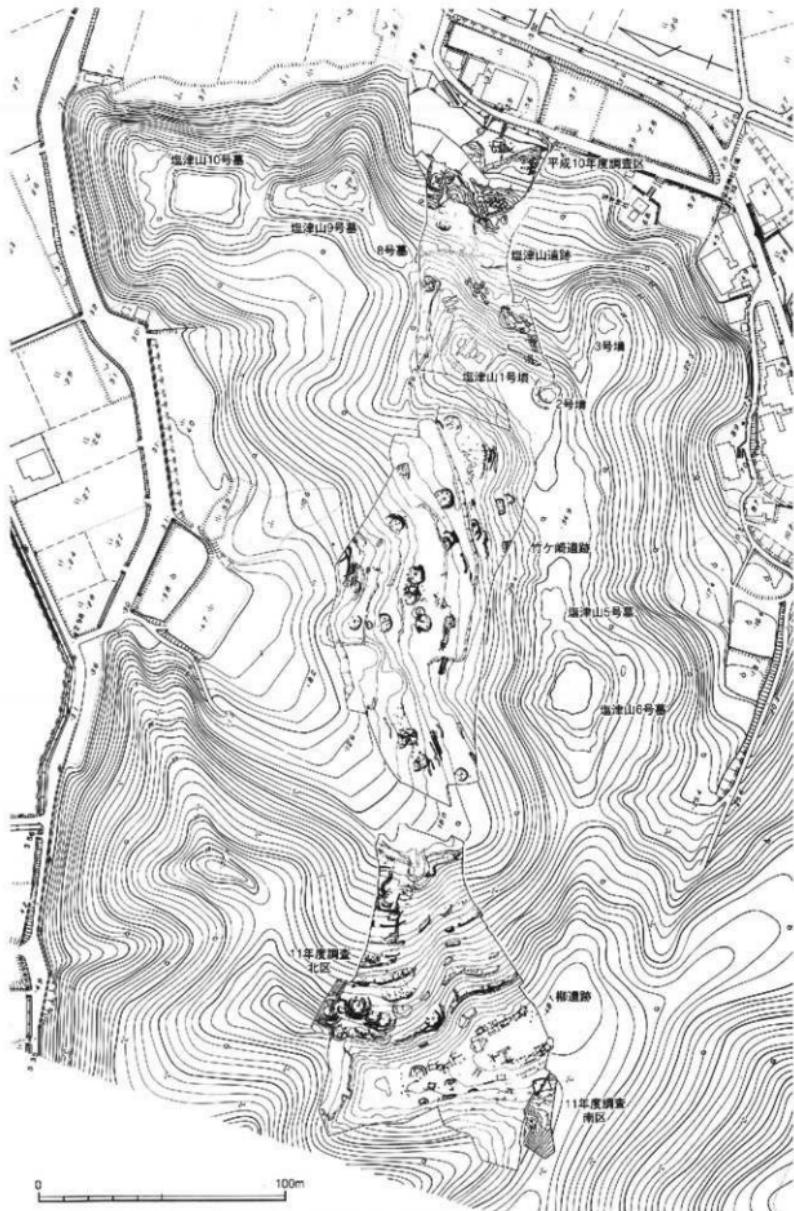
遺跡が形成された時代は、弥生時代後期から古墳時代中期が中心で、古墳時代後期以降の造構や遺物も若干含む。ただこれらの遺跡が大きな広がりを見せ、全体として遺跡群を構成する時期は弥生時代後期後半～後期末である。塩津山遺跡から竹ヶ崎遺跡にかけての尾根頂上部に連なる塩津山墳墓群には、未調査ながら大形の四隅突出型埴丘墓と考えられる長方形墓が2基（6号墓、10号墓）があり、弥生時代後期後半～末にかけてと推測される。当該期の集落関連の遺構としては、塩津山遺跡、竹ヶ崎遺跡、柳遺跡にかけて竪穴住居跡が40、加工段が70以上、柳遺跡頂上部を中心とし布掘建物跡、掘立柱建物跡が30以上が検出され、柳II遺跡でも加工段が2ヶ所の他、当該期の遺物が相当量出土している⁽²⁾。このように塩津丘陵遺跡群では、墳墓や集落関連の遺構が一体となって弥生時代後期後半～末にかけて大規模に展開しているのである。詳細は報告書を参照願いたい⁽³⁾。また本遺跡群から約200m西側の丘陵尾根上からは、弥生時代後期末の区画墓1と付随すると考えられる土壙墓2が検出されており（小久白墳墓群）関連が注目される⁽⁴⁾。

古墳時代前期には、塩津山墳墓群中に塩津山1号墳が築かれている⁽⁵⁾。25×20mの方墳で斜面には貼石を施し、痕跡的に角に張り出しを持つ。主体部には竪穴式石室のほか櫛櫛や特殊円筒形を呈す土器箱なども検出されている。古墳時代中期には、柳遺跡、柳II遺跡で丘陵斜面下半から竪穴住居跡や加工段が検出されており、大々的にはないにしろ、この丘陵で生活が営まれていたことがうかがえる。古墳時代後半期以降は、小規模な古墳が造られる他、大形の石棺式石室である塩津神社古墳も本遺跡群東端で築かれるものの、調査区内では断片的な資料しか検出されていない。奈良時代、平安時代以降の資料も出土しているが、いずれもまとまった遺構は検出されなかった。

2. 塩津丘陵遺跡群と平成10年度、11年度調査区の関係

本報告に掲載する塩津山遺跡、柳遺跡、柳II遺跡、小久白墳墓群は前記した平成6～7年度の調査以降、用地上の問題や工法上の問題で追加して調査を行った箇所である。平成10年度に行った塩津山遺跡の調査箇所は、6年度に家屋移転が行われておらず、未実施だった東側の丘陵裾付近にある。6年度に半分しか検出できなかったS I 05の全容が明らかになったのを始め、弥生時代後期末や古墳時代中期の竪穴住居跡、加工段などが検出された。

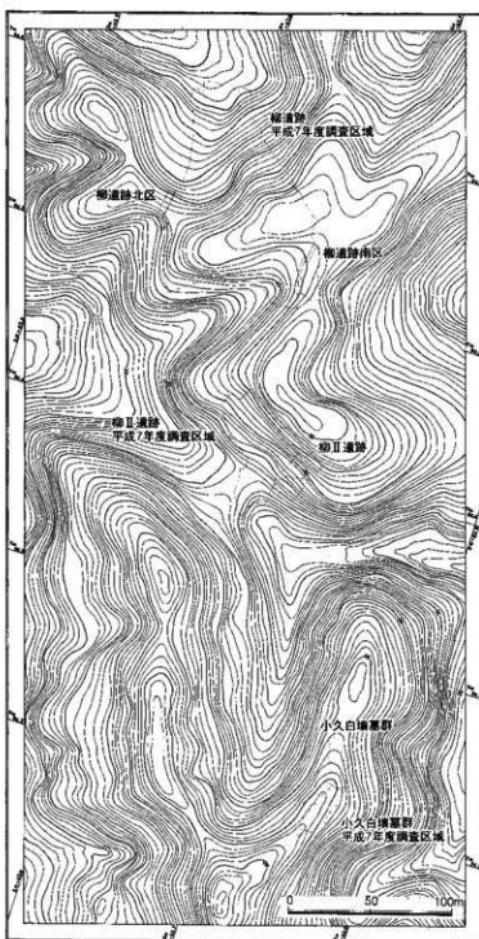
平成11年度には、軟土壤による工法変更に伴って柳遺跡、柳II遺跡、小久白墳墓群の追加調査を行った。柳遺跡は7年度調査東斜面の北側上半部と頂上部南側の調査を行い、S I 01、S I 10、加工段20の続きを検出したのを始め、新たに竪穴住居跡や加工段、横穴墓状の遺構などを検出した。柳II遺跡は7年度調査I区南側の斜面の調査を行い、S D 06の続きを始め、溝状遺構、土壙が検出



第1図 塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡）と平成10・11年度調査区

された。小久白墳墓群は7年度調査Ⅰ区南東側の尾根上の調査を行い、溝状の遺構が検出されている。

以上のように、10年度、11年度の各遺跡の調査では、小規模な調査区にもかかわらず、従来の調査を補強する貴重なデータを得ることが出来た。図らずも中途半端な形で途切れていた遺構について、ほぼ全容を明らかにすることが出来たのも大きな成果といえる。



第2図 柳遺跡・柳II遺跡・小久白墳墓群の位置関係 (S=1/3000)

- 注 (1) 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1998『塩津丘陵遺跡群－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅲ－』
- (2) 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1996『柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅳ－』
- (3) 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1997『塩津山古墳群－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区VI－』

一般国道9号(安来道路)建設に伴う主要な埋蔵文化財調査一覧表

| 年 度 | 東地区 遺跡名 | 所 在 地 | 西地区 遺跡名 | 所 在 地 |
|--------------------|---|--|---|---|
| 平成元年度 (1989年度) | 宮内遺跡 | 安来市佐久保町字栗坪 | | |
| 平成2年度 (1990年度) | 宮内遺跡 島田南遺跡 | 安来市佐久保町字栗坪 安来市島田町字雨谷 | | |
| 平成3年度 (1991年度) | 白コクリ遺跡 岩屋口南遺跡 越崎遺跡 | 安来市佐久保町字臼コクリ 安来市佐久保町字カワラケ免 安来市黒井田町字高坂 | | |
| 平成4年度 (1992年度) | 岩屋口南遺跡 岩屋口北遺跡 大原遺跡 オノ神遺跡 | 安来市佐久保町字カワラケ免 安来市佐久保町字カワラケ免 安来市佐久保町字大原 安来市黒井田町字越崎 | 御崎谷遺跡 清水遺跡 | 東出雲町下立東字御崎谷はか 東出雲町下意東字高清水 |
| 平成5年度 (1993年度) | 明子谷遺跡 島田黒谷Ⅰ遺跡 島田黒谷Ⅱ遺跡 島田黒谷Ⅲ遺跡 猫ノ谷遺跡 国吉遺跡 カンボウ遺跡 平ラⅠ遺跡 平ラⅡ遺跡(穴持横穴墓群) 石出遺跡 | 安来市島田町字明子谷 安来市島田町黑谷 安来市島田町黑谷 安来市島田町黑谷 安来市黒井田町櫛井 安来市吉佐町字国吉 安来市吉佐町字カンボウ 安来市吉佐町字平ラ 安来市吉佐町字山根、油田 安来市吉佐町字石川 | 四ツ廻Ⅱ遺跡 林創り遺跡 受馬遺跡 巻林遺跡 鶴員遺跡 中山遺跡 | 東出雲町掛尾町字四ツ廻 東出雲町掛尾町字林廻り 東出雲町掛尾町字受馬 東出雲町下志東 東出雲町出雲郡宇深田 安来市荒鳥町中山 |
| 平成6年度 (1994年度) | 岩屋口北遺跡 山ノ神遺跡 徳見津遺跡 月廻遺跡 五反出澗跡 陽徳遺跡 陽徳少遺跡 門生黒谷Ⅰ遺跡 (門生山根1号窓跡含む) 門生黒谷Ⅱ遺跡 門生黒谷Ⅲ遺跡 (五反田古墳群含む) | 安来市佐久保町字カワラケ免 安来市吉佐町字山ノ神 安来市吉佐町字徳見津 安来市吉佐町字月廻 安来市吉佐町字五反田 安来市門生町字陽徳 安来市門生町字陽徳 安来市門生町字黒谷、山根 安来市門生町字黒谷 安来市門生町字黒谷 | 塙津山遺跡 塙津山古墳群 島田池遺跡 | 安来市荒島町沢、久白町塙津 安来市荒島町沢、久白町塙津 東出雲町出雲 |
| 平成7年度 (1995年度) | 石出遺跡 門生黒谷Ⅲ遺跡 | 安来市吉佐町字石田 安来市門生町字黒谷 | 竹ヶ崎遺跡 柳遺跡 柳Ⅱ遺跡 小久白埴高群 神庭谷遺跡 浜山池遺跡 浜山池古墳群 原ノ前遺跡 鳥出遺跡 鳥田池遺跡 岸尾遺跡 勝負遺跡・笠床古墳 | 安来市荒島町竹ヶ崎 安来市荒島町柳 安来市荒島町柳 安来市荒島町柳 安来市荒島町舟穂 東川芸町掛尾町 東出雲町掛尾町 東出雲町掛尾町 東山芸町川芸郡・掛尾町 東出雲町出雲郡 東出雲町出雲郡 東出雲町掛尾町 |
| 平成10年度 (1998年度) | | | 小久白埴高群(サエノカミ) 塙津山遺跡 | 安来市荒島町 安来市久白町 |
| 平成11年度 (1999年度) | | | 島田遺跡 柳遺跡 柳Ⅱ遺跡 小久白埴高群 | 東出雲町掛尾町 安来市荒島町柳 安来市荒島町柳 安来市久白町字小久白 |

注：【塙津丘陵遺跡群】島根県教育委員会1998掲載分に追加

第2章 位置と環境

塩津丘陵遺跡群は、島根県の東端に広がる安来平野西側縁辺の中海にほど近いところ位置している。安来平野は、中国山地に源を発し、南流して中海に注ぐ飯梨川と、伯太川、そして安来市南部を源流とする吉田川の3河川の沖積作用により形作られた平野である。現在平野の北側は、中海に突出して三角州を形成し、広い水田地帯となっている。

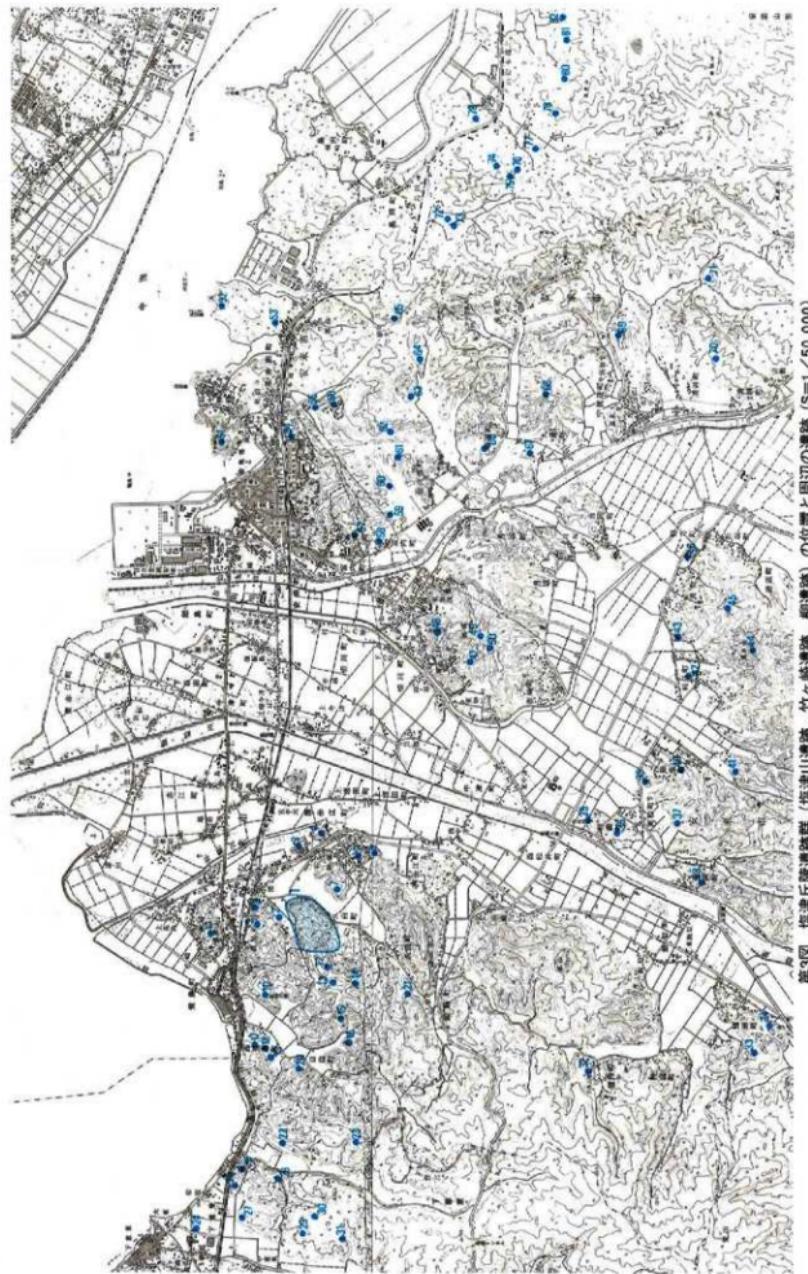
しかしこの三角州の大部分は、近世以降の鉄穴流しによる莫大な土砂流出によるところが大きく、古代においては現中海が現在の平野内にかなり湾入していた可能性が高い。このことは、奈良時代に編纂された『出雲國風土記』¹²¹に、現国道9号線のすぐ北にある山が「飯島」として「入海」の項に記載されていることや、国道9号線の南側にある荒島、赤江、塩津、今津、中津などの地名からもうかがうことができよう。一方塩津丘陵遺跡群も現在、北、東、南側の三方を水田面に囲まれているが、前記したように水面に近い環境であったことも想定される。本遺跡群のすぐ北側の谷で調査された岩屋遺跡では、波打ち際と考えられる遺構が検出されており¹²²、弥生時代後期末の段階ではなくとも遺跡群の北側には水面が迫っていた可能性が高い。東側や南側の詳細は明らかではないが、現在の地形を見ると、塩津丘陵遺跡群は海もしくは湖に突出した岬状を呈していた可能性もある。

さて、この安来平野の周辺地域は、島根県内においても有数の遺跡密集地域である。旧石器時代から縄文時代の遺跡の検出例はまれだが、近年、わずかずつながらあきらかになってきている。旧石器時代の遺物としては、安来市黒井田町の小汐手遺跡、吉佐町のカンボウ遺跡、縄文時代の遺物は、安来市島田町の島田黒谷Ⅰ遺跡を始め、黒井田町の高広遺跡や吉佐町の石田遺跡などでも少量ながら縄文土器の出土が知られ、古くからこの地域で人々が生活していたことがわかりつつある。

弥生時代になると、多くの遺跡が確認されるようになる。弥生時代前期の遺跡は発見例が少ないが、本遺跡群の柳Ⅱ遺跡から壺棺が検出されている¹²³。弥生時代中期前半では、荒島地区西側の八束郡東出雲町磯近遺跡までまとまって土器が出土しており、平野部の開発が進んだことをうかがわせる。弥生時代中期中葉以降安来平野では吉佐町山ノ神遺跡、黒井田町高広遺跡、などの遺跡が知られている。現状では、調査が丘陵部に偏り気味なことが弥生時代中期以前の遺跡の検出例が少ないと関連している可能性が高く、今後平野部の調査が進めば、遺跡は増加するものと考えられる。

弥生時代後期になると遺跡の検出例が格段に増加する。集落については、丘陵上に住居跡が検出される例が目立つ。鳥取県境に近い門生町陽徳遺跡では、中海を眼下に見下ろす標高80mの山頂から堅穴住居跡が検出され、その立地から見張り等の機能を持つ「高地性集落」と推定される。その他にも、オノ神遺跡、岩屋口北遺跡、白コクリ遺跡、大坪遺跡などからも丘陵上で建物跡が検出されている。これらの遺跡の大部分が塩津丘陵遺跡群で検出された集落跡と同時期に展開しており、注目される。一方、弥生時代後期の墳墓の調査例も多い。荒島地区を中心に、数多くの四隅突出型墳丘墓（仲仙寺墳墓群、安養寺墳墓群、下山墳墓など）¹²⁴が知られている。四隅突出型墳丘墓以外にも、墳丘や区画を持つ例も多く、雞尾土墳墓群、白コクリ遺跡、長曾土墳墓群などが挙げられる。また、九重土墳墓群をはじめとして墳丘が不明瞭な例も多く認められる。

古墳時代前期には、荒島地区で大規模な方墳である造山1号墳、3号墳、大成古墳¹²⁵が築かれるほか、平野東の丘陵には新林古墳群など小規模な古墳が知られている。門生町の五反田1号墳は平野



第3図 塩津丘陵遊歩群（塩津山遊歩、竹ヶ崎遊歩、網道游）の位置と周辺の道路 (S=1/50,000)

塩津丘陵遺跡群周辺の遺跡一覧表

| | | | |
|---|---|--|--|
| 1 塩津丘陵遺跡群 塩津山墳墓群 塩津山遺跡 竹ヶ崎遺跡 柳越跡 柳ヶ崎遺跡 | 四隅突出型墳丘墓2、占墳9等、 弥生後期集落 弥生後期、占墳後期集落 弥生後期、占墳後期集落 弥生後期、占墳後期集落 弥生後期、占墳後期集落 | 40 今若谷古墳群 41 えぐり谷横穴墓群 42 小林遺跡 43 蔵戸山遺跡 44 清水山土塁墓群 45 鍵尾土塁墓群 | 円墳(28m、石棺等) 前方後円墳 20穴以上 赤牛塗穴住居 弥生後期住居跡 弥生土塁墓群 弥生後期塙墓、土塁墓群 |
| 2 小久白墳墓群 | 弥生終末期台状墓 | 46 敦吳寺跡 | 奈良寺院跡 |
| 3 安養寺塙墓群 | 四隅突出型墳丘墓2 | 47 小谷土塁墓 | 古墳前期 |
| 4 宮山塙墓群 | 四隅突出型墳丘墓1、前方後方墳他 | 48 加茂古墳 | 箱式石棺、櫛床 |
| 5 仲仙寺塙墓群 | 四隅突出型墳丘墓3 | 49 切川土塁墓群 | 赤崎上塙墓群合む |
| 6 下山墳丘墓 | 四隅突出型墳丘墓 | 50 赤崎横穴墓群 | 3穴 |
| 7 橋松古墳群 | | 51 十神山古墳 | 長持形石棺 |
| 8 仏山古墳 | 後期古墳、御喰環頭大刀、馬具等 | 52 浦ヶ部遺跡 | 前方後円墳、古墳集落等 |
| 9 大成古墳 | 前期方墳、堅穴式石室、鏡等 | 53 長曾土塁墓群 | 弥生後期土塁墓、区画墓 |
| 10 造山古墳群 | 前期方墳2、中期方墳、前方後方墳 | 54 規壳塚古墳 | 前方後円墳50m、舟形石棺 |
| 11 高坂山古墳 | 後期方墳? | 55 奈良山古墳 | 長持形石棺 |
| 12 岩屋遺跡 | 古墳前期海岸線 | 56 高広遺跡 | 横穴墓13、弥生、古墳以降集落 |
| 13 神庭谷遺跡 | 弥生末、古墳後期以降散布地 | 57 新林古墳群 | 前期古墳 |
| 14 若塚古墳 | 終末期古墳、横穴式石室 | 58 あんもじ山古墳 | 円墳(1基は径35m) |
| 15 中山遺跡 | 奈良火葬墓 | 59 宮内遺跡 | 弥生後期集落、横穴墓2他 |
| 16 亀の尾古墳 | 遺物散布地 | 60 大原遺跡 | 弥生後期集落、古墳玉作、横穴墓 |
| 17 西荒古墳群 | 中期古墳3(大廻方墳あり) | 61 白コクリ遺跡 | 弥生後期集落、墳墓、横穴墓19他 |
| 18 塩田横穴墓群 | 修正正家形横穴墓 | 62 岩黒口北遺跡 | 弥生後期集落、横穴墓12穴 |
| 19 塩田古墳群 | | 63 越幹遺跡 | 弥生後期、古墳後期~奈良集落 |
| 20 客山古墳群 | | 64 オノノ神遺跡 | 弥生後期集落、奈良~平安祭祀 |
| 21 山の神古墳群 | | 65 猿ノ谷遺跡 | 弥生後期住居跡 |
| 22 備前山古墳群 | | 66 叶谷遺跡 | 弥生後期集落 |
| 23 卷林横穴墓 | | 67 大坪古墳群 | 弥生後期住居跡、中期古墳6 |
| 24 磯近遺跡 | 弥生土器、石斧 | 68 九重土塁墓群 | 弥生後期土塁墓群 |
| 25 金成山古墳 | 石棺式石室 | 69 清水大日堂裏遺跡 | 弥生土塁墓群、横穴、近世墓 |
| 26 岩屋古墳群 | 前方後方墳1(30m)、方墳3 | 70 清瀬山古墳群 | 13基(前方後円墳2、47m, 33m) |
| 27 まろつか古墳 | 円墳 | 71 大人原古墳群 | 4基(前方後円墳1) |
| 28 榎廻古墳群 | 前方後方墳、方墳等7 | 72 岩田黒谷1号窓 | 绳文、弥生後期散布地 |
| 29 油免古墳群 | 方墳、円墳6 | 73 葵請場遺跡 | 弥生後期、古墳後期~平安集落 |
| 30 焼田古墳群 | 方墳7、箱式石棺等 | 74 門生高畠古窯跡群 | 須恵器窯跡群(山陰I期) |
| 31 妙子谷古墳群 | 方墳2 | 75 岩田黒谷2号窓 | 弥生末土塁墓群 |
| 32 魚梨岩舟古墳 | 後期古墳、石棺式石室 | 76 門生山根1号窓 | 5世紀末須恵器窯跡 |
| 33 かわらけ谷横穴墓群 | 13穴以上、環頭大刀など | 77 門生黒谷Ⅲ遺跡 (五反田古墳群) | 弥生後期集落、前~中期古墳6(25m円墳) |
| 34 霧ノ湯病院跡横穴墓群 | 8穴以上、石棺、環頭大刀、冠等 | 78 陽徳遺跡 | 弥生後期高地性集落 |
| 35 龍義神社遺跡 | 弥生堅穴住居跡 | 79 山根古墳 | 前方後円墳 |
| 36 龍義神社奥の院古墳群 | 12基(1基は径35m) | 80 五反田遺跡 | 古墳後期~飛鳥集落(銀治) |
| 37 視谷横穴墓群 | 金環、頸渦器 | 81 御見津遺跡 | 古墳後期~奈良集落(銀治) |
| 38 矢田古墳群・横穴墓群 | 古墳107基、横穴墓57穴 | 82 山ノ神遺跡 | 弥生中期、古墳後期集落 |
| 39 意多岐神社古墳群 | 3基、横穴墓3穴 | 83 101 | |

東側では最大の円墳で、直径25m、整穴式石室を持つ²⁰。古墳時代中期には荒島地区に宮山1号墳等引き続き大型の前方後方墳や方墳が築かれる一方で、飯梨川を挟んで東側の丘陵では尾高塚古墳を始めとする前方後方墳やあんもち山古墳を始めとする円墳が築かれ、対照を為している。

古墳時代後期には、飯梨川西岸では飯梨岩舟古墳や塩津神社古墳を始めとした精緻な石棺式石室が築かれるが、東岸では県境の神代塚古墳を除いては全く石室墳は見られず、もっぱら横穴墓が造られている。横穴墓は安来平野周辺のはば全城で造られ、石棺や金銅装大刀・馬具などの優秀な副葬品を持つものも少なくない。代表的な例としては、鶴の湯病院跡横穴墓群、臼コクリ横穴墓群²¹、宮内横穴墓群²²、高広横穴墓群²³、穴神横穴墓群²⁴などが挙げられる。古墳時代の集落は中期以降、丘陵の斜面で多く検出されている。岩屋口南遺跡²⁵、高広遺跡²⁶、門生黒谷II遺跡²⁷などが代表例である。生産遺跡は佐久保町大原遺跡や吉佐町平ラII遺跡で玉作が、門生古窯跡群²⁸では須恵器生産が、吉佐町五反田遺跡²⁹等では鍛冶が行われていたことがそれぞれわかっている。

以上のように、安来平野周辺は多くの遺跡が残され、出雲地方において重要な位置を占めている。

註

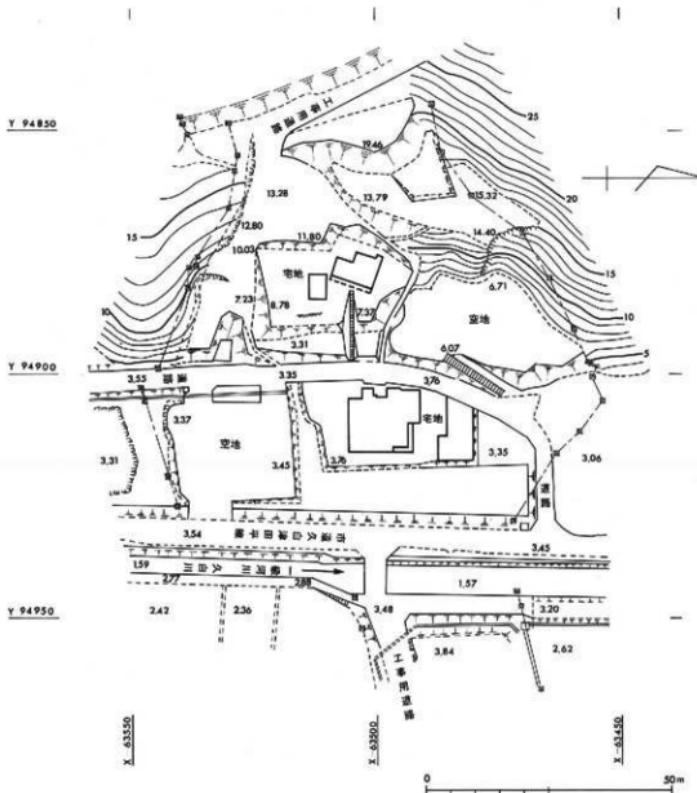
- (1) 加藤義成『修訂 出雲国風土記参究』1957
- (2) 安来市教育委員会『岩屋口遺跡 柳地区住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2000
- (3) 安来市教育委員会『小汐手遺跡・黒井田小林遺跡』1999
- (4) 島根県教育委員会『石田遺跡・カンボウ遺跡・園吉遺跡 一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』(以下一般国道9号~報告書までを安来道路と略す。) 1994
- (5) 島根県教育委員会『オノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷I遺跡 安来道路9』1995
- (6) 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984
- (7) 島根県教育委員会『石田遺跡Ⅱ 安来道路15』1998
- (8) 島根県教育委員会『柳II遺跡・小久白塙墓群・神庭谷遺跡 安来道路西地区Ⅳ』1996
- (9) 石井悠ほか「原始・古代」『東出雲町史』1978
- (10) 島根県教育委員会『山ノ神遺跡・五反田遺跡 安来道路16』1999
- (11) 島根県教育委員会『陽徳遺跡・平I遺跡 安来道路11』1995
- (12) 島根県教育委員会『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡(F区) 安来道路13』1997
- (13) 島根県教育委員会『臼コクリ遺跡・大原遺跡 安来道路V』1994
- (14) 島根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1976
- (15) 出雲考古学研究会『荒島塙墓群』『古代の出雲を考える』4
- (16) 山本清『山陰の土師器』『山陰文化研究紀要』第6号 1965
- (17) 安来市教育委員会『長曾十塙墓群』1981
- (18) 本村豪章ほか『既掘前期古墳資料の総合的検討』1992 安来市教育委員会『大成古墳第3次発掘調査報告書』1994
- (19) 安来市教育委員会『市道清水線試掘調査概要』1993
- (20) 島根県教育委員会『門生黒谷I遺跡・門生黒谷II遺跡・門生黒谷III遺跡 安来道路14』1998
- (21) 出雲考古学研究会『石棺式石室の研究』『古代の出雲を考える6』1987
- (22) 島根県教育委員会『越峰遺跡・宮内遺跡 安来道路IV』1993
- (23) 島根県教育委員会『平II遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群 安来道路10』1995

第3章 塩津山遺跡

第1節 平成10（1998）年度発掘調査の経過と概要

平成10（1998）年度に調査した際に残された部分（国道用地買収に伴う家屋移転跡）を発掘調査した。今回の調査区は塩津山遺跡中の東側斜面に位置する。標高3.76m～18mにかけての部分である。

発掘調査は平成10（1998）年7月22日から、重機による主要部の表土掘削、また、同じく、重機による移転家屋の基礎構造物の除去などの作業を開始した。その後、8月3日から人力による荒掘り、精査の作業を標高の高い部分から順次開始した。発掘調査の結果、竪穴住居跡2、加工段状遺構6、須恵器溜まり1、土器溜まり1などを検出し、これらに伴う遺物を取り上げた。この間、遺構・遺物



第4図 塩津山遺跡平成10年度調査前地形図 (S=1/1,000)

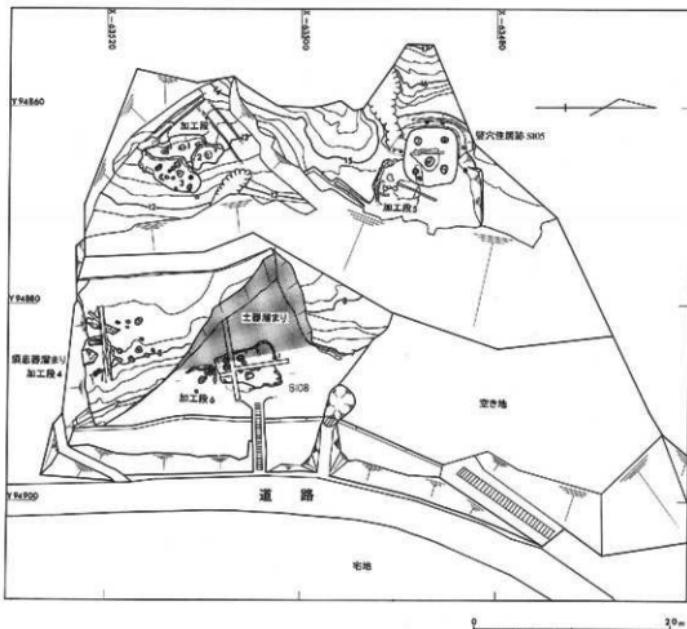
の検出・出土状況にかかる写真・実測図および測量図、測量データ等の現地記録を取り、1998（平成10）年12月4日現地発掘調査を終了した。

第2節 調査の結果

加工段1～3について

東に傾斜する畑地の表土を取り去ると、標高13.5mから12.5mにかけて、南北9m×東西6mの加工段が検出された。検出時は暗灰茶色土や暗茶色土、地山粒土、焼土粒、炭粒に覆われて一体と見えていたが、掘り進めるにしたがって三段に分かれていることがわかった。それぞれの加工段に柱穴もしくは柱穴列とみられるものやピットが検出された。建物や上屋の構造を即座に見て取ることは困難であるが、加工段1は掘立柱建物跡、加工段2は加工段もしくは竪穴住居跡、加工段3は掘立柱建物跡あるいは竪穴住居跡が想定できると思われる。加工段どうしの切り合いから加工段1→加工段2→加工段3の変遷が考えられる。

これらの遺構に伴う遺物としては、各々の加工段から弥生時代後期後半～古墳時代中期にかけての上器片が多く出土したが、その遺存状態は悪く細かいものが多かった。加工段2については圓化でいるものはなかったが、加工段1では弥生時代後期後半の甕片が、加工段3からは古墳時代中期の土師器高壺や手捏ねの小型壺あるいはミニチュアと思われる土器などが出土している。これらの遺



第5図 塩津山遺跡平成10年度調査区遺構位置図 (S=1/500)

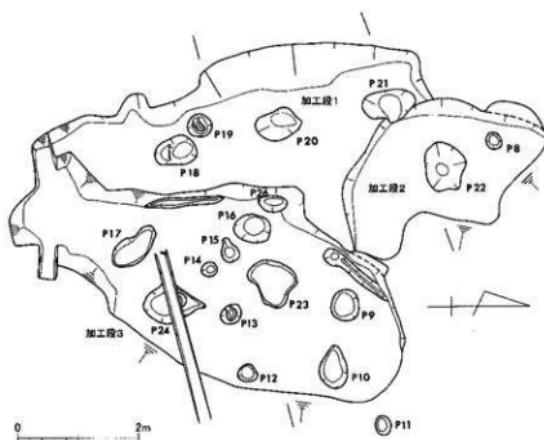
物は各々の加工段の時期を反映しており、先に述べた変遷を裏付けるものと思われる。

造構面のようすから見て作業スペースや居住空間以外の機能用途は考えにくいと思われる。しかし、3つの加工段を覆っていた覆土中に焼土とみられる土が非常に多く混じっていたことと、手捏ね土器の出土については、これらの加工段の性格

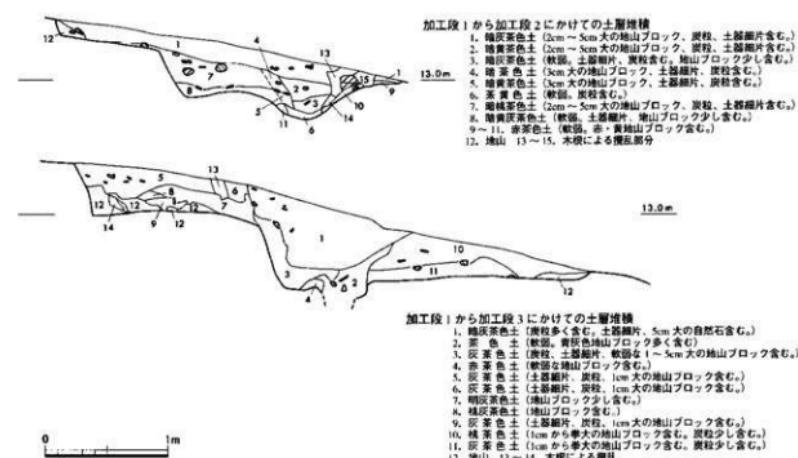
を考慮する上で若干の検討を要することと思われる。

豎穴住居跡SI05について

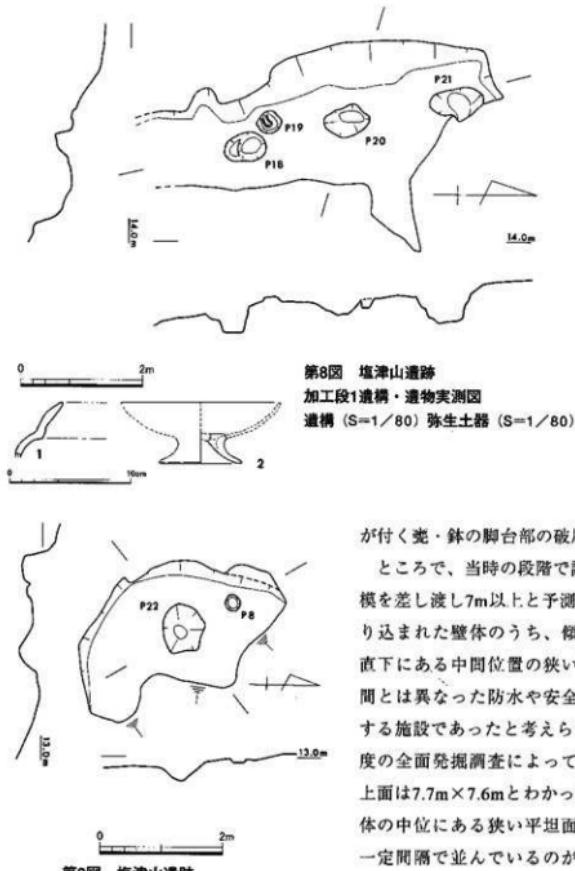
東側斜面の標高15m付近から隅丸方形に掘り込まれた豎穴住居跡SI05を検出した。このSI05は1994（平成6）年度の調査においても西側半分が床面まで調査された。当時まだ移転していなかつた直下の家屋に影響するため、調査区東端で検出されたSI05の発掘調査は、その位置的制約から、床面積の約半分程度まで行ったところで打ち切ることを余儀なくされた。床面の調査はピットや柱



第6図 塩津山遺跡加工段1~3造構実測図 (S=1/80)



第7図 塩津山遺跡加工段1~3土層断面実測図 (S=1/40)



第8図 塩津山遺跡
加工段1遺構・遺物実測図
遺構 (S=1/80) 弥生土器 (S=1/80)

穴の検出面で止めている。このときの堅穴住居跡SI05西側半分の調査結果によれば、西側を2段に囲む壁体、堅穴住居跡の床面から柱穴の痕跡あるいはピットと見られる検出面が計6か所、焼土面2か所などが検出されている。また、これらの構造に伴う遺物として、覆土および床面から出土した弥生時代終末期(塩津5期)の甕、釜形器台、高壇もしくは脚

が付く甕・鉢の脚台部の破片等が報告されている。
ところで、当時の段階で調査担当者はSI05の全体規模を差し渡し7m以上と予測している。また、2段に掘り込まれた壁体のうち、傾斜の緩い上段部分とその直下にある中間位置の狭い平坦面について「居住空間とは異なった防水や安全のための堅穴住居に関連する施設であったと考えられる。」としている。この度の全面発掘調査によって、堅穴住居跡SI05の掘方上面は7.7m×7.6mとわかった。また、2段にわたる壁体の中位にある狭い平坦面の直下には小穴の痕跡が一定間隔で並んでいるのが検出され、屋根の垂木を受けていた可能性が考えられる。このことは、この狭い平坦面が雨だれを逃がすための構造であった可能性をも示唆している。

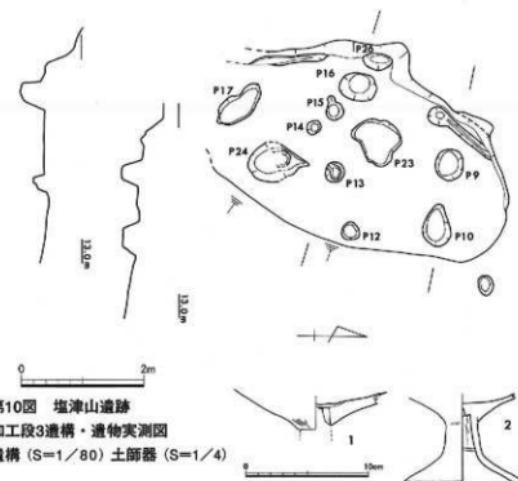
前回担当者の推定を裏付ける資料となり得る。いずれにしても、住居の構造を考える上で貴重な資料を得ることができた。SI05について、前回の調査成果を述べるに当たり若干先走ってしまったが、今回の発掘調査の成果と併せたその全容は次のようになると思われる。

規模・形状について

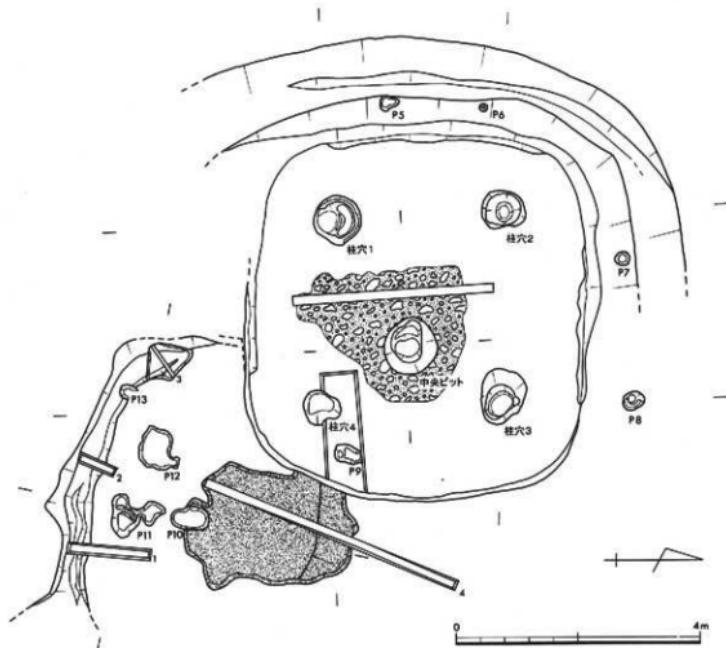
堅穴の検出上面で7.7m×7.6m、床面で5.5m×5.9m、床面積28.43m²を測り、比較的大規模な堅穴住居跡と思われる。床面の形状は隅丸方形を呈する。

竪穴の構造について

竪穴の掘り方・壁体は西側において最高137cmを測るが、東側については12cmしか検出されなかった。西側から北側にかけては一部3段ないし2段および、前段で述べたように狭い平坦面が検出された。南側は壁体の検出に失敗したので正確なところは不明だが、北側は西から東にかけてなだらかに低くなっているようすが検出された。また、前段で述べた屋根材を受けるとみられる小穴も傾斜に沿って



第10図 塩津山遺跡
加工段3造構・遺物実測図
造構 (S=1/80) 土師器 (S=1/4)

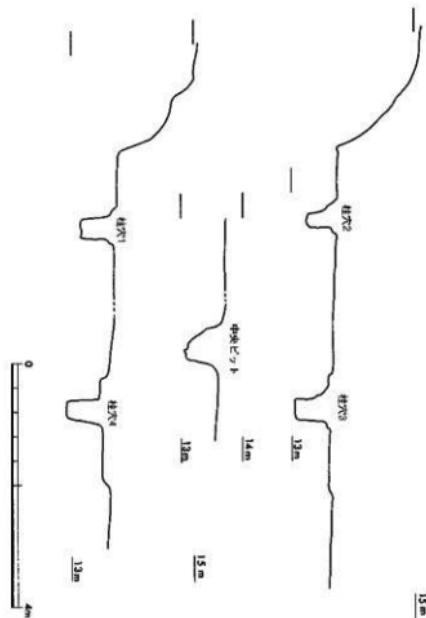


第11図 塩津山遺跡SI05・加工段5造構実測図 (S=1/80)

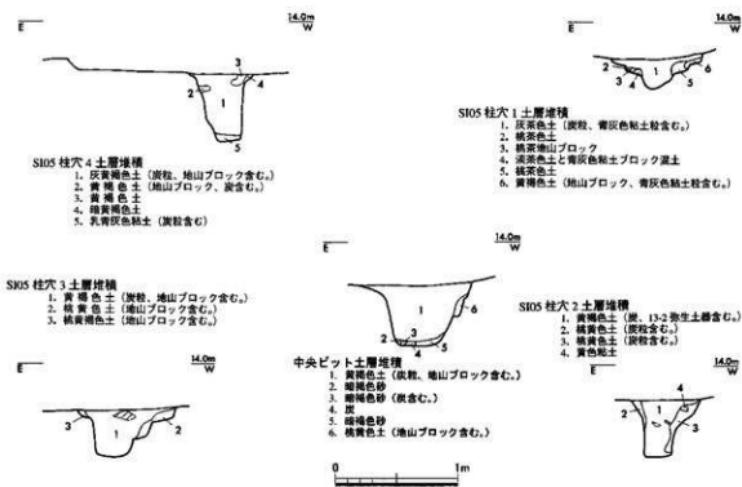
検出された。東側はほとんど壁体がないと言っても過言でなくくらい低い。したがって、掘り方・壁体自体は、南北軸から見て全体に西から東にかけての斜切り状を呈していると見ることが可能と思われる。これは原地形である斜面の傾斜をほとんど改変せずに最大限利用した結果とも受け取ることができる。

上屋の構造について

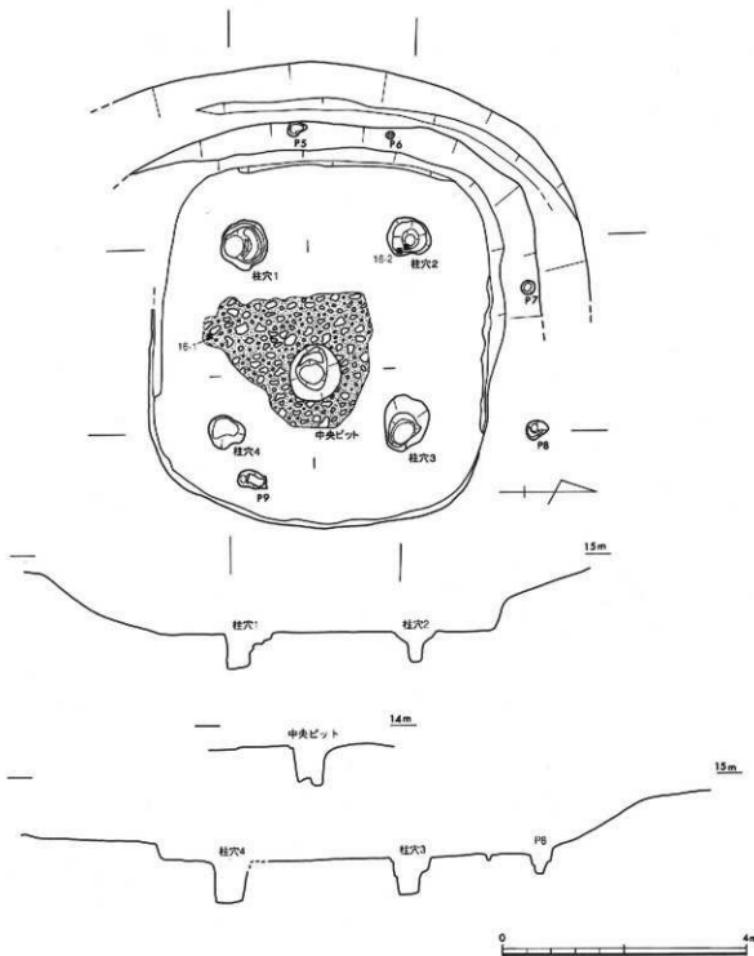
この堅穴住居跡に建てられていた建物自体の上層構造については、先程から述べている屋根材を受けているとみられる小穴と、その直上の狭い平凹面が注目される。仮にこれらを屋根と雨落ち溝・排水溝とした場合、水をどこへ導いて逃がそうとしているのか手がかりになる造構は検出されていない。しかし、床面に穿たれた4つの柱穴とこれらの小穴、平坦面、壁体の形状の検出は、この堅穴住居跡の上層構造を考えるうえで多くの手がかりを消し去り、回答へと導く重要な手がかりとなろう。



第12図 塩津山遺跡SI05遺構実測図1 (S=1/80)



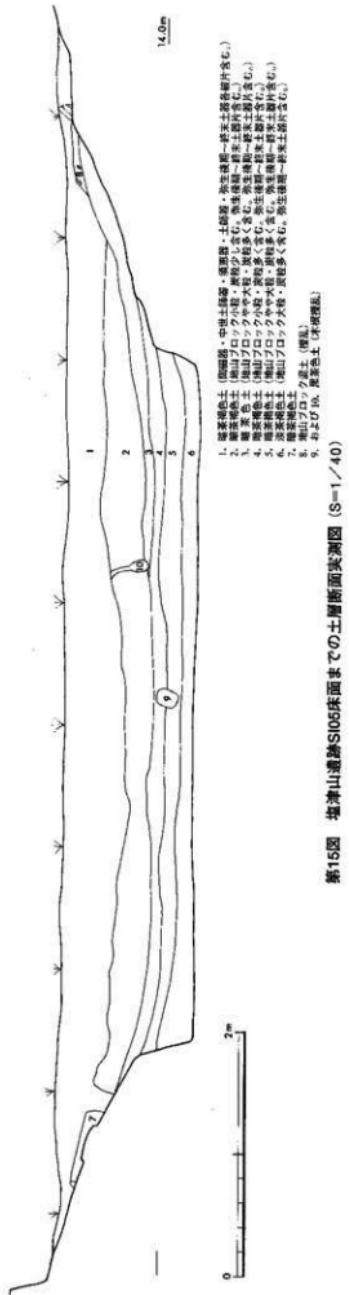
第13図 塩津山遺跡SI05中央ピット・柱穴土層断面実測図 (S=1/40)



第14図 塩津山遺跡SI05塗構実測図2 (S=1/80)

床面の構造について

小石や砂などを用いた堅固な床面構造が中央ピットの周辺で検出された。この張り床構造は、中央ピットの埋土によって切られているようですが検出されており、最上部が削平、あるいは検出精度の失敗がなければ、張り床構造と中央ピットとの共存、または、張り床構造を切って中央ピットを掘り込んだという推測が可能になると思われる。張り床は中央ピットの周辺でしか検出していない



ので床面全体にこのような構造があったのか検出部分を中心とする一部にのみあったのかにわかには断じ難い。また、このような構造の機能・効果についても、床面の安定補強以外に何があるのかよくわからない。

この竪穴住居跡SI05の床面と壁体の接点には、あまり明確でない壁体溝の痕跡が検出された。この溝跡は全辺におよぶものではなく、東側の一辺とその両角からは検出されなかった。このことは、東側において竪穴の掘り込みが浅い状態で検出されたことと関連している可能性があると思われる。

中央ピットについて

中央ピットは4つの主柱穴と比較して若干大きいといえる。深さは同じくらいの深さの柱穴もある。掘り方はかすかに2段になっているようすがうかがえるが、縁の角が取れたのかも知れない。土層堆積を観察すると、いずれも最低部にわずかながら粒の大きい消し炭や暗褐色砂の堆積がみられる。これらの堆積物は他の柱穴からは検出されないものである。また、穿たれた位置はSI05の床面全体から見ると少し東に偏っている。これらのことから、中央ピットは、他の4つの穴の痕跡がその配置から上屋を支えた柱穴痕であろうことが容易に推測されるのに対して、それらとは違った役割を担っていた可能性を示すものと思われる。

遺物について

竪穴住居跡SI05の覆土からは弥生土器（弥生時代後期以降）、土師器、須恵器などが出土した。しかし、床面に近いSI05そのものに由来するとみられる遺物は多くない。また、その中でも図化できるものはさらに少ない。第16図に示した2点だけであった。16-1は塙津山遺跡写真図版3中段にもあるように柱穴1と柱穴4の中間点、張り床構造の直上面から出土している。また、16-2は柱穴2の第1層から出土したものである。いずれも甕の口縁部から肩部にかけての破片である。ま

た、遺存状態が悪く器表面の観察に耐えないが、胎土、色調、形式などからみて塩津5期の様相を呈するものとみられる。ことに、16-1はその出土状況から見てSI05の時期を示していると思われる。この堅穴住居跡SI05の時期を塩津5期に求めることは前回の調査結果とも符合する。

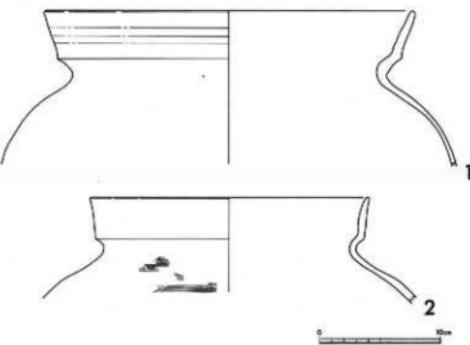
加工段5との関係について

堅穴住居跡SI05は加工段5とした造構（後述）と切り合っている。

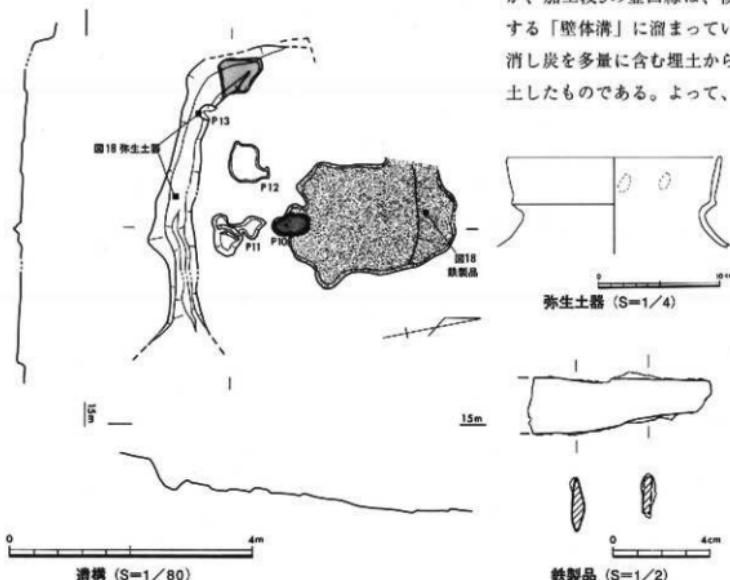
検出精査の過程で堅穴住居跡SI05が優先しており、加工段5を切っているようですが確認できた。また、加工段5がSI05を埋め立てて造成されていることを物語る資料は得られていないので、当時の住人たちは加工段5を切って堅穴住居跡SI05を造成したものと考えられる。

ところが、造構面レベルでの出土遺物について両者の間に顕著な時期差が認められない。第17図に示した加工段5から出土した土器も形式は壺形だが、16-1および16-2同様塩津5期の様相を示していると思われる。しかし、これらの出土状況においては若干検討の余地がある。16-1は床面構造の

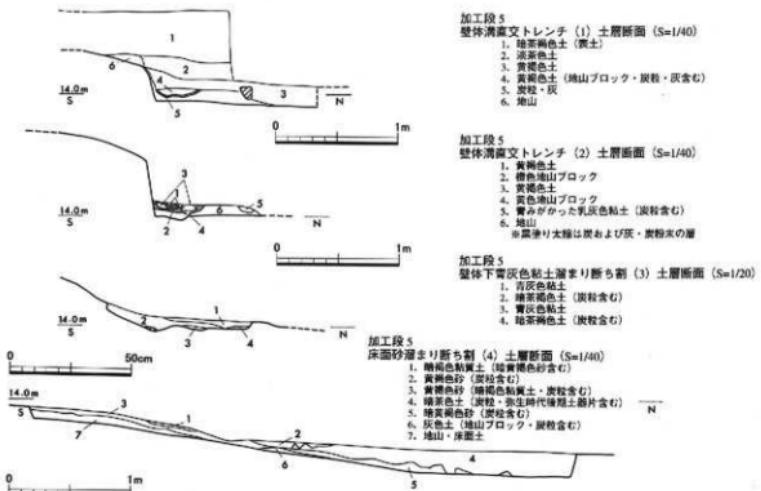
直上から出土したものであるが、加工段5の壺口縁は、後述する「壁体溝」に溜まっていた消し炭を多量に含む埋土から出土したものである。よって、加



第16図 塩津山遺跡SI05遺物実測図2 (S=1/4)



第17図 塩津山遺跡加工段5造構・遺物実測図



第18図 塩津山遺跡加工段5壁体溝等土層断面実測図 ($S=1/40$, $S=1/20$)

工段5の造成自体は遡る可能性が指摘でき、このことからも加工段5→SI05の変遷が裏付けられると思われる。

加工段5について

標高14.5m付近から現状で50cm程度掘り込みのある加工段を検出した。

規模・形状について

加工段の奥行きは残存最長部分で4.8m、最大幅5mを測る。検出された床面は、やや北東側に傾斜しており、竪穴住居跡SI05のように水平な状態では検出されなかった。東側は下段の宅地造成によって切られている可能性が高く、西側は前述のように竪穴住居跡SI05に切られている。南側は加工段5と旧地形との境界が判然とせず、土地利用状況の復元は困難である。現状では加工段と表現するが、隅丸方形の竪穴住居跡の可能性も考慮したいところである。

溝跡について

残存する壁体に沿ってその直下には、最大幅46cm、最深16cmの溝跡が巡っていた。この溝跡には消し炭、灰、黄色土、粘土などが混交した堆積層があった。この溝跡の堆積層中2か所から出土した弥生土器片が接合し、第17図に示した弥生土器の頸部から口縁部にかけての部分であることがわかった。

溝跡には、それと絡む二種の遺構が検出された。まず、床面との境目にピットP13と名付けた窪みが検出された。また、溝跡が北から西に回り込んで浅くなり、床面と区別が付きにくくなる位置で、スクリーントーンで示した青灰色粘土溜まりがあった。

窪みについては形状、深さ、他の遺構との位置関係などから見て、構造物の柱穴などとは考えにくいと思われる。

青灰色粘土溜まりの粘土は溝跡の堆積物中にわずかに混交している（第18図加工段5壁体溝直交トレンチ（2）土層断面図第5層）ものの、加工段5の他の遺構からはほとんど検出されていない。

このように、限定的な区域から検出されているので床面構造の一部が残ったものとは考えにくいと思われる。日常生活における何かの家事、あるいは生産に関わる遺構であろうか。

床面および砂溜まりについて

床面から、多量の粗い砂を主要な混交物とする薄い堆積層が検出された。この堆積層は、不整形な隅丸方形の範囲に広がっている。堆積層の南側には後述するピットP10が掘り込まれている。また、溝跡や塗体、その他のピットなどとの位置関係から見て、この堆積層が加工段5と全く無縁の遺構である可能性は低いと考えられる。この砂溜まりとも言える区域は、最長2.8m、最大幅1.8mの範囲において、最深6cmを測る。この砂溜まりは、隣接する堅穴住居跡SI05の中央ピット周辺で検出された床面構造に比較してやや軟弱な印象を受けた。小石など、荒砂の粒子と比べて明らかに大きさの違う混交物は入っておらず、両者の用途の違いがうかがわれる。

なお、砂溜まりの検出位置において、加工段5は、隣接する堅穴住居跡SI05の掘り込みによって完全に切られている。

この砂溜まりからは、第17図に示した用途不明鉄製品が出土した。

ピットについて

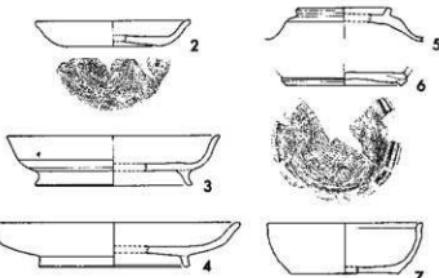
加工段5の床面からは、溝跡と絡んで検出されたピットP13の他に3個のピットが検出された。

遺物について

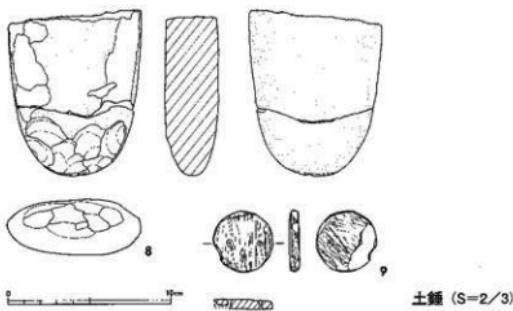
第17図に示した弥生土器頸部から口縁にかけての破片は、淡い黄褐色を呈し、器壁は薄い。複合口縁の立ち上がりはやや斜め上方に比較的高く伸びる。遺存状態は劣悪で器表等の観察に耐えないが、口縁外面はおそらく無文と思われる。塩



土器 (S=1/4)



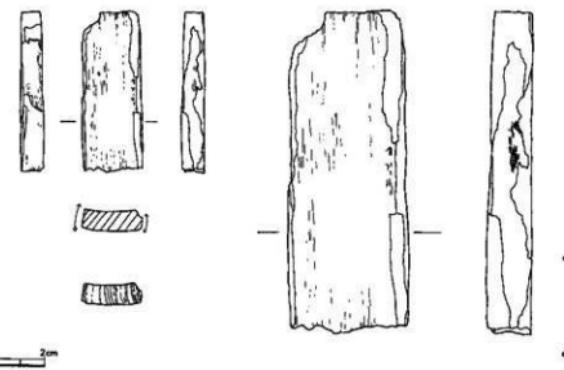
須恵器 (S=1/4)



石器・石製品 (S=1/3)

土鉢 (S=2/3)

第19図 塩津山遺跡SI05・加工段5周辺遺構出土遺物実測図



第20図 塩津山遺跡SI05・加工段5周辺邊構外出土遺物実測図2

磨石（右図一全体実測図S=1/2、左図一部拡大図は実物大）

津5期（弥生時代終末期）の特徴を示すものとみられる。豊穴住居跡SI05の項でも述べたように、切り合う2つの邊構の時期を知る手がかりとなる出土土器に顕著な時期差は認められない。

第17図に示した鉄製品の出土位置は、同第17図左の邊構図に示した砂

堆積層範囲の北端に近い中央部分、砂堆積層の底からであった。全体に厚く寸詰まりのようであるが、刀子の間から茎尻までの部分に相当する断片の可能性がある。しかし、一方では、断面の形状からして鉈の断片の可能性も指摘できると思われる。

豊穴住居跡SI05および加工段5周辺邊構外出土遺物について

豊穴住居跡SI05および加工段5周辺から第19図および第20図に挙げた遺物が出土した。19-1は土師器壺である。暗黄褐色を呈し、胎土は粗いが焼成は良好である。口縁上部の外側をヘラ状工具で強くヨコナデして重口縁状にしている。古墳時代中期のもので、松山編年Ⅲ期の特徴を示す。

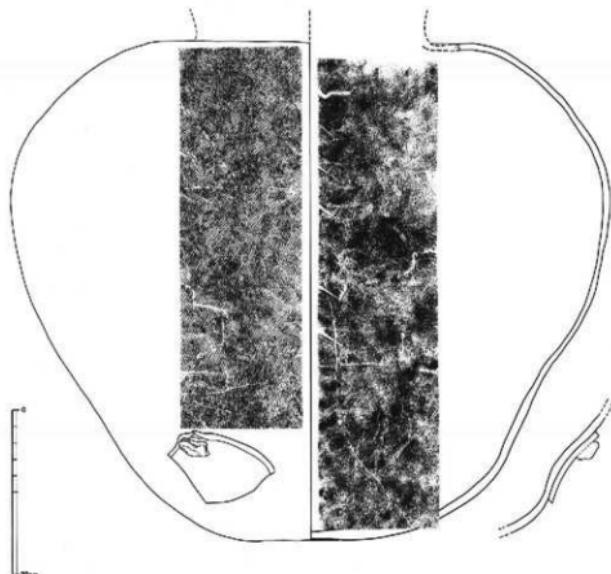
19-2~7は須恵器供膳具の破片である。19-2は高台を持たない皿、19-3・4は高台を持つ皿である。19-5は輪状つまみのある蓋壺の蓋とみられる。19-6は高台の痕跡を残す蓋壺の身と思われる。19-7は蓋が付かないタイプの杯である。須恵器皿19-3は外底に糸切り痕を残す。底部から立ち上がった体部は浅く、厚く、口縁端部は外反している。須恵器皿19-4は高台が比較的高くしっかりしており、体部は垂直に近い角度で立ち上がり、口縁端部は外反する。これら19-3・4は高広編年ⅣA期（8世紀中葉～後半）の特徴を示していると思われる。

須恵器皿19-4の高台は低い。体部中位に屈曲した段を持つ、また、口縁は開いて立ち上がり浅く見える。端部は丸く納める。須恵器壺蓋19-5は径の大きい輪状つまみを持ち、体部中位が屈曲して真横に伸びていき、ほぼ水平位置に屈折した端部が垂下する口縁が付くものとみられる。体部に極端に厚い部分があり、陰影としては若干奇異な感じを受ける。須恵器壺19-6は外底に糸切り痕を残す。底部外端から体部が立ち上がるその屈折点に輪高台が貼り付いているものとみられる。須恵器壺19-6の底部外面には、回転糸切り痕の上から刻まれたヘラ記号もしくはヘラ書き文字の一部が観察できる。これらの須恵器19-4~7は高広編年ⅣB期（8世紀末～9世紀前半）の特徴を示していると思われる。

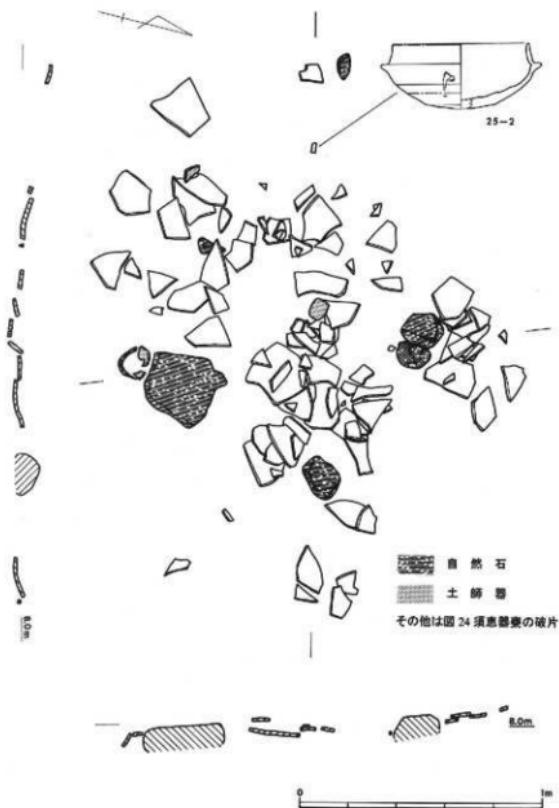
この区域からは石器や石製品、土錐が出土している。19-8は磨石である。全体を丁寧に丸く磨いているが、ミガキの方向は観察できなかった。丸みのある先端部のごく一部に平坦面が観察でき、これがこの磨石の使用面と思われる。しかし、使用痕は観察できなかった。片面にのみ角度の緩やかな剥離が見られるが、これは新欠である。19-9は滑石製の有孔円板である。これは2孔を対称的に配置したタイプである。最大径3.7cm、厚さ0.55cmを測り、重さ11.37gであった。全面に粗い溝状の研磨痕を残す。この研磨痕は太い筋では幅0.5mm程度を測る。側面の研磨の方向は不定である。側面に数ヶ所、整形加工の剥離を磨り残す。円板に穿たれた2つの孔はいずれも片面穿孔によるものである。19-10は管状土錐である。

第20図は珪化木を用いて作られた磨石である。断面長方形の両側面が使用面と思われるが、使用痕は観察できない。右側面に朱が付着しているものと思われる。広い面でなく、狭い側面を使用していること、左面に凹凸を磨り残すことから、手を持って使用したものと考えられる。

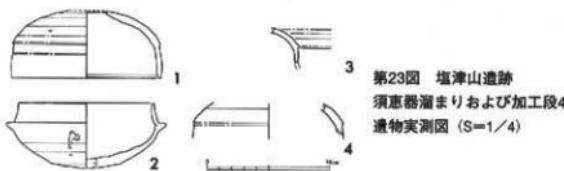
ところで、19-9で図示したような滑石製の有孔円板は、鏡の省略化された祭祀具とされ、古墳時代中期から後期を通じて歴史時代に至るまで、祭祀遺跡を中心に、墳墓、集落、生産の各種遺跡から他の石製模造品（白玉など）とともに普遍的に出土例があるとされる。しかし、塩津山遺跡堅穴住居跡SI05・加工段5周辺構外からは、この円板以外に石製模造品は出土していない。また、出土状況や有孔円板の特徴そのものから時期を特定することも難しい。ちなみに、前項でも述べたように、第19図に示した土師器19-1は古墳時代中期中葉、須恵器19-2～7は8世紀中葉～9世紀前半と大きく二時期に分けられる。このことから見れば、同じ包含層から出土した19-9有孔円板は前者



第21図 塩津山遺跡須恵器溜まり遺物実測図 (S=1/6)



第22図 塩津山遺跡須恵器溜まり遺構実測図 (S=1/20)



第23図 塩津山遺跡
須恵器溜まりおよび加工段4
遺構実測図 (S=1/4)

中にあるといえる。また、この須恵器溜まりの大半は須恵器壺の破片と人頭大の石で構成されており、この壺を復元すると底から肩部まで立ち上がるが、肩部の半分、頸部から口縁部にかけての全部を欠いている。壺の外面は平行線状のタタキ目を残し、内面は同心円状のタタキ目をナデ消している。口縁は欠いているが古墳時代中期末から後期初頭の特徴を示していると思われる。この須恵

に伴う可能性が高いと考えられる。

なお、塩津山遺跡では1998（平成10）年度の調査においても、1994（平成6）年度の調査においても、国道用地の調査区内では、19-2~7に示した須恵器の時期、8世紀中葉～9世紀前半にかけての遺構は確認されていない。これらの遺物の出土位置から見て、調査区北側区域に当該時期にかかる遺構分布の可能性が考えられる。

須恵器溜まりについて

移転家屋敷地の南東隅、標高8.5m、家屋敷地の造成土を30cm剥ぎ取った暗灰色土中に須恵器壺、須恵器壺壊、土師器壺の破片が人頭大の自然石とともに第22図に示したような状況で検出された。この須恵器溜まりは2.3m×1.9mの範囲に分布しており、平面的には後述する加工段4の溝を含めた床面部分とほぼ重なり、加工段4の埋土

器壺片のほとんどが内面を上にして検出されている。この場で破碎された可能性があると思われる。後述するように、この須恵器溜まりから出土した須恵器壺身の破片と加工段4の壁体溝から出土した須恵器壺身の破片が接合したが（第23図2）、須恵器溜まりの分布域と加工段4床面とは25cm程度の高低差があり、須恵器溜まり遺物除去後の加工段4床面検出に際しては、弥生時代後期後半のものと思われる土器の破片が若干出土していることもあり、一体の遺構と考えることは難しいと思われる。須恵器溜まりが加工段4の廃棄にかかる遺構という可能性は残されるかも知れないが、ここは、二つの遺構の間に一定の時期差を考慮すべきかと思われる。

この須恵器溜まりからは第23図に示した須恵器蓋坏が出土している。23-1・3~4は蓋である。23-1は天井部の2/3に回転ヘラケズリの痕跡を残し、中位肩部にしっかりとした突帯を持ち、天井部と体部の

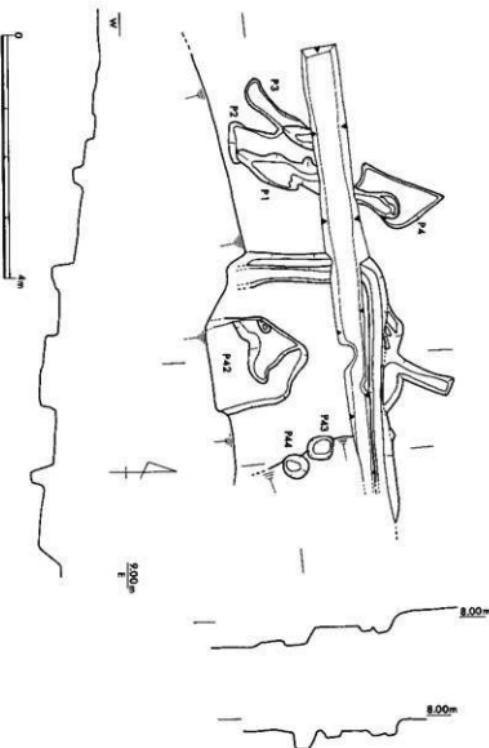
傾斜が明確に変換する。口縁端部内面に回転ヘラナデによる段もしくは沈線を施す。23-3・4も同様の型式と思われる。いずれも出雲1期の特徴を示す。

23-2壺身は須恵器溜まりから出土した破片と、後述する加工段4の壁体溝から出土した破片が接合した資料である。口縁径が比較的大きいこと、立ち上がりが上方に高く伸びていること、受部の突出が厚く、短く、真横に出ることなど、出雲2期の特徴を示すと思われる。

須恵器の時期から見れば、この須恵器溜まりは出雲2期にかかる古墳時代後期前葉以降の遺構と考えられる。また、加工段4はそれ以前の遺構であると考えられる。

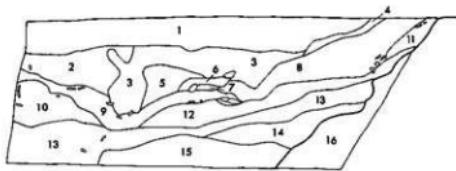
加工段4について

須恵器溜まりの須恵器や自然石、暗灰色土を除去すると、壁体溝を持ち、加工段状に残る遺構が検出された。加工段4とした。最も深い西側の掘り込みは標高8.2mから、掘り上げた床面の標高は7.8m程度であり、須恵器溜まりを含めた埋土の厚さは最も厚い部分で40cmを測る。南側と東側は宅地造成等の切り盛りによって大部分が削られていた。



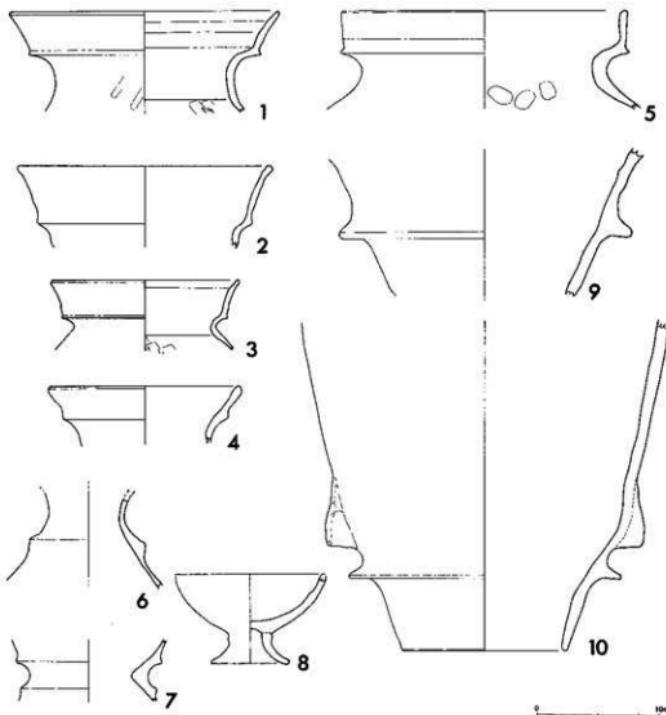
第24図 塩津山遺跡加工段4遺構実測図 (S=1/80)

E ————— W 9.00m



1. 稲葉色土 (土器片・焼粒含む。拳大的塊山ブロック含む。)
2. 稲葉色土 (土器片・塊山ブロック含む。燒粒多く含む。)
3. 稲葉色土 (塊山ブロック非常に多く含む。燒粒・土器片少し含む。)
4. 稲葉色土 (小石多く含む。)
5. 稲葉色土 (土器片・燒粒・塊山ブロック含む。)
6. 稲葉色土 (土器片・燒粒含む。)
7. 稲葉色土 (土器片・燒粒含む。)
8. 稲葉色土 (この種類土層の中で最も多く塊山ブロックを多く含む。炭粒・土器片少し含む。)
9. 暗灰茶色土 (土器片・燒粒多く含む。拳大的石片含む。)
10. 暗灰茶色土 (土器片・燒粒多く含む。塊山ブロック少し含む。)
11. 赤茶色土 (土器片と褐色の泥土の混土 (土器片含む。))
12. 茶色土 (塊山ブロック含む。)
13. 黑褐色土 (土器片・燒粒多く含む。塊山ブロック少し含む。)
14. 水茶色土 (土器片・燒粒・塊山ブロック少し含む。)
15. 暗灰茶色土 (燒粒少し含む。)
16. 地山 (燒粒少し含む。)

第25図 塩津山遺跡土器満まり土層断面実測図 (S=1/40)



第26図 塩津山遺跡土器満まり遺物実測図1弥生土器 (S=1/4)

前項で述べたように、須恵器溜まりにかかる遺物を除去した後、加工段4床面検出の過程で、図示できなかったが、若干の弥生時代後期後半のものと思われる土器の破片が出土している。また、床面には南側の崖に接して大きな擾乱とみられる掘り込み（第24図P42）があり、東側には加工段4と関連が定かでないピットが2つ（第24図P43・44）検出された。ピットP43の底の方には粗い砂が溜まっていた。この2つのピットからは後期のものと思われる弥生土器の破片が出土している。加工段4とした造構は、このように全体のうちのわずかな部分しか残っておらず、構造物があったかどうかも判然としないが、掘り込みに沿う「壁体溝」は非常に明瞭に残っていた。

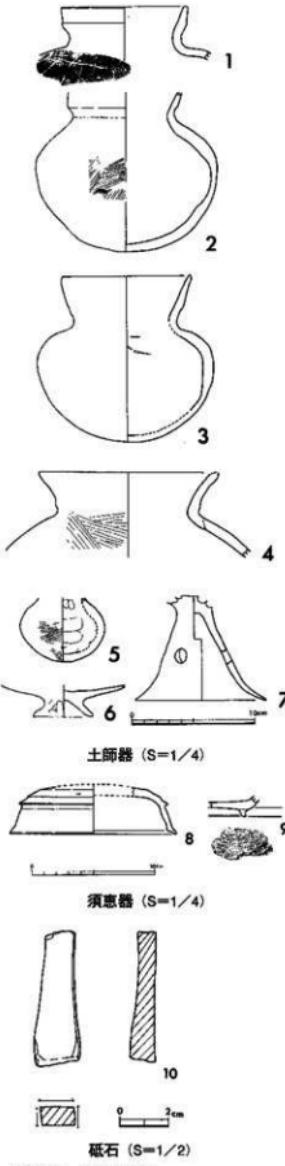
加工段4とした造構は、須恵器溜まりの遺物が比較的まとまった時期のものであったことから、古墳時代中期以前、弥生時代後期後半以降と考えられる。

土器溜まりについて

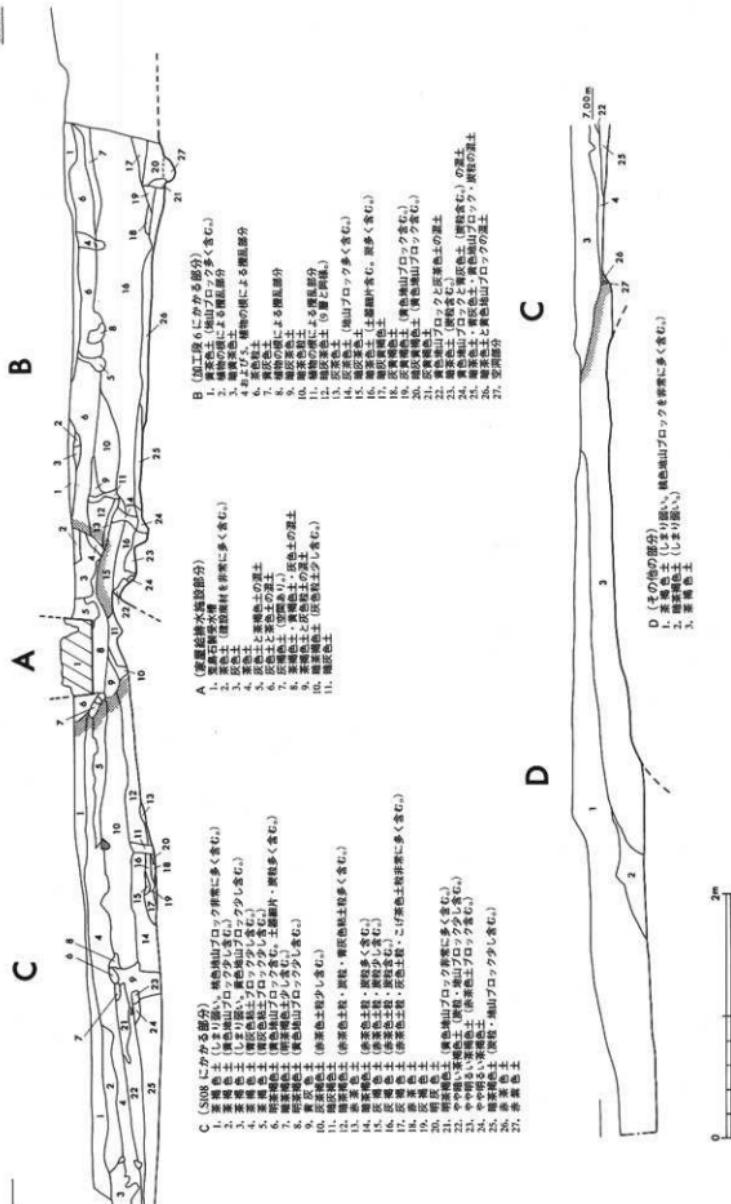
移転した家屋の基礎を除去すると、敷地の最も奥まった西側の一点を要にし、東に向かってV字状に開く土器溜まりが検出された。その範囲は東西14m、南北10mにおよび、東側の一部は後述する堅穴住居跡SI05の上にまで広がっている。深さは、西側の最深部で標高8.2mから約2mを測る。

この土器溜まりをはさんでV字状に開く地山の壁は人为的に切られているように見える。家屋敷地の確保造成時に、斜面などにあった土器を大量に含んだ土砂を寄せてきて埋め立てた可能性が考えられる。

この土器溜まりは、塩津3期以降の弥生土器（第25図）、古墳時代中期を主とする土師器、若干の須恵器と石器（以上第26図）、多くの拳大から人頭大の自然石などからなる。量的には33cm×56cm×15cmの遺物収納用コンテナ38箱分におよんだ。弥生土器の器種は壺、壺、高壺、低脚壺、鼓形器台、瓶形土器などであった。土師器は古墳時代前期の物は比較的少なく、中期のものが多く出土した。器種は壺、壺、高壺、低脚壺、壺、鼓形器台、小形丸底壺、瓶などであった。土器溜まりから出土した若干の須恵器の中には第27図中段に示した出雲1期（5世紀後葉）の段階のものと、高広IV A期（8世紀中葉～8世紀後半）以降のものとがあった。



第27図 塩津山遺跡
土器溜まり遺物実測図



第28図 塩津山遺跡SI08・加工段6検出面までの土層断面 (S=1/40)

豊穴住居跡SI08について

土器溝まりを掘り上げると標高7m付近でやや固く締まった赤茶色土を基調とする豊穴住居跡SI08の覆土が表れた。この覆土には、上位遺構から混入してきたと思われる弥生土器の破片、焼土と思われる赤紫色土、土師器、炭粒などが含まれていた。

遺構について

黄色粘質の地山に掘り込まれた遺構は、中位から東側部分が不明瞭で検出しきれなかった。形状は正方形に近い長方形を呈すると見られる。検出された壁高は、現存最深部で25cmを測る。

また、東を除く三方には煙体溝の痕跡が残っていた。検出できた床面の規模は西辺南北5.4m、北辺東西現存3.9mを測る。上屋構造を推測するに足る資料となり得る規格的に並ぶ柱穴などは検出できなかつたが、西辺中位に掘え付け窓の地下構造と思われる遺構を検出した。この遺構は、西辺中位に東西に並ぶ四角形の掘り込み（P91、P92）、それを囲むように配された溝跡、壁体の窪みから構成されているとみられる。溝跡に囲まれた南北幅は約1.8mを測る。

遺物の出土状況について

豊穴住居跡SI08からは多くの土師器と若干の石製品等が出土している。そのうち、第31図に示したものは土師器壺（31-6）、高杯（31-3～5）、瑪瑙石核（31-1）、瑪瑙製勾玉（31-2）である。

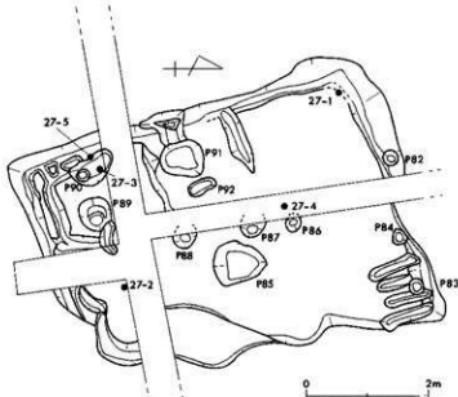
31-1瑪瑙石核は、31-6土師器壺の破片（口縁の1/3、胴部上半1/10程度）を覆いにして豊穴住居跡SI08の北西隅床面に埋め込まれていた。床面検出の最終段階で出土したこの遺物の出土状況については、掘り方を検出できていないので、住居の廃棄時に、あるいは何かの事情で穴を穿って埋めたのではなく、床面造成の際に塗り込めた可能性を考慮したいところである。

31-2瑪瑙製勾玉は第28図に示す南東隅の一角落、第29図に示す第5層、硬い灰黒色土層中から出土した。また、土師器高杯31-3、4は床面およびピットP90検出過程で出土したものである。

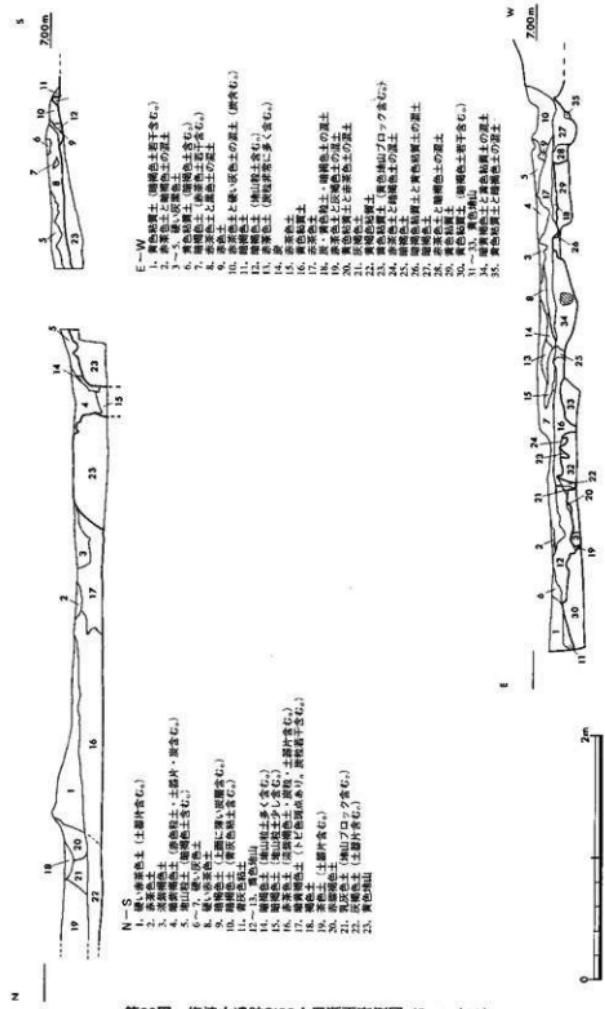
遺物について

31-1瑪瑙石核は6.5cm×6.9cm×5.7cm、重さ358.72gの立方体状を呈する。色調は透明感のある乳白色に黄橙色乃至飴色の綺麗な模様を持つ。6面のうち剥離面は3面ある。厚さ3cm程度の板状の節理を持つ縦を、日に沿って割った面が一枚の大きな剥離で残る。これは素材剥片が採取された痕跡とみられる。残る2面の剥離は一単位が小さく、平坦で、大きさ、厚みとともに素材としての剥片は期待できない。それよりはむしろ、石核自体のこの面を平らにしようとする意図が感じられる。石核の形をある程度整えてから、素材剥片の剥離を行ったのだろうか。剥離面と自然面との移、自然面の一部につぶれがみられるが、これが石核の使用によるものかどうかは不明である。

31-6土師器壺は31-1石核を覆っていた物である。口縁の1/3それに連なる胴部上半1/10が使用されていた。便宜上復元図化すると第31図に示すような形式になると思われる。器壁の厚い口縁は斜め

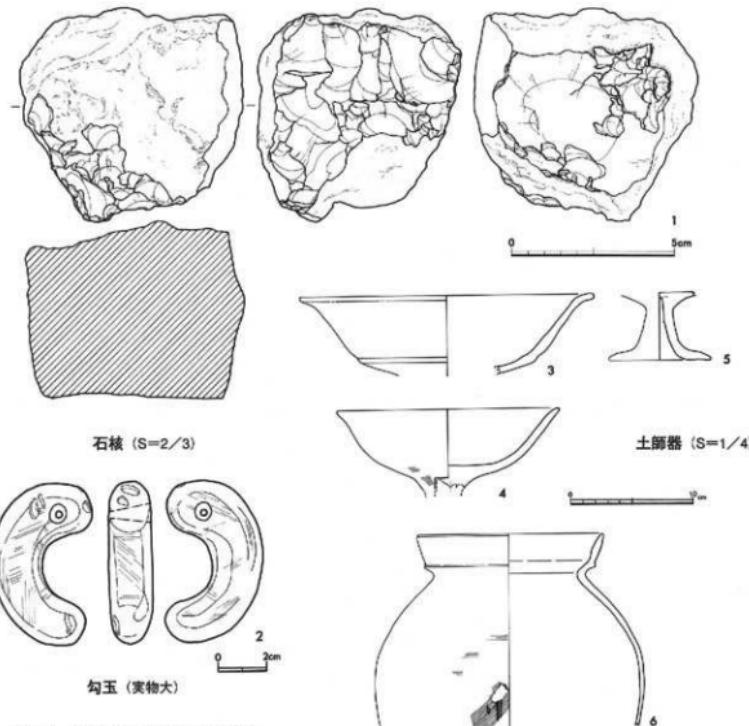


第29図 塩津山遺跡SI08遺構実測図 (S=1/80)



第30図 塩津山遺跡SI08土層断面実測図 (S=1/40)

上方に立ち上がるが、比較的低く、端部近くで内湾する。頸部の例りは浅く、短く、寸詰まりである。胸部の最大径を測る膨らみが胸中位くらいまで下がる。色調がオレンジ色から、濃い黄色を呈する。以上の特徴から古墳時代前期後葉～中期前葉にかけて、小谷3式あるいは松山分類壇B類II期古段階に分類されると思われる。31-1瑪瑙石核および31-6土師器蓋の出土状況から、この堅穴住居

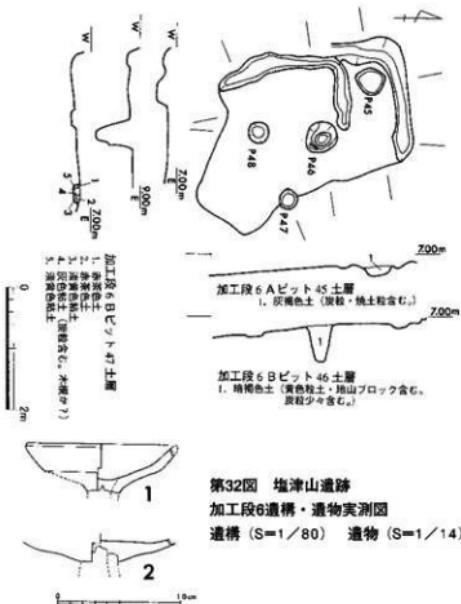


第31図 塩津山遺跡SI08遺物実測図

跡SI08の建造時期がこれらの遺物の時期以降であるといえる。

31-3, 4は土師器高坏の坏部である。31-3は脚柱との接合部から体部が段を持って立ち上がり、口縁が水平に開く。脚柱との接合法は確認できないが、松山分類高坏B類II期古段階に分類されるものと思われる。31-4は坏と脚の接合が円盤やコルク栓状の部品を用いた接合法ではなく、坏底部が脚柱部先端を包み込むように接合し、外面に脚柱に向けてハケ目を残すものである。坏部の口縁はやや開き気味であるが、松山分類高坏C類III期に分類されるものと思われる。31-5は土師器高坏の脚部である。31-4と同様の接合法とみられる。

31-2瑪瑙製勾玉は暗赤褐色と透明感のある褐色の縞模様を持つ。孔は片面穿孔で穿孔貫通時に孔の周囲が欠けてしまったものと思われる。頭部と尾部の両端は丸く納められ、表面は滑らかに研磨されているが、腹部側の一部に、稜を消すための一次研磨痕³⁵が残っている。また、頭部と尾部に調整剥離面を磨り残している部分が見られる。



第32図 塩津山遺跡
加工段6構造・遺物実測図
構造(S=1/80) 遺物(S=1/14)

加工段6について

堅穴住居跡SI08の基盤ともなっている黄色粘質の地山斜面（緩やかに東に傾斜している）で、SI08の南側に隣接して加工段6が検出された。標高7m付近から標高6.7mまで斜面を「L」字状に削り出して、加工段を造り出している。掘立柱建物の柱穴と思われる掘り込みがある。北側から西側にかけて、2条の溝跡が切り合って検出された。北側の溝跡にかかる部分を加工段6A、南側の溝跡にかかる部分を加工段6Bとする。同じ加工段の中で建て直しかた替えが行われたものと考えられる。BがAを切っており、後から造成されたことがわかる。また、この2条の溝跡に区画されて計4つのピットが検出された。P45は加工段6Aに伴うものと思われ、浅くはあるが、位置から考えて柱穴の可能性が高いとみられる。

P46も同様に柱穴とみられる。加工段6Bからは第32図に示した土師器高壙が出土している。

註

註1 島根県教育委員会編『塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ峰遺跡・柳瀬跡・附龜ノ尾古墳）』

一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区区1998年

以下弥生土器の編年はこれによる。

註2 松山智弘「山雲における古墳時代前半期の土器の様相・火大式の再検討」『島根考古学会誌』

第8集1991年

松山智弘「小谷式再検討・出雲平野における新資料から」『島根考古学会誌』第17集2000年

以下土師器の編年はこれによる。

註3 島根県教育委員会編『高広遺跡発掘調査報告書－和田園地造成工事に伴う発掘調査－』1984年

大谷見二「出雲地域の須恵器の編年と地城色」『島根考古学会誌』第11集1994年

大谷見二「出雲地方の須恵器編年表」『出雲の横穴墓-その型式・変遷・地域性-』

第7回山陰横穴墓調査検討会資料

山陰横穴墓研究会研究会編

中村 浩著『研究入門須恵器』柏書房1990年

石野博信編『全国古墳編年集成』雄山閣1995年

以下須恵器の編年についてはこれらによる。

註4 石野博信/岩崎卓也/河上邦彦/白石太一郎編『古墳時代の研究』第3巻生活と祭祀1991年雄山閣

註5 瑛瓈石核および瑪瑙製勾玉については以下の文献を参考にした。

米田克彦「出雲における古墳時代の玉生産」『島根考古学会誌』第15集1998年

島根県教育委員会『福富I遺跡・屋形1号墳』一般国道9号（松江道路西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書21997年

1998年度塩津山遺跡遺構計測表

塩津山遺跡 加工段1計測表

| 平面形 | | 現存不整形。加工段2・3の造成によって削平を受けている。 | | | |
|---------|--------|------------------------------|-------|--------------|--|
| 全 体 | | 加工段の幅 | | 加工段の奥行き | |
| 規 模 | | 5.6m (残存最大幅) | | 3.6m (残存最大幅) | |
| 壁 高 | | 50cm (残存最高値) | | | |
| ピット番号 | P18 | P20 | P21 | P19 | |
| 柱穴等 上面積 | 68×48 | 75×48 | 90×50 | 36×35 | |
| (cm) 深さ | 64 | 33 | 49 | 35 | |
| 柱間距離 | P18-20 | P20-21 | | | |
| (m) | 1.7 | 1.8 | | | |

塩津山遺跡 加工段2計測表

| 平面形 | | 現存半円形もしくは扇形の一部を成すか? | | | |
|---------|-------|---------------------|--|--------------|--|
| 全 体 | | 加工段の幅 | | 加工段の奥行き | |
| 規 模 | | 3.2m (残存最大幅) | | 3.0m (残存最大幅) | |
| 壁 高 | | 36cm (残存最高値) | | | |
| ピット番号 | P22 | P8 | | | |
| 柱穴等 上面積 | 70×80 | 24×26 | | | |
| (cm) 深さ | 33 | 7 | | | |

塩津山遺跡 加工段3計測表

| 平面形 | | 現存不整形な複円形 | | | |
|---------|-------|--------------|-------|--------------|-------------|
| 全 体 | | 加工段の幅 | | 加工段の奥行き | |
| 規 模 | | 5.0m (残存最大幅) | | 3.4m (残存最大幅) | |
| 壁 高 | | 64cm (残存最高値) | | | |
| ピット番号 | P17 | P14 | P23 | P9 | P10 P16 |
| 柱穴等 上面積 | 44×90 | 24×24 | 84×70 | 47×52 | 46×70 57×48 |
| (cm) 深さ | 21 | 18 | 12 | 34 | 28 40 |
| 柱穴等 上面積 | P13 | P24 | P15 | P26 | P12 |
| (cm) 深さ | 34×32 | 110×87 | 30×29 | 48×27 | 28×28 |
| 柱間距離 | 16 | 23 | 44 | 10 | 35 |
| (m) | 1.36 | 1.07 | 1.22 | 1.03 | 1.51 |

塩津山遺跡 SI05計測表

| 平面形 | | 扇形 | | | |
|---------|-------|-------------|-------|------------|-------------|
| 全 体 | | 上面 (残存最大幅) | | 下面 (最大幅) | |
| 規 模 | | 7.7m×7.6m | | 5.5m×5.8m | |
| 壁 高 | | 197cm (最高値) | | | |
| 柱穴等 上面積 | 中央ピット | 柱穴1 | 柱穴2 | 柱穴3 | 柱穴4 P5 |
| (cm) 深さ | 86×94 | 77×80 | 70×62 | 73×90 | 60×56 32×28 |
| 柱穴等 上面積 | P6 | P7 | P8 | P9 | |
| (cm) 深さ | 67 | 62 | 49 | 57 | 66 14 |
| 柱間距離 | 13×11 | 23×23 | 37×30 | 46×29 | |
| (m) | 1.16 | 1.36 | 3.6 | 2.6 | |
| 柱間距離 | 柱穴1-2 | 柱穴2-3 | 柱穴3-4 | 柱穴4-1 P5-6 | P6-7 |
| (m) | 2.92 | 3.14 | 2.99 | 2.94 | 1.58 3.37 |
| | P7-8 | | | | |
| | 2.3 | | | | |

塩津山遺跡 加工段5計測表

| 平面形 | | 現存部分は隅丸方形の一部を成すと思われる。 | | | |
|---------|-------|-----------------------|-------|--------------|---------|
| 全 体 | | 加工段の幅 | | 加工段の奥行き | |
| 規 模 | | 5.0m (残存最大幅) | | 4.8m (残存最大幅) | |
| 壁 高 | | 54cm (残存最高値) | | | |
| ピット番号 | P10 | P11 | P12 | P13 | 妙満まり |
| 柱穴等 上面積 | 62×32 | 84×70 | 50×60 | 26×22 | 280×180 |
| (cm) 深さ | 8 | 7 | 6 | 11 | 6 |

塩津山遺跡 加工段4計測表

| 平面形 | | 現存方形もしくは長方形区画の一部を成すと思われる。 | | | |
|---------|---------|---------------------------|-------|--------------|--|
| 全 体 | | 加工段の幅 | | 加工段の奥行き | |
| 規 模 | | 2.26m (残存最大幅) | | 3.5m (残存最大幅) | |
| 壁 高 | | 24cm (残存最高値) | | | |
| ピット番号 | P42 | P43 | P44 | | |
| 柱穴等 上面積 | 160×145 | 42×40 | 42×38 | | |
| (cm) 深さ | 23 | 11 | 36 | | |

塩津山遺跡 SI06計測表

| 平面形 | | ほぼ長方形 | | | |
|---------|-------|--------------|-------|-----------|---------|
| 全 体 | | 上面 (残存最大幅) | | 下面 | |
| 規 模 | | 6.2m×4.7m | | 5.4m×3.9m | |
| 壁 高 | | 25cm (残存最大幅) | | | |
| ピット番号 | P82 | P83 | P84 | P85 | P86 P87 |
| 柱穴等 上面積 | 25×27 | 24×28 | 24×26 | 27×76 | 27 42以上 |
| (cm) 深さ | 53 | 37 | 22 | 9 | 9 19 |
| 柱穴等 上面積 | P88 | P89 | P90 | P91 | P92 |
| (cm) 深さ | 40 | 50×53 | 78×44 | 71×60 | 47×21 |
| 柱間距離 | 55 | 59 | 38 | 22 | 10 |

塩津山遺跡 加工段6A計測表

| 平面形 | | 現存方形もしくは長方形区画の一部を成すと思われる。 | | | |
|---------|-------|---------------------------|--|---------------|--|
| 全 体 | | 加工段の幅 | | 加工段の奥行き | |
| 規 模 | | 0.96m (残存最大幅) | | 2.11m (残存最大幅) | |
| 壁 高 | | 計測不能 | | | |
| ピット番号 | P45 | | | | |
| 柱穴等 上面積 | 47×48 | | | | |
| (cm) 深さ | 37 | | | | |

塩津山遺跡 加工段6計測表

| 平面形 | | 現存方形もしくは長方形区画の一部を成すと思われる。 | | | |
|---------|--------|---------------------------|-------|--------------|--|
| 全 体 | | 加工段の幅 | | 加工段の奥行き | |
| 規 模 | | 2.76m (残存最大幅) | | 2.9m (残存最大幅) | |
| 壁 高 | | 計測不能 | | | |
| ピット番号 | P46 | P47 | P48 | | |
| 柱穴等 上面積 | 48×50 | 30×33 | 33×35 | | |
| (cm) 深さ | 123 | 23 | 15 | | |
| 柱間距離 | P48-46 | P46-47 | | | |
| (m) | 1.04 | 1.2 | | | |

1998年度塩津山遺跡豎穴住居跡一覧表

| 遺構略称 | 長さ(m) | 幅(m) | 床面形状 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|-----------|-------|------|-----------|----------------|----------------|----------------|
| 塩津山遺跡SI05 | 7.70 | 7.60 | 隅丸方形 | 弥生土器 | 塩津5期 | 加工段5の遺構を切っている。 |
| 塩津山遺跡SI08 | 6.20 | 4.70 | 正方形に近い長方形 | 土師器、瑪瑙石核、瑪瑙製勾玉 | 古墳時代前期末～中期前葉以降 | 掘え付け窓の地下構造あり |

1998年度塩津山遺跡加工段状遺構一覧表

| 遺構名 | 幅(m) | 奥行き(m) | 出土遺物 | 時期 | 類型 | 備考 |
|-------|------|--------|-----------|-------------------|-----|------------------|
| 加工段1 | 5.60 | 3.60 | 弥生土器 | 弥生時代後期後半 | I | 加工段2・3に切られている |
| 加工段2 | 3.20 | 3.00 | | | II | 加工段3に切られている |
| 加工段3 | 5.00 | 3.40 | 土師器、手捏ね土器 | 古墳時代中期 | II | 加工段1・2を切っている |
| 加工段4 | 2.26 | 3.50 | 弥生土器片 | 弥生時代後期後半～古墳時代後期前葉 | III | 埋土中に須恵器溜まりあり |
| 加工段5 | 5.00 | 4.80 | 弥生土器、鉄製品 | 塩津5期 | III | 豎穴住居跡SI05に切られている |
| 加工段6A | 0.96 | 2.11 | | | II | 加工段6Bに切られている |
| 加工段6B | 2.76 | 2.90 | 土師器 | 古墳時代中期 | II | 加工段6Aを切っている |

加工段の類型について

I類…整った柱穴の配列が認められ、掘立柱建物跡が建てられていたと推測されるもの

II類…柱穴などの建物を類推させる遺構がみられるものの、整然とした並びが認められないもの

III類…柱穴等の遺構がほとんど認められないもの

島根県教育委員会『塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附 龜ノ尾古墳）』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区区1998年の分類による。

1998年度塩津山遺跡出土遺物観察表(1)

| 指図番号 | 出土位置 | 種別 | 器種 | 計測値 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 形態・文様・手法 | 備考 |
|-------|---------------------------|------|------|---|------------------------------------|--------------|----------------------------------|--|-----------------------------|
| 8-1 | 加工段1直溝 | 陶生土器 | 甕 | 口径:不明 身幅:約3cm | 重、1mm以上の砂粒を多く含む。 | 良好 | 内面:淡黄褐色 外側:灰褐色～淡褐色 | 口縁外側に大きく開く。外側の底面 は剥落施文に伴うもの。 | 壁片。 壁厚3mm |
| 8-2 | 加工段1直溝中 | 土器器 | 鉢形杯 | 口径:不明 腹幅:約4.4cm 底径:約2.6cm | 重、1mm以下の砂 粒を多く含む。 | 良好 | 内面:灰褐色から黑色 外側:灰褐色から黒褐色 | 深目1タイプ。 砂粒多く含む。 | 50%以上焼成 |
| 10-1 | 加工段2直溝中 | 土器器 | 高杯 | 破片につき計測不能 | 重、1mm以上の砂粒を 多く含む。 | 良好 | 内面:灰褐色から黑色 外側:灰褐色 | 口縁部を外側から粘土層で接着 外側:壁面 | 壁厚3mm |
| 10-2 | 加工段2直溝中 | 土器器 | 高杯 | 口径:不明 腹幅:約4.4cm 底径:不明 | 重、1mm以下の砂 粒を多く含む。 | 良好 | 内面:褐色 外側:褐色 底面:褐色 | 口縁部を外側から粘土層で接着 外側:壁面 底面:褐色 | 50%以上焼成 |
| 14-1 | S06S直溝 | 陶生土器 | 甕 | 口径: 26.4cm 腹幅: 約26.0cm 底径: 約20.7cm | 中や重い、1mm程度 の砂粒を多く含む。 内側: 黒褐色 | 良好 | 内面: 淡黄褐色 外側: 淡黄褐色 | 口縫目なし方ににまっ這一伸ばす形 壁厚3mm | 50%以下 壁厚3mm |
| 14-2 | S06S直溝2 窓土中 | 陶生土器 | 甕 | 口径: 約26.2cm 腹幅: 約26.0cm 底径: 約20.7cm | 中や重い、1mm程度 の砂粒を多く含む。 内側: 黒褐色 | 良好 | 内面: 淡黄褐色 外側: 淡黄褐色 | 口縫目外側にてある。 窓部1mmピッチの其底辺 | 50%以下 壁厚4mm |
| 17-17 | 加工段5 | 陶生土器 | 甕 | 口径: 約17.6cm 腹幅: 約17.3cm | 中や重い、1mm程度 の砂粒を多く含む。 | 良好 | 内面: 淡黄褐色 外側: 淡黄褐色 | 口縫目外側にてある。 窓部1mmピッチの其底辺 | 50%以下 壁厚3mm |
| 19-1 | S06+加工段5直溝 窓側外 | 土器器 | 甕 | 口径: 11.2cm 腹幅: 約11.4cm 底径: 約9.2cm | 重い。 | 良好 | 内面: 増毛褐色 外側: 増毛褐色 底面: 増毛褐色 | 口縫目裏面に褐色斑点あり。 窓部1mmピッチの其底辺 | 50%以上 壁厚3mm |
| 19-2 | S06+加工段5直溝 窓側外 | 土器器 | 盆 | 口径: 約20.2cm 腹幅: 2.1cm 底径: 約19.7cm | 重、直径2cm程度の 白色砂粒が混ざる。 | 良好 半手取付 | 内面: 増毛褐色 外側: 増毛褐色 底面: 增毛褐色 | 口縫目裏面に褐色斑点あり。 窓部1mmピッチの其底辺 | 50%以上 壁厚3mm |
| 19-3 | S06+加工段5直溝 窓側外 | 陶器器 | 高台皿 | 口径: 約17.4cm 腹幅: 4.2cm 底径: 約16.9cm 高台高: 約13.0cm | 中や重い、白色の 砂粒を多く含む。 | 良好 半手取付 | 内面: 増毛褐色 外側: 増毛褐色 底面: 増毛褐色 | 内面: 増毛ナメ ナメ 外側: 増毛ナメ ナメ 底面: 増毛ナメ 窓部1mmピッチ | 50%以下 高台11.4cm 壁厚3mm |
| 19-4 | S06+加工段5直溝 窓側外 | 土器器 | 高台皿 | 口径: 約17.4cm 腹幅: 3.7cm 底径: 3.0cm 高台高: 約12.0cm | 中や重い、白色の 砂粒を多く含む。底 部は赤褐色。 | 不良焼成 半手取付 | 内面: 増毛褐色 外側: 増毛褐色 底面: 増毛褐色 | 外側の底面は重い。高台11.4cm 外側に凹凸がある。底面に褐色斑点 が混ざりかみらる。 | 50%以下 高台11.4cm 壁厚3mm |
| 19-5 | S06+加工段5直溝 窓側外 | 土器器 | 壺の蓋 | 口径: 不明 腹幅: 約1.6cm 底径: 不明 | 重、白色砂粒少し 含む。 | 良好 半手取付 | 内面: 白色 外側: 白色 底面: 白色 | 内面: 白色 外側: 白色 底面: 白色 | 50%以下 50%以下 50%以下 |
| 19-6 | S06+加工段5直溝 窓側外 | 土器器 | 高台皿 | 口径: 不明 腹幅: 約1.6cm 底径: 不明 | 重、1mmの白色砂 粒を多く含む。 | 良好 半手取付 | 内面: 白色 外側: 白色 底面: 白色 | 内面: 白色 外側: 白色 底面: 白色 | 50%以下 50%以下 50%以下 |
| 19-7 | S06+加工段5直溝 窓側外 | 土器器 | 升 | 口径: 14.7cm 腹幅: 約14.0cm 底径: 約10.8cm | 重、1mmの白色砂 粒を多く含む。 | 良好整縫 | 内面: 白色 外側: 白色 | 内面: 白色 外側: 白色 | 50%以下 50%以下 50%以下 |
| 19-10 | S06+加工段5直 溝側外 | 土器品 | 土器 | 高さ: 4.56cm 口径: 1.8cm 腹幅: 1.85cm 底径: 1.8cm 重量: 0.2kg | 重、點状痕。 | 良好 | 褐色～茶褐色 底面: 黑褐色 | 形状土器 | 焼成かないタイプ |
| 21-1 | 直溝底部より | 土器器 | 甕 | 口径: 不明 腹幅: 約41.3cm 底径: 約37.8cm | 重、直筒形。重い。 内側: 黑褐色。 | 良好 半手取付 | 内面: 黒褐色 外側: 黑褐色 底面: 黑褐色 | 最高に丸して断面大きい。 底面には黒褐色を帯びる。 その修理部分は黒褐色。 | 50%以上 容積160L 壁厚1.5cm |
| 23-1 | 直溝底部より | 土器器 | 直筒の甕 | 口径: 約21.2cm 腹幅: 約20.7cm 底径: 約18.6cm | 重、直筒1mmの砂粒 を含むにき。 | 良好整縫 | 外側: 青灰色 内面: 青灰色 底面: 青灰色 | 内面: 増毛ナメ 取回し1mmの上から 底面: 黒褐色 | 50%以下 直筒1.5cm 壁厚1.5cm |
| 23-2 | 直溝底部より 加工段4直溝中腰 窓側外 | 土器器 | 底の身 | 口径: 約20.1cm 腹幅: 約19.5cm 底径: 5.2cm | 重、1~2mmの白色 砂粒を多く含む。 | 良好整縫 | 外側: 増毛ナメ 内面: 増毛ナメ 底面: 増毛ナメ | 外側: 増毛ナメ 内面: 増毛ナメ 底面: 増毛ナメ | 50%以上 直筒1.5cm 壁厚1.5cm |
| 23-3 | 直溝底部より | 土器器 | 底の身 | 破片につき計測不能 | 重。 | 良好整縫 | 内面: 増毛ナメ 外側: 増毛ナメ | 内面: 増毛ナメ 外側: 増毛ナメ | 山陰1期 出雲1期 |
| 23-4 | 直溝底部より | 土器器 | 底の身 | 破片につき計測不能 | 重。 | 良好 半手取付 | 内面: 増毛ナメ 外側: 増毛ナメ | 内面: 増毛ナメ 外側: 増毛ナメ | 山陰1期 出雲1期 |
| 26-1 | 土器器より | 陶生土器 | 甕 | 口径: 約20.9cm 腹幅: 約19.3cm 底径: 不明 | 中や重い。2mm以下 の砂粒を多く含む。 | 良好 | 内面: 黑褐色 外側: 黑褐色 | 内面: 黑褐色 外側: 黑褐色 | 50%以上 壁厚3mm |
| 26-2 | 土器器より | 陶生土器 | 甕 | 口径: 約21.0cm 腹幅: 約20.4cm 底径: 不明 | 中や重い。1mm程度 の砂粒を多く含む。 | 良好 | 内面: 黑褐色 外側: 黑褐色 | 内面: 黑褐色 外側: 黑褐色 | 50%以下 壁厚3mm |
| 26-3 | 土器器より | 陶生土器 | 甕 | 口径: 約15.8cm 腹幅: 約15.8cm 底径: 不明 | 中や重い。1mm程度 の砂粒を多く含む。 | 不良不規 | 内面: 黑褐色 外側: 黑褐色 | 内面: ナメ 外側: 黑褐色 | 50%以下 壁厚3mm |
| 26-4 | 土器器より | 陶生土器 | 甕 | 口径: 約16.0cm 腹幅: 約14.7cm 底径: 不明 | 重い。1mm~3mmの 砂粒を多く含む。 | 良好 | 内面: 黑褐色 外側: 黑褐色 | 内面: ヨコナメ 外側: ヨコナメ | 50%以下 壁厚3mm |
| 26-5 | 土器器より | 陶生土器 | 甕 | 口径: 約23.6cm 腹幅: 約22.0cm 底径: 不明 | 重、1mm程度の砂粒 を多く含む。 | 良好 | 内面: 黑褐色 外側: 黑褐色 | 内面: ヨコナメ 膜張底 外側: ヨコナメ | 50%以下 壁厚4mm |
| 26-6 | 土器器より | 陶生土器 | 鉢形器 | 口径: 不明 腹幅: 約27.0cm 底径: 不明 | 中や重い。2mm以下 の砂粒を多く含む。 | やや不良 | 内面: 透明褐色～乳白色 外側: 透明褐色～乳白色 | 底部が暗くまだ詰まっている 隠れ。表面無地。 | 50%以下 壁厚3mm |
| 26-7 | 土器器より | 陶生土器 | 鉢形器 | 口径: 不明 腹幅: 約26.0cm 底径: 不明 | 中や重い。2mm以下 の砂粒を多く含む。 | 不良 | 内面: 乳白色 外側: 乳白色 | 底部が詰まって、内側は固めしている 隠れ。表面無地。 | 50%以下 壁厚3mm |

| 探査番号 | 出土位置 | 種別 | 器種 | 計測値 | 胎 土 | 焼成 | 色 調 | 形態・文様・手法 | 備 考 |
|-------|---------|------|-------|--|---|------|------------------------------------|--|-----------------------------|
| 26-8 | 土壠面より | 弥生土器 | 低脚杯 | 口径：径約12.4cm 高さ：約6.4cm 底径：約6.4cm | やや硬い、1~2mmの 粉砂を多量に含む。 | やや不良 | 内外面：黄褐色 | 断面はややくちん張る。底盤部を 升部で削った痕跡が数箇所ある。 | 50%以下 墓室5段 |
| 26-9 | 土壠面より | 弥生土器 | 低脚壺 | 口径：径約26.0cm 高さ：約12.4cm 底径：不明 | 1~2mm程度の粉砂 を含む。 | 不良 | 内外面：泥質褐色~乳白色 | 構造の強度が弱めである。焼成して いない可能性がある。 | 60%以下 墓室5段 |
| 26-10 | 土壠面より | 弥生土器 | 瓶形器 | 口径：径約15.0cm 高さ：約27.1cm 底径：不明 | やや硬い、1mm程度の 粉砂を含む。 | 不良 | 内外面：泥質褐色~乳白色 | タガ子下に下部の直腹部がある。 焼成不完全。 | 60%以下 墓室5段 |
| 27-1 | 土壠面より | 土器群 | 瓶 | 口径：径約10.4cm 高さ：約4.4cm 底径：不明 | 柔らか。1mm以下の 粉砂を多く含む。 | 良好 | 内面：褐色~深褐色~ベージュ 外面：米黄色~ベージュ~褐色 | 内面：ヨコナデ ヘラケツリ 外面：ヨコナデ | 80%以下 松山1号墳周辺 へら記号あり。 |
| 27-2 | 土壠面より | 土器群 | 小瓶丸底壺 | 口径：不明 高さ：約3.0cm 底径：約14.8cm (底盤部の内径) | 柔らか。1mm程度の粉砂 を多く含む。4~5cm の底盤部がある。 | 良好 | 内外面：黄褐色 | 内面：ヨコナデ ナデ 外面：ヨコナデ ハケ留 | 50%以下 松山1号墳周辺 |
| 27-3 | 土壠面より | 土器群 | 圓口壺 | 口径：不明 高さ：約19.8cm 底径：約14.0cm | やや硬い、3mm以下の 粉砂を多く含む。 | やや不良 | 内外面：淡褐色~黄褐色 外腹下部に横筋付帯 | 内面：ナデ ヘラケツリナデ 外腹下部：ナデ | 日出定期 松山1号墳周辺 |
| 27-4 | 土壠面より | 土器群 | 壺 | 口径：不明 高さ：約10.0cm 底径：不明 | やや硬い。5mm以下の 粉砂を含む。 | やや不良 | 内外面：灰褐色 | 内面：ヨコナデ ヘラケツリ 外面：ヨコナデ ハケ留 | 80%以下 松山1号墳周辺 |
| 27-5 | 土壠面より | 土器群 | 小瓶丸底壺 | 口径：不明 高さ：約5.8cm 底径：約14.8cm | 柔軟。1mm程度 の粉砂を含む。 | 良好 | 内外面：灰褐色~褐色~ベージュ | 内面：ヨコナデ ナデ 外面：ヨコナデ ハケ留 腰部留め | 80%以上 松山1号墳周辺 |
| 27-6 | 土壠面より | 土器群 | 低脚杯 | 口径：不明 高さ：約6.6cm 底径：約4.8cm | やや硬い。1mm以下の 粉砂を少し含む。 | 良好 | 内外面：褐褐色~米白色~ 外腹：橙褐色~米白色 | 内面：ナデ 升部に斜削部がある。 外腹：ナデ 小さく斜削跡。 | 50%以下 |
| 27-7 | 土壠面より | 土器群 | 高杯 | 口径：不明 高さ：約12.5cm 底径：約11.8cm | やや硬い。1mm以下の 粉砂を少し含む。 | やや不良 | 内外面：淡褐色 | 内面：ナガリ ナデ 外腹中三分の一円錐窓があり。 | 腰窓のみ |
| 27-8 | 土壠面より | 陶器群 | 圓口壺の裏 | 口径：径約13.6cm 高さ：約3.6cm 底径：不明 | 柔軟。1mm程度の 粉砂を含む。 | 良好 | 内外面：灰色 裏面：灰褐色~米白色部分 中心：灰褐色部分 | 内面：ヨコナデ 背面：ヨコヘラヘラナデ 内腹：ナガリ ナデ 外腹：ナガリ ナデ | 50%以下 山田1号 1期 |
| 27-9 | 土壠面より | 陶器群 | 高台壺 | 口径：径約14.7cm 高さ：約6.5cm 底径：不明 | 柔軟。1~2mmの粉砂 を含む。 | 良好 | 内外面：青褐色 裏面：暗褐色 | 内面：ヨコナデ 背面：ヨコヘラヘラナデ 内腹：ナガリ ナデ 外腹：ナガリ ナデ | 50%以下 山田1号 2期 |
| 31-3 | SIOB壙土中 | 土器群 | 高杯 | 口径：径約24.0cm 高さ：約6.5cm | やや硬い。1~2mmの 粉砂を多く含む。 | 良好 | 内外面：暗褐色 | 内面：ナガリ ナデ 外腹：ナガリ ナデ | 50%以下 松山分室周辺無柱 腰窓周辺 |
| 31-4 | SIOB壙土中 | 土器群 | 高杯 | 口径：径約16.1cm 高さ：約6.4cm 底径：約5.7cm | 柔軟。1~2mmの粉砂 を含む。 | やや不良 | 内外面：青褐色 裏面：暗褐色 | 内面：ナガリ ナデ 背面：ナガリ ナデ 内腹：ナガリ ナデ 外腹：ナガリ ナデ | 50%以下 松山分室周辺無柱 腰窓周辺 |
| 31-5 | SIOB壙土中 | 土器群 | 高杯 | 口径：不明 高さ：約6.8cm 底径：約3.7cm | 柔軟。1~2mmの粉砂 を含む。 | 良好 | 内外面：青褐色~黃褐色 | 内面：ナガリ ナデ 外腹：ナガリ ナデ | 50%以下 松山分室周辺無柱 腰窓周辺 |
| 31-6 | SIOB壙土中 | 土器群 | 壺 | 口径：径約18.0cm 高さ：約15.8cm 底径：最大22.0cm | 柔軟。1~2mmの粉砂 を含む。 | 良好 | 内外面：青褐色~黃褐色 | 内面：ナガリ ナデ 外腹：ナガリ ナデ | 50%以下 松山分室周辺無柱 腰窓周辺 |
| 32-1 | 3号工場壙土中 | 土器群 | 高杯 | 口径：径約12.0cm 高さ：約4.0cm 底径：不明 | 柔軟。1~2mmの粉砂 を含む。 | 良好 | 内外面：青褐色~黃褐色 | 内面：ナガリ ナデ 外腹：ナガリ ナデ | 50%以下 松山分室周辺無柱 腰窓周辺 |
| 32-2 | 3号工場壙土中 | 土器群 | 高杯 | 口径：径約13.6cm 高さ：約4.0cm 底径：不明 | 柔軟。1~2mmの粉砂 を含む。 | 良好 | 内外面：青褐色 | 内面：ナガリ ナデ 外腹：ナガリ ナデ | 50%以下 松山分室周辺無柱 腰窓周辺 |

1998年度塩津山遺跡出土遺物觀察表（2）

| 採団 番号 | 出土位置 | 種別器種 | 計測値 | 色調 | 形態・文様・手法の特徴 | 備考 | |
|----------|---------------|------|------|---|--|--|------------------------|
| 第17回 | 加工段落砂留BII | 石製品 | 刀子? | 青褐色~黒色 厚さ4.6mm | 裏面にかけて保存。 | 保存率60%以下 | |
| 19-8 | 900-江戸1月直通BII | 石器 | 磨き石? | 長さ19.1cm 厚さ1.6cm 厚さ3.8cm 厚さ40.4kg | 全体で丁寧に丸く、とがりの方には彫刻できない。先端部の長い裏面に不平感があり、使用感を考えられる。使用後は削除できない。片面に磨き面の跡や手を握る跡があるが、性別は不明である。表面は滑らかである。形状は丸い。 | 保存率60%以上 | |
| 19-9 | 900-江戸1月直通BII | 石製品 | 双刃刀身 | 長さ3.7cm 厚さ0.65mm 厚さ11.37g | 表面は黒褐色とも灰色 | 表面は黒褐色とも灰色(大きさの約1/3mm程度)を有する。表面に凹凸感がある。刃先部は鋸歯状に削り取られた部分がある。また、側面の刃先部は斜めに削り取られた形態である。刃先部はつぶつと斜めに削り取られた。材質はいわゆる和田玉と見られる。 | 保存状況良、一部欠損 |
| 第20回 | 900-江戸1月直通BII | 石器 | 磨き石? | 長さ19.6cm 幅2.6cm 厚さ3.5cm 重さ35.4kg | 表面は黒褐色とも灰白色 | 表面は黒褐色とも灰色を有する。表面は彫刻でない。裏面に「と」字型の彫刻をしていること、実際底面の裏面を手触りしたこと、台面にしての彫刻といふことから、これは手で使って使った物だと考えられる。材料は珪藻土ではないと想われる。形状は丸い。 | 保存率50%以上 実物右側面に紅色付帯 |
| 27-10 | 土蔵裏まり | 石製品 | 敲石 | 長さ3.6cm 幅1.8~1.85cm 厚さ1.4~1.6cm 重さ131g | 灰白色一澤無しつまり。 | 表面の三面が使用感、裏面裏面裏面に彫刻感と比較され、裏面裏面裏面でなかったが、研ぎ削りから削除して、最終的に平滑化することられる。材質不明。表面の一澤、つまりべつとしている。 | 実物品 |
| 31-1 | S100南壁? | 石器 | 石斧 | 長さ15.5cm 幅5.9cm 厚さ5.7cm | 透明感のある緑色 | 石材の三面を打ち込んでいるが、いずれの面の形態も透視感でなく、鋸刃で作る彫刻面ではないようにも思われる。 | |
| 31-2 | S100屋上中 | 石製品 | 勾玉 | 最大幅:35mm 最大高さ:35mm 最大厚さ:10mm 内部深さ:10.2mm 孔径:3.5mm | 透明一澤い結晶一澤色 | 表面に堅く多くの凹痕剥離が残っている。片側剥離。 | 実物品 二次的に被施しているのか? |

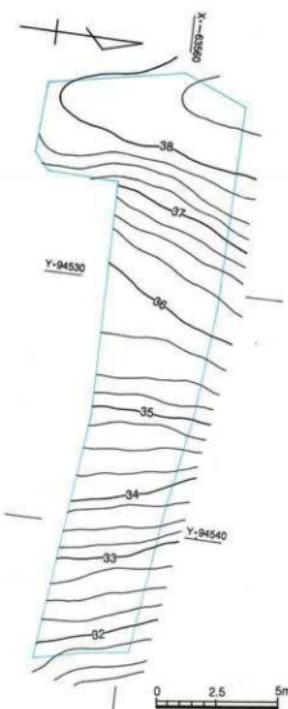
第4章 柳遺跡

第1節 調査前の状況と経過

調査前の状況（第33図）

柳遺跡は安来市荒島町字柳他に広がる集落遺跡である。東西にのびる丘陵から北に向かって派生する支丘に位置し、東には隣接する塩津山墳墓群、竹ヶ崎遺跡を望むことができる。また遺跡の西側には、柳II遺跡に向かって丘陵が続いている。

柳遺跡は平成7年度に発掘調査が行われ、塩津丘陵遺跡群の一角を構成する弥生時代後期末を中心とした集落が確認された。柳遺跡は大きく分けて、丘陵頂上の平坦地から西側の緩斜面にかけてと、東側の比較的急峻な斜面から構成されている。頂上部は長さ120m、幅約30mの平坦地で、ここから西に向かってなだらかな斜面が続いている。この場所は近年まで果樹園として利用されていたため、かなり造成されているが、そうした攪乱の中から弥生時代後期から終末期にかけての掘立柱建物址をはじめとする遺構が多数確認された。一方、東側斜面では同時期の竪穴住居址、加工段が多数検出された他、5世紀後半を中心とする遺構・遺物がまとまって出土している。



平成8年度には、これらの成果をまとめた報告書が刊行されている。

調査の経過

今年度の調査は、工法変更に伴う追加買収部分について行った。この工法変更是、ほぼ東西にのびている既存の道路用地を南北に約5~10mずつ広げるもので、追加買収地は当初の道路用地を南北から挟んで帯状にのびている。既存の用地部分は平成7年度に調査済みであり、今回の調査区はその南北に隣接する2か所に設定した。

既掘区の北側に隣接する調査区は115m²あり、名称を柳遺跡北区とした。前回の調査で竪穴住居址などが集中して出土した、東側斜面の北部にあたる。一方、既掘区の南側に隣接する調査区は、柳遺跡南区とした。遺跡の頂上部から西側斜面にかけての約300m²が調査範囲である。

調査は、同時期に行っていた小久白墳墓群の調査が一段落した平成11年10月25日から開始した。南北の調査区は直線距離で60m離れているだけだが、その間には工事用道路の切り通しが造られており、容易に行き来できない状態であった。同時進行での調査は難しいとの判断から、まず柳遺跡南区の調査に入り、その目処が付いた時点で北区の調査に移った。当初から調査は年内終了を予定していたが、11月後半から12月の天候不良もあって、作業は思うように進まなかつた。そして暮れも押し迫った12月19日、この年

一番の寒波が襲来し、遺跡周辺も約25cmの積雪となってしまった。懸命の雪掻きにもかかわらず現場作業は一週間の中止となり、年が明けた。平成12年1月8日、柳II遺跡と合わせて空撮を行い、1月13日に全調査を終了した。

第2節 柳遺跡北区の調査

柳遺跡北区の立地と概要

(第33,34図、写真図版19上、下)

柳遺跡北区は、平成7年度の既掘区北側に隣接する調査区で、遺跡を構成する東側斜面のなかで最も北側に位置する。前回の調査では、竪穴住居址、加工段など多数の遺構が検出されたが、調査区の北側ほど遺構の密度が高まる傾向が見られた。

実際、今回の調査区は小さなものであったが、竪穴住居址2（うち1/2まで既掘のもの1）、加工段3、小横穴墓1を確認した。竪穴住居と加工段はいずれも弥生時代後期後半に位置付けられ、塩津2期から5期にあたると考えられる。小横穴墓は上半部が果樹園の造成により破壊されており、奥壁と側壁の一部が残る程度である。

この横穴墓は出土遺物から7世紀中葉のものと考えられる。

遺構外出土の遺物も大半が弥生時代後期後半にあたるが、上層の流土から須恵器、土師器が少量出土している。

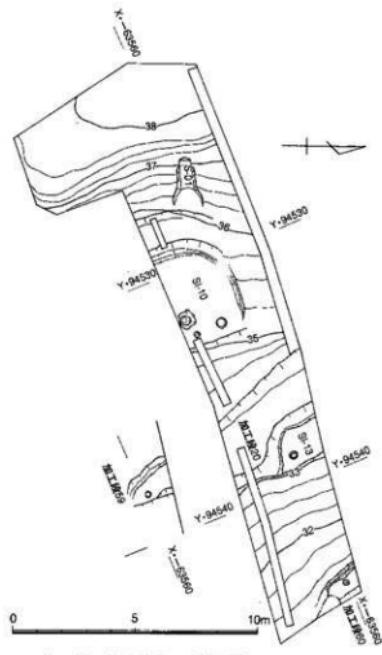
SI10（第35図、写真図版20）

標高35.5m付近に位置する竪穴住居址である。前回の調査で南半部が検出されており、今回の調査で全容が明らかになった。

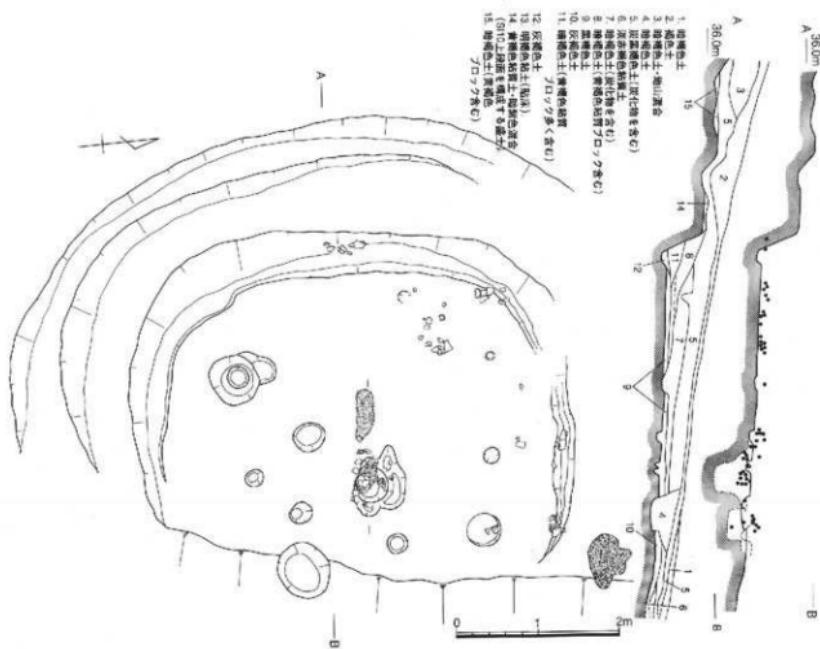
SI10は円形に近い構丸方形の竪穴住居址である。壁面ではコーナーの存在が見て取れるのに対し、壁体溝ではあまり明確でない。東側（谷側）の1/4～1/5が流失しており、北西角付近は後世の搅乱を受けている。最も残りのよい西壁の一辺は約4.4m、東西残存長約3.8mであり、西壁の高さは50～60cmである。

壁体溝は深さ4～10cmで、壁面から直に掘り込まれている。底部に平坦面を持ち、西壁部分では幅45cmになる。竪穴の背後には幅50～60cmの平坦地を造り出しており、さらにその外側には外周溝が廻っている。平坦地には微妙な凹凸があり、ここに幅の狭い溝が廻る可能性もある。外周溝は最大幅70cmに達するが、北半部では浅く不明瞭である。

SI10の主柱穴は四隅に配置されると考えられるが、うち南西側、北東側の2穴を検出した。南西側のピットは径約60cm、深さ約65cmで、柱根が残っている。北東側のピットは径38cmの円形で、



第34図 柳遺跡北区遺構配置図 (S=1/200)



第35図 横遺跡北区SI10実測図 (S=1/60)

深さは25cmと浅い。北西側の柱穴は、付近が大規模な攪乱を受けており、確認する事ができなかった。攪乱は、後述するS-01の前庭付近から広がっており、明黄褐色土（1～15cm大の角礫を含む地山土）が入り込んでいる。

中央穴（第36図、写真図版21上）

中央穴は堅穴の中心からやや東よりに位置している。またその約20cm西側には、長さ70cm、幅25cmにわたって焼土面が広がっている。

中央穴は、円形のピットに不整形の深い掘り込みが重なった状態で検出された。全体の規模は南北幅75cm、東西幅65cmである。セクションの観察から、当初の中央穴は円形のピットとその東西に段をつけて広がる部分と考えられ、北側に浅く不整形に広がる部分は後に付け加えられたものようだ。中央穴の段は床面から16～20cm下に位置し、東側に付く段が若干低い。底面は径30cmの円形で、段からの深さは30cmである。

中央穴には、第36図に示すように焼土が落ち込んでおり、覆土には木炭粒が含まれる。第1層は焼土を多く含む赤褐色土層で、0.5～1.5cm大の木炭粒が混ざる。中でも焼土のみからなる部分が西側の段を中心に堆積している。第2層の黒褐色土層は、若干の焼土ブロックと木炭粒を含むが、割合はわずかである。第1層の赤褐色土は、貼床土の明褐色粘土を主体とし、焼土や木炭粒が混ざり合って堆積したものである。この土は、すぐ西側の焼土部分に由来すると考えて間違いないだろう。一方、第2層は粘性が弱く粒子も粗い。おそらく、第2層がある程度堆積した後、北側を掘り込

で径を広げ、焼土を搔き落としたのだろう。

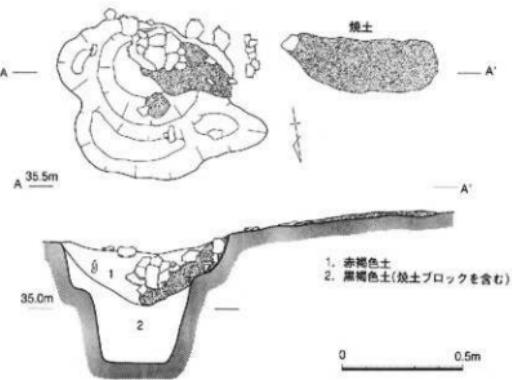
第1層からは、弥生土器の壺片などが折り重なるようにして出土した。またピット周辺の床面上にも、同じ個体の破片が散乱していた。焼土に混じって搔き落とされたようだ。

SI10の遺物出土状況（第35図）

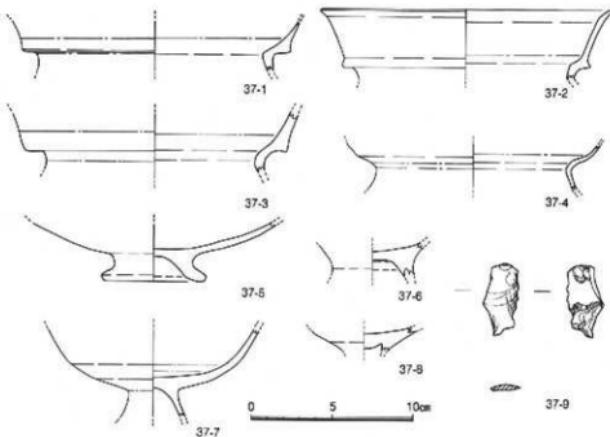
既掘区では床面のほか、外周溝からの出土が目立ったが、北半部では僅かであった。床面では、北西側角に比較的まとまった出土があったほか、前記のように中央穴付近に壺片が折り重なって見つかった。壁体溝付近では、土器がまとまって出土した部分が幾つかあったが、これらは住居の廃棄後比較的早い時期にはまり込んだものと考えられる。

SI10出土遺物（第37図、写真図版27）

37-1は壺の口縁部である。端部は欠損しているが、口縁は緩やかに外傾する。複合口縁の稜は横に引き出しが、内面は明瞭な稜を持たない。胴部内側にはケズリを施す。-2、-3、-4は壺であろうか。いずれも口縁部はナデ調整で、胴部内面はケズリを施す。しかし風化が激しいため、ケズリの単位は見分けられない。-2は複合口縁の稜を横に引き出し、口縁部は直線的に立ち上がる。端部はやや



第36図 樅遺跡北区SI10中央穴実測図 (S=1/20)



第37図 樅遺跡北区SI10出土遺物 (S=1/3) (37-9はS=1/1)

細め、外に向けアクセントが付く。-3は稜が僅かに下に突き出るが、口縁は真っ直ぐのびる。内面も直線的に伸び、稜は目立たない。-4は稜が不明瞭で、口縁はなだらかなS字を描いて外反する。風化の影響もあるが、どの部分も厚さ3mm前後と薄く、華奢である。灰黄色を呈し、石英、長石粒を多く含むなど、他のものとは胎土が異質である。

-5,-6は低脚坏である。-5は坏部の大部分を欠くものの、脚台部全周の約8割が残っている。坏部は緩やかに開き、脚は坏部に対して小柄ながら踏ん張る。風化のため細部の調整は定かでないが、別づくりの脚を撫で付ける。-6は基部のみが残る。脚の作りは-5と同じであるが、より直線的にのびる兆しが見られる。

-7は高坏である。坏部、脚部の大部分を欠き、基部以外の残りはよくない。復元した坏部は楕状を呈すが、もう少し開く可能性もある。脚部は別づくりで、内外から撫で付ける。-8も高坏の基部である。脚部は円盤充填法で接合し、充填部の中心には浅い小孔があく。脚部はほとんど残っていないが、円筒形にのびる可能性が高い。

-9は黒曜石のチップである。長さ1.6cm、幅6mmで、二次加工はなされていない。SI10北東端部の、壁体溝が丁度消える部分から出土しており、覆土に混入していた可能性がある。

SI10の位置づけであるが、前回の調査では、壺、甕の特徴、脚柱部が円筒形で口径の広い高坏の存在から、塩津5期とのとの見解がなされている。^{注2}今回の出土遺物では、稜や端部にアクセントが付く-1,-2は塩津5期の特徴を示している。また-8の高坏は、その緩やかな坏部の開き具合から5期を与えてても良さそうだ。前回の資料に比べしさか貧弱な感は否めないが、見解を補強する資料といえるだろう。



第38図 柳遺跡北区SI13・加工段20・加工段59 関係図 (S=1/60)

SI13、加工段20、加工段59の関係

(第38図、写真図版21中)

加工段59、加工段20、SI13は、調査区の中程、標高33~34.5m付近に重なり合って確認された。このうち加工段20は既掘区に一部が掛かっており、南北約80cm、東西約3.3mの範囲が調査済みである。

これらの遺構のうちSI13が最も古く、続いて加工段20、加工段59の順で形成される。SI13は全体の約1/4を確認したにすぎないが、隅丸方形の竪穴住居と考えられる。加工段20は、SI13の竪穴がある程度埋まつた段階で、背後の壁面と覆土を削り込んで、広い平坦面を得ている。

一方加工段59は、加工段20が廃棄され、埋まつた後に、その覆土を削り込んで造られている。

SI13 (第39図、写真図版21下)

加工段20、59の直下に検出された竪穴住居址である。北半部は用地外であり、谷側は流出しているため検出部分は少ない。しかし壁際に明瞭な溝が通り、隅丸方形形状に背後の壁を整形するなど竪穴住居址の可能性が高いと判断した。

床面の検出部分は南北約2.6m、東西約1.8mで、谷側に向かって若干傾斜している。覆土のうち第14層は木目の細かい粘質土だが、色調の違いこそあれ、加工段20の貼床土（第12,13層）と同質の粘質土である。こうした状況を考えると、第14層は加工段20造成の際に入れられた土であろう。竪穴の背後にあたる壁面は、現状で高さ25cm程でしかないが、大部分は加工段20が造られた際に、加工段の床面に合わせて削平されたと考えられる。

横体溝は、壁面から直に掘り込まれており、溝の幅は8~12cm、深さは10~15cmである。南西角はやや膨らんだ後、鈍角気味に曲がる。溝内の覆土は炭粒を多く含み、竪穴の覆土（第15層）と分層出来たかもしれないが、セクションを取った北壁面では明確でなかった。

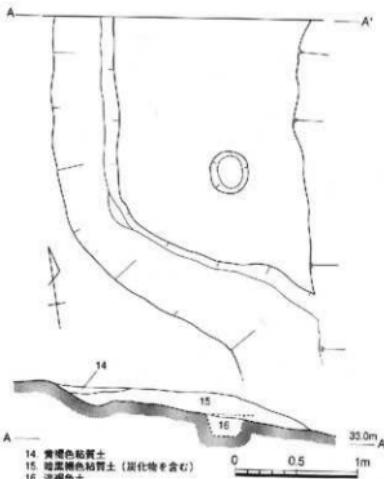
主柱穴は南西隅のものを確認した。径約32cm、深さ約20cmのほぼ円形であるが、床面の傾斜を考えると、実際より若干浅くなっているだろう。覆土は淡褐色を呈し、若干の炭粒を含む。炭粒は上部ほど多いが、分層する事はできなかった。

出土遺物は、弥生土器数片のみであった。壺、甕などの胴部が多く、時期は不明である。

加工段20 (第40図、写真図版22上)

調査区の中ほど、標高33~34.5m付近で、SI13、加工段59と重なり合って検出された加工段である。前回の調査で南北約1m、東西約3.3mの部分が確認されていた。今回の調査によって、この加工段はさらに北に伸び、調査区を横断して用地外へと続くことが分かった。既掘部分では、用地境付近で最大幅になることから、未調査部を含めるとかなり大型の加工段と考えられる。

加工段20は、部分的に僅かな凸凹はあるもののほぼ平坦な床面を持つ。検出部分の最大幅は3.4mで、背後の壁の高さは70cm~1.1mで、床面から40~45cm付近に緩やかな段が付く。壁際が若干



第39図 柳遺跡北区SI13実測図 (S=1/40)

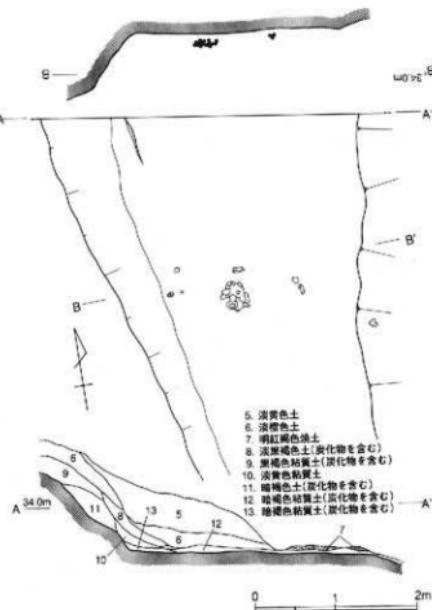
凹んでおり、溝が廻る可能性があるが、明確ではない。

加工段20の覆土のうち、明褐色粘質土層（第12,13層）は約2～5cmの厚さで床面全体に広がっている。木炭粒を多く含む非常に粒子の細かい粘質土で、貼床土（もしくは整地土）の可能性がある。加工段20の出土遺物は、いずれもこの第12,13層の直上から見つかっている。加工段の西半部は地山層を削り込んだものだが、東半部はSI13の覆土を削り込んで造成している。

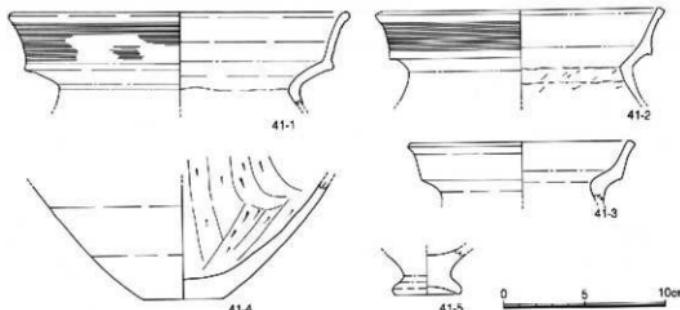
加工段20の出土遺物

（第41図、写真図版27）

加工段20出土遺物のうち、図示できたのは5点である。41-1,-2は、複合口縁の外面に擬凹線を施す壺もしくは壺である。口縁部が外済し、複合口縁の稜は横気味に引き出される。端部はやや膨らむが、-1では丸くおさめるのに対し、-2では面をつくる。胴部内面はケズリを施すが、単位は定かでない。-3は復元口径14cmで、口縁に擬凹線を施さない壺である。複合口縁の稜は引き出さず、角度を付けて立ち上がる。口縁は全体に厚めで短く、端部をやや膨らませて面をつくる。-4は壺もしくは壺の底部である。底部径は4.8cmで開き気味に立ち上るので、やや低い位置に最大径がくるかもしれない。厚さは底部分で1.3cmと厚く、内面は荒いケズリを施す。-5は低脚壺の下部である。底部径は4.0cmで、全体に分厚く内面、外面とも横ナデを施す。



第40図 柳蹟跡北区加工段20実測図 (S=1/60)



第41図 柳蹟跡北区加工段20出土遺物 (S=1/3)

出土遺物の時期は、壺、壺の口縁部が外反し、端部を膨らますことから、塩津2期～3期頃と考えてよいだろう。低脚壺は、塩津3期に位置づけられる。遺物が乏しいため、この加工段の時期を決めるのは難しいが、塩津2～3期の可能性が高い。

加工段59（第42図、写真図版22中）

加工段20の覆土に形成された加工段である。北側は用地外に掛かっており、全体の規模は不明である。この遺構も谷側は流失しているようで、平坦面の残存幅は1.1m、壁の高さは最大で55cmである。壁面に沿って幅25～35cm、深さ3～6cmの溝が廻るが、南側では不明瞭になる。

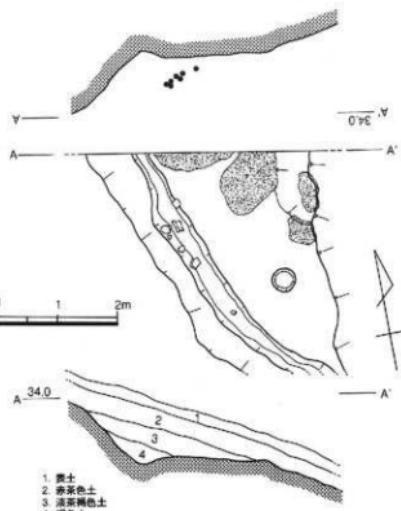
南西隅には径22cmのビットを検出した。また調査区北壁近くの平坦面では焼土を確認した。木炭粒が多く含み、一部は加工段の流失に伴って谷側に流されている。焼土面は、検出状況から考えて、用地外にも広がっている可能性が高い。

加工段59からは、壁付近を中心に十数点の弥生土器片が出土した。いずれも覆土第4層上面から第3層にかけて分布し、床面の遺物はなかった。個々の残りも悪く、図化出来るものはなかった。

加工段60（第43図、写真図版22下）

調査区の最下段、標高30.5～31.5m付近に検出された加工段である。ちょうど北側と東側を用地境に挟まれた角地である。検出範囲は南北幅1.3m、東西幅で90cmだが、平坦部の幅は60～65cmに過ぎず、谷側は流失している。西壁面に沿って溝が廻っており、南端部で東に向きを変える。溝の幅は20～30cmで、深さは5～10cmである。西壁の高さは溝部分も含めて最大55cmに達するが、この付近は南東向きの斜面であるため、南側ほど壁の高さは低くなる。

この加工段では、中程に段の付くビット1穴を確認した。径24cmの円形で、北側に寄った部分に柱根が残っている。深さは最深部で19cm、柱根のある段までで10cmである。

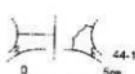


第42図 柳遺跡北区加工段59実測図 (S=1/40)



第43図 柳遺跡北区
加工段60実測図 (S=1/40)

第44図 柳遺跡北区
加工段60出土遺物 (S=1/3)



出土遺物は数点の弥生土器のみであった。床面のものは1点もなく、覆土第4層の上部、および第3層に含まれていた。

加工段60は部分的な検出にとどまり、出土遺物も限られる。しかし既掘区で確認された遺構との関連を見ると、おおよその位置付けはできそうである。加工段60とほぼ同じ標高には、加工段が重なり合って検出されており、これらの加工段は塙津2期から3期にかけて次々に造られている。加工段60について見ると、壁から直に溝を廻らし、そこからあまり離れない位置にビットを掘り込むなど加工段II類にあたると考えられる。¹³直接切り合っていないため、細かな前後関係ははっきりしないが、ほぼ同時期の遺構と考えていいのではないだろうか。

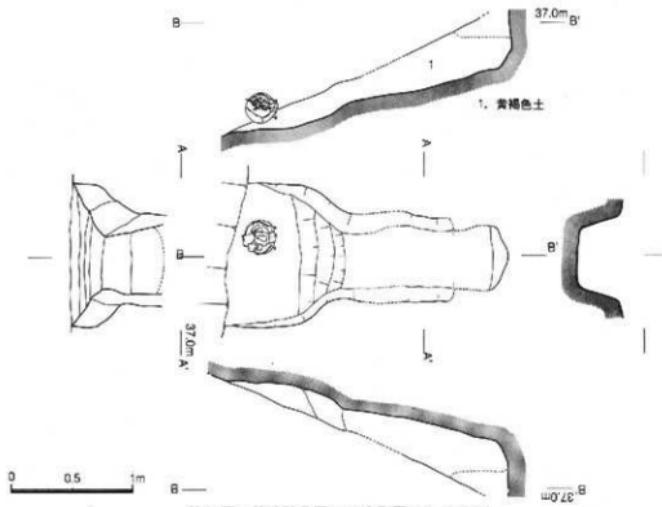
加工段60の出土遺物（第44図、写真図版28上）

加工段60の出土遺物は数量自体少なかったが、図示できるものは1点である。低脚杯の脚部であるが、全周の約1/6が残るにすぎない。胎土は緻密で、内外面ともにナデを施す。

S-01（第45図、写真図版23上）

S-01は、調査区の最高部から僅かに下った標高36.5m付近に検出された小横穴墓である。調査前の観察では横穴墓の存在は全く確認できず、表土掘削の段階でも判別できなかった。しかし、調査区全体を5~10cm掘り下げている途中で、幅80cm、長さ1.5mの隅丸長方形のプランが確認された。また、これと前後して須恵器甕片が一ヵ所からまとめて出土し、この時点ではじめて遺構として認識したのである。

横穴墓は、上半部が削平され、ちょうど溝状に残っている。奥壁と側壁の一部が残り、側壁の残存部の長さは約2.3mである。奥壁は底辺約48cmで、上に向かって幅が広がる。残存部の最大幅は約55cmであるが、床面から25cm程のところで傾斜が変化し、やや内側に張り出しながら立ち上がる



第45図 横穴墓北区S-01実測図 (S=1/40)

る。床面は地山を整形したもので、正面（谷側）に向かってかなり傾斜している。

奥壁から1.7m付近で、両側壁が大きく外側に開き、床面には不明瞭ながら3段の段がつく。閉塞施設の可能性があるが、残りが悪く、それぞれの段の違いは明瞭でない。また、閉塞石は全く見つかっていない。

覆土の観察では、天井や側壁の崩落土は全く確認できなかった。また分層も困難であった。横穴墓の上半部は周囲もろとも削り取られてしまったということだろう。

S-01遺物出土状況

（第45図、写真図版23下）

出土遺物は須恵器壺と甌の2点のみである。壺は口縁部を奥壁側に傾けた横倒しの状態で出土した。壺は大部分潰れていたが、その中から甌が出土した。上下逆さまに甌が入れられた後、壺が倒れて潰れ

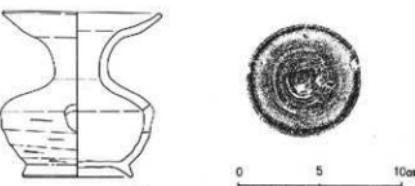
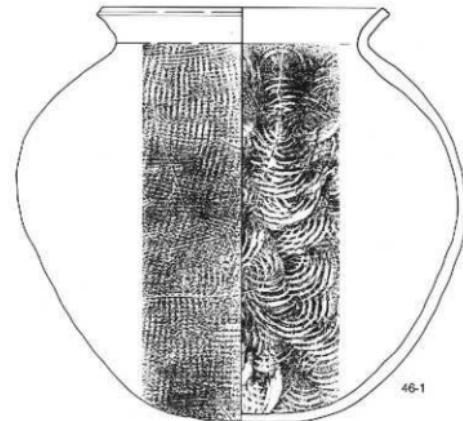
た状態である。甌は壺の中にはまっていたため、ほぼ完形であった。

この壺は、S-01の覆土に載っており、中にも覆土が詰まっていた。こうした状況から、横穴自体が破壊された際に（付近で行われた果樹園の造成時かどうか、定かでないが）、中の遺物がそのまま放置されたのであろう。遺物の時期は、甌が小型で高台が付くことなどから7世紀中頃といえ、S-01もこの時期に位置付けられると考えられる。

S-01出土遺物（第46図、写真図版28中）

46-1は須恵器壺である。口径は17.2cm、器高25.5cm、胴部の最大径27.9cmである。口縁は緩やかに外傾し、口縁端部には平坦面をつくる。平坦面には不明瞭ながら1条の沈線が入る。口縁内面、外面は横向方向のナデ調整である。胴部はタタキを施し、内部には同心円状のタタキ目が明瞭に残る。

-2は甌である。口径9.8cm、器高10.1cmで、高台径は6.6cmである。小型寸胴で頸部は短く、口縁部は内湾しながら広がり、端部は丸く膨らます。肩部から下はヘラ削りを施し、肩はしっかり張る。口縁部から頸部、肩部にかけてはナデ調整を施し、底面はヘラ削りを行っている。高台は接着の後、内側を撫で付けている。焼成は甘く、淡褐色、部分的に淡赤銅色を呈す。僅かに欠けた部分を見ると、胎土内には細かな気泡が多く、0.5~2mm大の石英粒を多く含む。一部には5mm大の砂粒が混じる。



第46図 柳遺跡北区S-01出土遺物 (S=1/3)

第3節 柳遺跡南区の調査

柳遺跡南区の調査概要

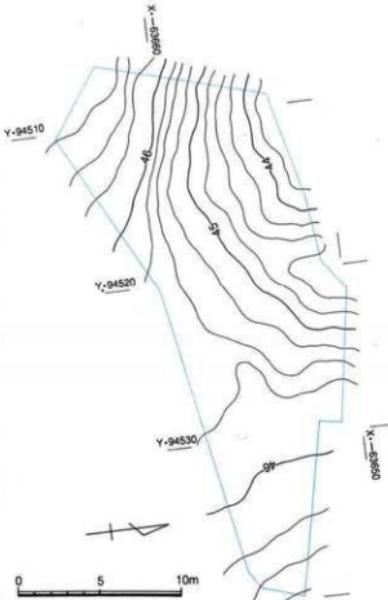
(第47,48図、写真図版24)

柳遺跡南区は、平成7年度の調査区南側に隣接して設定した、約300m²の調査区である。柳遺跡の頂上部から西側の斜面にあたるとともに、調査区の中で最も南に位置する。

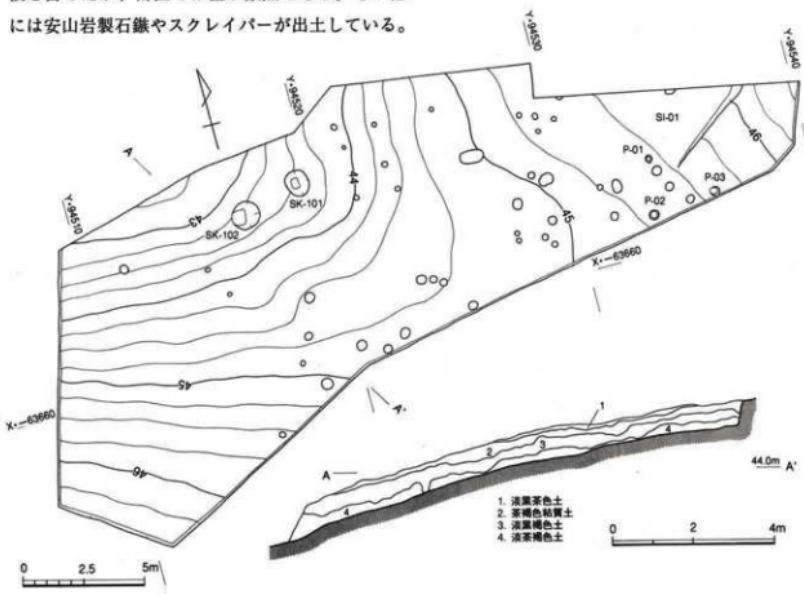
今回の調査では、平成7年度調査で用地境付近から検出された竪穴住居(SI01)の未発掘部分を検出するとともに、大型の土坑2、40余りのピットを確認した。

大型の土坑は2基並んで検出したが、他に対応する遺構が無く、遺物も皆無で性格は不明である。調査区に散在するピットから、竪穴住居の他に何らかの建物が存在したことは間違いないが、個々の建物の配置を把握するには至らなかった。

出土遺物はほぼ全てが弥生時代後期末の土器である。柳遺跡北区では、須恵器、土師器が1割前後を占めたが、南区では僅か数点である。その他には安山岩製石錐やスクレイバーが出土している。



第47図 柳遺跡南区調査前測量図 (S=1/300)



第48図 柳遺跡南区遺構配置図 (S=1/200)　土層図 (S=1/120)

SI01の調査（写真図版26上）

SI01は調査区の東端に位置する竪穴住居址である。ちょうど丘陵頂上の平坦部からわずかに西に下がった場所である。平成7年度の調査では用地境にあたった為、北半部の調査だけ行っていた。今回南半部を検出したことでようやく全容が明らかになった。残りのよい山側の一辺をはじめ、2カ所のコーナーは調査済みであったから、調査面積は床面全体の1/3程度である。

前回の調査から丸4年を経たこともあり、住居址付近はかなり荒廃していた。住居址そのものは、ビニールシートで保護されていたこともあってほぼ原形をとどめていたものの、頂上部から流れ込んだ土砂は竪穴全体を埋めてしまう程であった。また用地外から侵入してきた竹根の被害も大きかった。そこでまず、報告書を元に既掘部分の精査を行い、その後調査に取りかかった。

SI01（第49図、写真図版25）

SI01は、やや角の張った隅丸方形竪穴住居址である。最も残りのよい北東側の壁体溝は、長さ約5.4mである。整体溝の走向は、N34°Wである。他の3辺の壁体溝は残りが悪く、各コーナーも明確でない。とくに南西側は流失が著しく、その痕跡を部分的に検出したにすぎない。

構内覆土は第49図に示す通りである。平成7年度の調査では第9層（褐色粘質土層）について貼床の土の可能性を指摘している。今回の調査部分についても、床面近くに粘質土を検出した。しかし厚い部分でも1cm程度で、南西壁付近では辛うじて確認できる程度であった。壁体溝の残存状況から考えて、貼床土も大部分は流失したものと考えられる。

主柱穴は、今回新たに南西角の1穴が確認されたことで、各コーナーに1穴ずつの配置となった。柱穴の直径は50~60cmであるが、深さは15~40cmとばらつきがあり、山側の2穴がより深く掘り込まれている。谷側の2穴が浅めなのは、床面の流失が影響していると考えられるが、柱穴底面のレベル自体も10~15cm高い。

中央穴は、床面の中心よりやや東側に寄っており、深さ5cmの長方形の落ち込みと、2つの円形ピットが組み合わせた形になっている。既掘部分が大部分を占めるため、特筆すべき新知見はないが、今回全体を検出した長方形の落ち込み部は長さ140cm、幅50cmである。

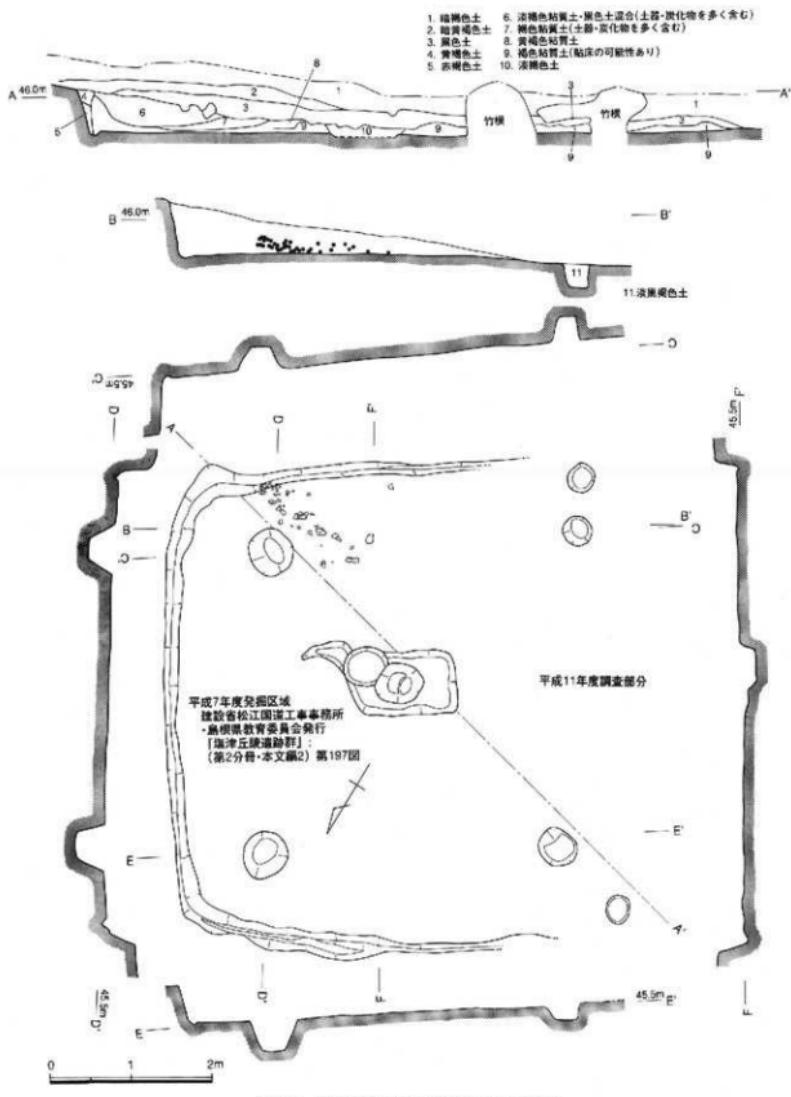
SI01遺物出土状況（第49図）

SI01からは比較的多くの遺物が出土した。前回の調査でも瓶形土器をはじめ、甕、器台などが出土しているが、これらは大きく2群に分けることができた。ひとつは北側のコーナー付近の床面直上から出土した遺物群であり、もうひとつは床面から離れた第3層（黒色土）下面を中心に出土している遺物群である。

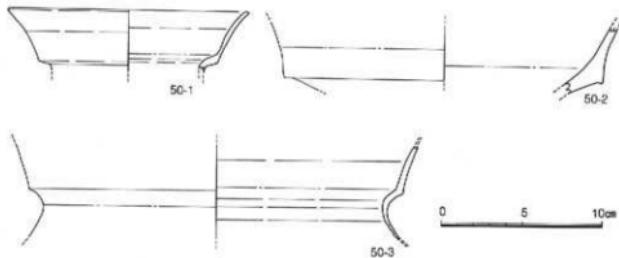
今回の調査で出土した遺物の分布を第49図に示す。遺物が出土した付近は第9層がほとんど残っていない為、第6層、第7層が地山の掘削面まで達している。遺物は第6層、第7層に含まれ、覆土が下に噛んだ状態で出土している。図上で見ると微妙な遺物もあるが、実際の出土状況では、床面直上の遺物はほとんど無い状態であった。これらの遺物は、前回の調査で確認した後者の遺物群（住居の中でも南東角を中心に分布し、第3層下面を中心に、比較的散漫な分布を示す遺物群）に含まれると考えてよいだろう。

SI01出土遺物（第50図、写真図版28上）

SI01からは壺、鼓形器台、甕が出土している。50-1は復元口径14.6cmの壺である。複合口縁部の稜はほとんど張らず、薄手である。口縁は直線的で、中程からわずかに外傾する。口縁端部は丸く



第49図 柳達路南区SI01実測図 (S=1/60)



第50図 柳瀬跡南区SI01出土遺物 (S=1/3)

おさめる。-2は鼓形器台の上部である。外面は横ナデ調整で、複合口縁部の後は僅かに下に張り出す。口縁端部を欠くが、口縁の中程からやや外側に広がるものだろう。-3は復元口径が25cm前後の大型の壺であるが、厚さ2~4mmと薄手である。複合口縁の後はほとんど引き出さず、口縁はまっすぐに立ち上がる。外面、内面とも丁寧な横ナデを施す。

前回の調査で出土した遺物は塩津5期に対応すると考えられているが、今回の遺物も基本的にこの範疇に収まるものである。覆土から出土しただけに、-2のようにやや古い要素を持つ遺物もあるが、國化できなかったものも含め、塩津5期に並行すると考えられる。

SK101・SK102

(第51図、写真図版26中、下)

SK101・SK102は、約1.8mの間隔をおいて並んで検出された大型の土坑である。

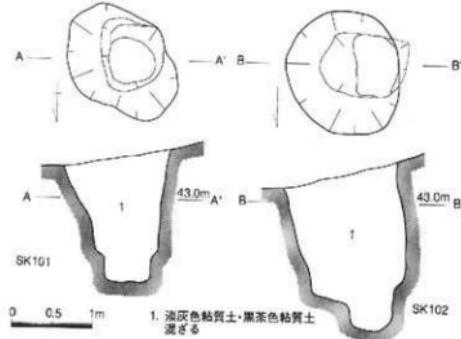
SK101は上部径1.3m、底部径60cmの扁平な橢円形の土坑で、深さ1.8mである。底面から45cmの高さで僅かに段が付くため、断面形は逆凸形である。

SK102は上部径1.4m、底部径60cmで、深さ約2mである。SK101と同様の形状で、中程に段が付く。

上段はほぼ円形プランの土坑だが、下段は隅丸方形である。丘陵斜面に対して垂直に掘り込む意図があったのか、下段は中心部からかなり西に外れている。

これらの土坑の覆土は、淡灰褐色粘質土と黒茶色粘質土が混ざったもので、混ざり具合によって部分的に多少の濃淡があるものの基本的に底部まで均一であった。段の付く付近では特に念入りに土層を確認したが、土層の違いは確認できなかった。また遺物も出土しなかった。

両土坑の時期や性格を判断することは難しいが、深さ、段の付き方が類似しており一連の遺構であることは間違いないだろう。



第51図 柳瀬跡南区SK101/ SK102実測図 (S=1/60)

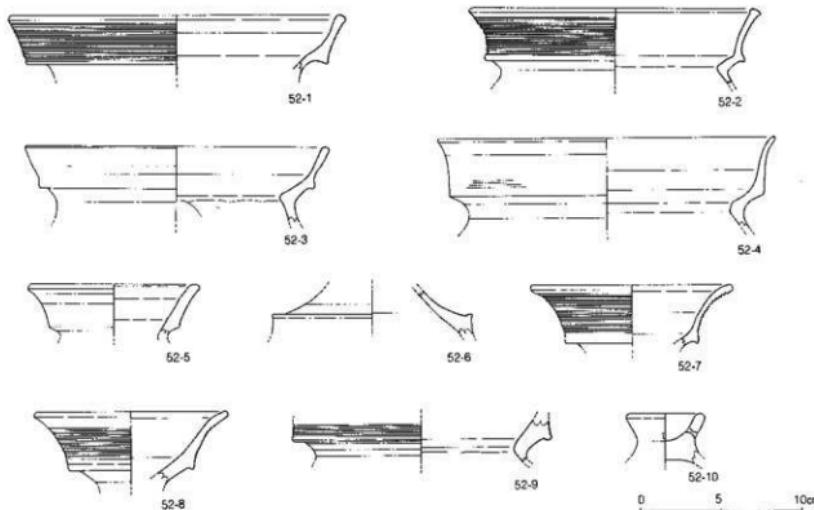
第4節 遺構外出土遺物

調査面積の割に遺構に恵まれた今回の調査だが、遺構から出土した遺物は少なかった。以下に遺構外出土の遺物をまとめて掲載したい。

遺構外出土遺物1（第52図、写真図版29）

-1から-4は塩津2期にあたる壺の口縁である。口縁部は強く外溝し、端部を彫らませている。複合口縁の稜は下向きに張り出す。-1,-2は口縁部外側に擬凹線を施す。-1は復元口径20.4cmで、口縁端部は丸くおさめる。-2は復元口径17.4cmで、端部には内傾する平坦面をつくる。-3は擬凹線を施さない壺で、口縁部中程を一端絞ってから外溝する。-4は表面の風化のために不鮮明だが、一部に擬凹線が確認できる。口縁は外溝するものの立ち気味であり、端部付近で少しだけ外反することから、塩津2期の中でも3期への過渡的な要素を持つといえる。

-5から-8は鼓形器台である。受け部3点、脚台部1点だが、全て別個体である。-5は復元口径10.2cmの器台の受け部である。内面に稜が付かず、直線的に仕上げていることから器台と判断したが、壺の可能性もある。全体に厚手で、端部まで厚みがほとんど変わらない。外面はナデ調整、内面はミガキを施すようだ。時期の判断は難しいが、口径が小さく、全体に厚手であることを考えると塩津2期から3期であろう。-6は内面に荒いケズリを施したままで、脚台部であろう。風化が著しく詳細は不明であるが、擬凹線は施さないようである。-7,-8は擬凹線を施した受け部である。復元口径は11~12cmで、口縁は大きく外溝する。筒部を欠くが、比較的細めで長い筒部が付くと思われる。内面の調整は風化のためはっきりしないが、端部に近い部分はミガキを施すようだ。これらはおおむね塩津2期と考えられるが、-8は口縁中程からやや屈曲することを考えると、3期としてもよさそうである。

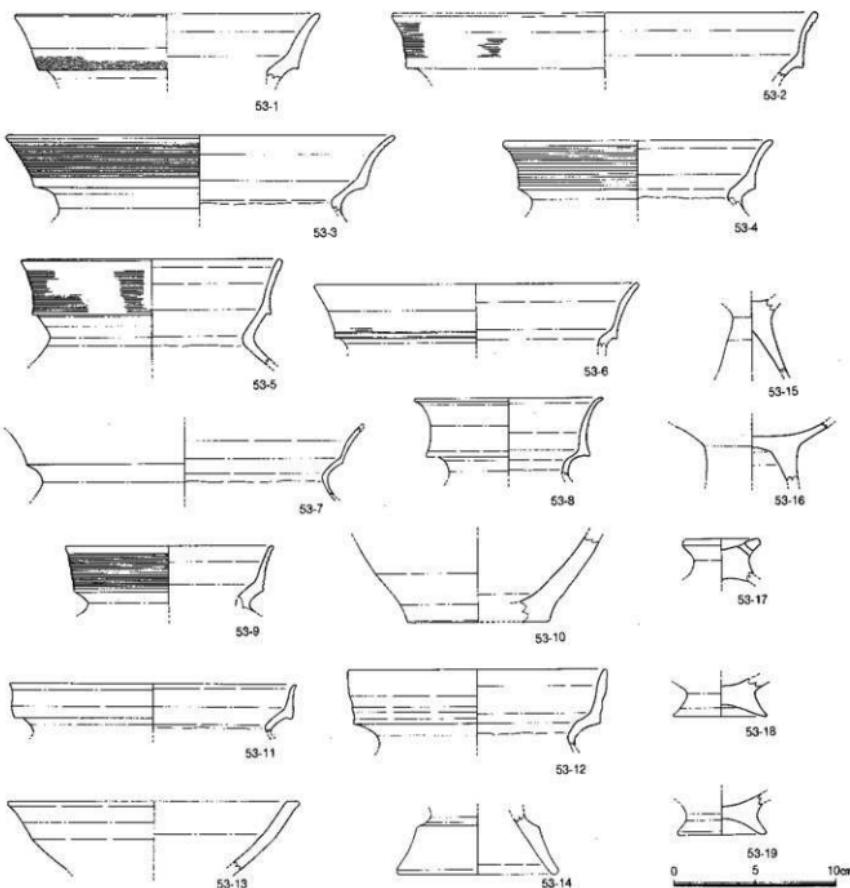


第52図 柳遺跡遺構外出土遺物1 (S=1/3)

-9は複合口縁の大部分を欠くが、壺であろうか。口縁部外面には擬凹線を施し、稜は下向きに張り出す。口縁内面はナデ調整で、胴部内面にはケズリを施す。-10は分厚い土器で、上部に径4 mmの小孔を貫通させていることから、蓋であろう。つまみは径4.4cmで、蓋本体とは別づくりである。つまみの内面、外面はナデ調整で、蓋の内面は不鮮明だがケズリを施す。

遺構外出土遺物2（第53図、写真図版29,30）

53-1～-12は壺、壺である。-1は大きく外湾する口縁部を持つ壺で、全体的に厚めだが、端部は細くおさめる。淡赤褐色を呈し外面に波状文を施すが、表面の風化が激しいため口縁の下部1/3程度しか確認できない。塙津3期と考えられる。-2～-5は口縁部外面に擬凹線を施す壺である。-2, -3は復元口径23～24cmで、外湾する口縁は中程から折れて大きく広がる。細部の調整は不明だが、胴部



第53図 柳遺跡遺構外出土遺物2 (S=1/3)

内面はケズリを施す。-4,-5は、口縁が立ち気味だが中途から外側に反り返る。復元口径は約16cmで、口縁端部は細めて丸くおさめる。これらは塙津4期に近い特徴も見られるが、総じて塙津3期と考えて良いだろう。-6,-7は擬凹線を施さない壺である。-6は口縁部外間に僅かな横方向の調整が見て取れるが、擬凹線かどうか判別できない。-7は、厚さ3~4mmと薄手で、複合口縁の稜は張り出さずに屈曲する。口縁は端部を欠くが、しっかり外溝する。

-8,-9は壺の口縁であろうか。-8の複合口縁の稜は若干下向きに張り出し、口縁部は大きく反り返る。端部は細めて丸くおさめるが、端部で僅かに外向きのアクセントが付く。-9は真っ直ぐに立ち上がる口縁部が新しさを感じさせるが、外面には擬凹線を施す。塙津4期の範疇に入るだろう。

-10は底部であるが、風化が激しく調整は定かでない。-11は口縁端部を薄くのばし、僅かに外反する壺である。-12は口縁が微妙に揺れながら立ち上がる壺で、塙津4期から5期にあたると考えられる。-13は鉢であろうか。低脚坏の坏部の可能性もある。口縁部は中途で折れ、若干外反する。復元口径は18cmで、口縁端部に半坦面をつくる。内面はミガキが入るようだが、はっきりしない。-14は鼓形器台の脚台部である。

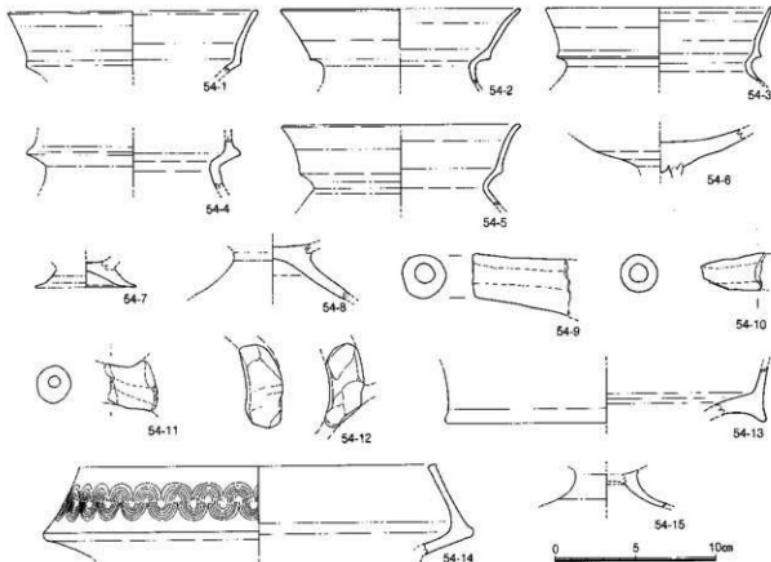
-15,-16は高坏の脚接合部である。-16は円盤充填されているが、接合の後内面を撫で付けている。淡赤褐色を呈し、胎土はやや荒い粒子を含む。-17は壺で、径5mmの穴をつまみの内面側から開ける。外面、つまみ内面はナデ調整で、蓋内面は不明瞭だがミガキのようである。-18,-19は低脚坏の脚台部である。脚部径はそれぞれ5.8cm,5.4cmで、脚部はなだらかに広がり、接地面では微妙に反り返って踏ん張る。脚外面は横ナデで、内面は荒いケズリを行った後、ナデ調整を施す。

遺構外遺物3（第54図、写真図版30,31）

54-1~-5は塙津4期から5期の壺である。-1,-2は口縁部があまり外反せず、真っ直ぐ伸びる壺である。複合口縁の稜は明確に引き出されないが、稜の上部を強く横ナデすることでしっかりと稜を作り出す。-1は口縁端部を彫らませつつ丸くおさめる。-2では端部を薄く仕上げ、僅かに外向きのアクセントをつける。塙津4期でも新相にあたるだろう。-3は塙津5期の壺である。口縁は真っ直ぐ立ち上がり、端部は細めて丸くおさめる。複合口縁の稜は頸部を延長するようにしっかりと引き出す。復元口径14.6cmで暗黄褐色を呈する。-4は複合口縁の上部を欠くが、口縁が内傾する壺であろう。頸部から続く複合口縁の稜は、両側からつまみ出すようにして太く突き出る。口縁部外面、内面はナデ調整を施す。-5は口縁端部にアクセントの付く壺で、端部を小さく膨らませてから外向きに引き出す。口縁部内面は丁寧なナデを、胴部内面はケズリを施す。

-6は高坏の接合部である。円盤充填技法を用いるが、風化が激しく細部の調整は不明である。暗赤褐色を呈し、胎土には長石、石英粒を多く含む。-7は低脚坏の脚台部である。脚部は薄く引き伸ばし、平たく開いて接地面を多く取る。脚部内面は中心部から回転ヘラケズリを行い、端部は横ナデを施す。-8は脚部が大型の低脚坏であろうか。脚部は僅かに外湾しながら大きく聞く。円盤充填法を用い、円盤を充填した後、脚部内面を丁寧に撫で付けている。

-9~-11は注口土器の注口部である。-1は太さ2.7cmで、径約1.2cmの孔が貫通する。全体に厚手だが、開口部は平面に整っている。-10は先端をやや細めており、径1.2cmの孔が貫通する。-11は注口の基部で、径8mmの孔が開く。-12は壺の胴部に付く取手であろう。破断面の形状から考えて、胴部でもかなり上部に付いたものようだ。取手の断面形は隅丸方形で、丁寧に面取りされている。胴体との接合は、取手を差し込んだ後、胴体内側から撫で付ける方法である。



第54図 柳遺跡遺構外出土遺物3 (S=1/3)

-13は断面T字形の口縁を持つ壺もしくは器台であろうか。口縁部は頭部から大きく横に広がるが、複合口縁の稜は下向きに強く迫り出している。口縁外面は真っ直ぐ立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁の形状は吉備地方の土器を思わせるが、胎土は柳遺跡出土の他の土器と同質に見える。当地で模倣されたものようだ。

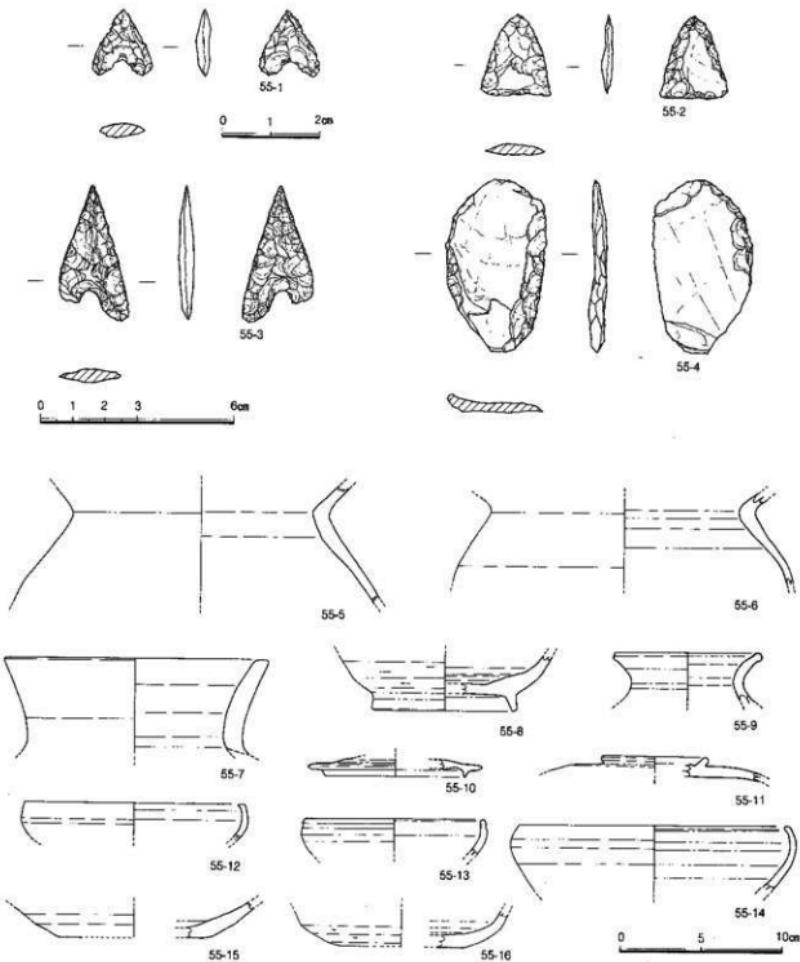
-14は内傾する口縁を持つ壺である。しっかりしたナデ調整によって複合口縁の稜を肥大させ、先端には面をつくる。口縁部は別づくりで、僅かに反りながら内傾する。口縁端部には平坦面をつくる。口縁外面は同心円状の文様が入るが、上下で二分し、互い違いに施す。

遺構外出土遺物4 (第55図、写真図版31)

55-1～-3は安山岩製の無茎石鎧である。-1は長さ1.3cm、重さ0.26gである。-2は平基式で、長さ2.5cm、重さ1.42gである。刃部は細かい連続した調整を行うが、基部の一部にも調整を入れる。-3は長さ4.2cmの抉基式石鎧で、重さは2.54gである。

-4は安山岩製のサイドスクレイバーである。剥片の打点部、縁端部をそれぞれ折り、刃部以外は刃潰しを行う。刃部は片面調整で、使用痕はない。

-5、-6は単純口縁の土師器である。淡黄褐色を呈し、胎土は緻密である。胴部外面はケズリを施すが、外面は風化が激しく詳細は不明である。-7は口縁が立ち気味になる土師器である。口縁は緩く外反し、端部には平坦面をつくる。厚さ1.3～1.6mmと厚く、頭部から口縁端部まではほぼ同じ厚さである。あまり見ない口縁だが、口縁がやや長めで直線的に立ち上がる壺であろうか。胎土は比較的緻密だが、1～7mm人の砂粒を多く含む。



第65図 柳遺跡遺構外出土遺物4 (S=1/3、55-1はS=1/1、55-2~4はS=2/3)

-8～-16は須恵器である。-8は高台の付く底部で、ヘラ切りの後、ヘラケズリを行い、高台を撫で付けている。高広ⅢB期にあたる。-9は壺の口縁である。口縁部は大きく外湾し、端部をやや膨らませて丸くおさめる。内面、外面とも横ナデである。-10は復元口径10.8cmの壺蓋で、かえりが付く。-11は壺蓋で、外面はヘラケズリを施し、輪状つまみをつける。口縁が欠損するが、高広ⅢA～ⅢB期であろう。-12,-13,-14は口縁が内傾する壺である。-13は復元口径11.0cmの小型の壺で、端部外面に沈線を1条めぐらす。-15は底部の破片で、底部はヘラケズリを行う。-16は、内面はナデ調整だが、底部に静止糸切り痕が残る。高広ⅢB期であろう。

以上のように出土須恵器は、おおむね7世紀中葉から8世紀前葉といえる。

第5節 まとめ

今回の調査は、調査面積こそ僅かであったが、竪穴住居をはじめとする多くの遺構を検出した。柳遺跡北区では、用地外の部分が多く、遺構の全容を把握できなかつたとはいえ、概要を掴むことはできた。特に前回の調査で指摘された、遺跡の北側ほど遺構が集中する傾向は、今回の結果でも裏付けられたと言えるだろう。地形図（第2図）を見ると、斜面は用地外北側に約20m程続いており、遺構がさらに続いている可能性が高いだろう。

北区の調査では、横穴墓(S-01)が見つかった点が注目される。大部分が掘削されていたとはいえ、7世紀の遺構は遺跡内で初めての検出である。7世紀中葉から8世紀にかけては、塩津丘陵遺跡群の中でも空白期にあたり、出土遺物も無い時期であった。同時期では、谷を挟んだ中海側の丘陵裾に位置する岩屋遺跡の包含層から、須恵器が30点ほど出土しており、南西に位置する小久白遺跡では、2号建物址から蓋坏などが出土している。しかし、横穴墓が盛んに造られた安来平野周辺にあって、塩津丘陵の同時期の遺跡は意外に限られている。依然として資料に乏しいことは確かだが、今後の研究に期待したい。

南区では、S101、大形土坑以外に目立った遺構はなかった。しかし、調査区に散在するピットは、この付近にも何らかの建物群が配置されていたことを示している。遺構は散漫になるものの、遺跡が南側・西側の未調査区にさらに広がっていたことは間違いないだろう。

以上のように、今回の調査は既掘区の調査結果を補完するとともに、幾つかの新知見も得ることができた。筆者の力不足故に残された課題も多々あるが、今後の研究の一助となれば幸いである。

平成11年度 柳遺跡竪穴住居址、加工段状遺構一覧表

| 竪穴住居址 | 長さ(m) | 幅(m) | 床面形状 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|------|--------|----------------|
| S101 | 5.4 | (5.0) | 隅丸方形 | 弥生土器 | 塩津5期 | |
| S110 | 4.4 | (3.8) | 隅丸方形 | 弥生土器 | 塩津5期 | |
| S113 | (2.6) | (1.8) | 隅丸方形？ | 弥生土器 | | 加工段20に切られている |
| 加工段 | 長さ(m) | 幅(m) | 類型 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
| 加工段20 | (5.5) | (3.4) | Ⅲ | 弥生土器 | 塩津2～3期 | 用地外に続く |
| 加工段59 | (3.7) | (1.1) | Ⅱ？ | 弥生土器 | | 加工段20の覆土上に造られる |
| 加工段60 | (1.3) | (0.9) | Ⅱ | 弥生土器 | | 用地外に続く |

註1 烏根県教育委員会編「塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎道路・柳遺跡・附丸ノ尾古墳）一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」西地区Ⅱ 1998

註2 以下須恵土器の編年は、註1によった。

註3 平成11年度の調査で新規に検出した遺構の名称は、既掘区の遺構番号を引き継いで命名している。

註4 既掘区内検出の遺構は、加工段28、29、30、31、S111である。S111が古墳時代中期頃とされる以外、塩津2期から3期にかけて次々と造られた加工段である。

註5 註1の中で丹羽野治氏は、塩津丘陵遺跡群の加工段を3層に分類し、それぞれの性格について検討を加えている。加工段Ⅲ群は、構造的にしっかりとしたものではないが、何らかの建物が存在したと考えられる一群で、作業場としての機能を持つもののがかなりあるのではないか、と述べている。

註6 駆逐分析を行っていないため、極めて主観的な問題になるが、色調、胎土共に塩津5期の土器と非常に似かよっており、風化の度合いも同様である。

註7 烏根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書-和田開拓造成工事に伴う発掘調査」1984 以下須恵器編年はこれによった。柳遺跡では、加工段16出土物に時期不明の須恵器があるが、その他のにこの時期にあたる遺物は出土していない。また、開拓する竹ヶ崎道路・塩津山遺跡でも、8世紀中葉以降の須恵器が出土しているものの、同時期の遺物はない。

註8 安来市教育委員会「岩屋遺跡・柳地区住宅用地造成工事半案に伴う埋蔵文化財調査報告書」安来市埋蔵文化財調査報告書第30集 2000

註10 安来市教育委員会「小久白遺跡詳細分布調査報告書」1984

柳遺跡出土十器觀察表

| | | | | | | |
|------|----|------|------|-----------|---------------------------------------|-----------------------------|
| 53-8 | 29 | 鷹生土器 | 壺 | (口径11.6) | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 灰褐色 (裏面) 暗褐色 | (内側) カキ?、ケズリ (外側) ナド |
| -9 | 29 | 乳食土器 | 壺 | (口径12.0) | (底) 黒色 (側面) 灰褐色 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド (外側) ナド |
| -10 | 29 | 鷹生土器 | 壺部 | (底) 8.6 | (底) 黒色 (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) (外側) ナド? |
| -11 | 29 | 鷹生土器 | 壺 | (口径17.5) | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 灰褐色 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド、カキ? (外側) ナド |
| -12 | 29 | 鷹生土器 | 壺 | (口径16.0) | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 灰褐色 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド、ケズリ (外側) ナド |
| -13 | 29 | 乳食土器 | 鉢? | (口径17.5) | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド (外側) ナド |
| -14 | 30 | 鷹生土器 | 鉢形器物 | (底) 9.6 | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) ケズリ (外側) ナド |
| -15 | 30 | 鷹生土器 | 壺部 | — | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 灰褐色 (裏面) 暗褐色 | (内側) (外側) ナド |
| -16 | 30 | 鷹生土器 | 高杯 | — | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) (外側) ナド |
| -17 | 30 | 鷹生土器 | 壺 | (にぎり持4.6) | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) カキ? (外側) ナド |
| -18 | 30 | 鷹生土器 | 瓶状壺 | 底径5.8 | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド (外側) ナド |
| -19 | 30 | 鷹生土器 | 低脚壺 | 底径4.5 | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド (外側) ナド、ケズリ |
| 54-1 | 30 | 波瀬器 | 底生土器 | (口径15.4) | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) (外側) ナド |
| -2 | 30 | 鷹生土器 | 壺 | (口径14.6) | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド? (外側) ナド |
| -3 | 30 | 波瀬土器 | 壺 | — | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド (外側) ナド |
| -4 | 30 | 鷹生土器 | 壺? | — | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド (外側) ナド |
| -5 | 30 | 鷹生土器 | 壺 | (口径13.8) | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド、ケズリ (外側) ナド |
| -6 | | 波瀬土器 | 高杯 | — | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド? (外側) ナド? |
| -7 | 30 | 鷹生土器 | 低脚壺 | — | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) ケズリ、ナド |
| -8 | | 鷹生土器 | 低脚壺 | — | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) (外側) ナド |
| -9 | 30 | 鷹生土器 | 注口土器 | — | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | (内側) ナド |
| -10 | 30 | 鷹生土器 | 注口土器 | — | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | (内側) ナド |
| -11 | 30 | 鷹生土器 | 注口土器 | — | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | (内側) ナド |
| -12 | 30 | 鷹生土器 | 壺の取手 | — | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | (内側) (外側) ナド |
| -13 | 31 | 鷹生土器 | 壺?器? | — | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | (内側) ナド (外側) ナド |
| -14 | 31 | 鷹生土器 | 壺 | (口径22.0) | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | (内側) ミガキ (外側) ナド、心円凹模の文様 |
| -15 | | 鷹生土器 | 低脚壺 | — | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | 風化により不明瞭 |
| 55-5 | 31 | 通水器 | 土器類 | — | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) (外側) ナド |
| -6 | 31 | 土器類 | 壺 | — | (底) 黒色、石英粒を含む (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) ナド ケズリ (外側) ナド? |
| -7 | 31 | 土器類 | 壺 | (口径16.2) | (底) 黒色 (側面) 良好 (裏面) 暗褐色 | (内側) (外側) ナド |
| -8 | 31 | 土器類 | 底盤 | (底) 8.4 | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | (内側) ナド (底) ナド、ヘラケズリ |
| -9 | 31 | 通水器 | 壺 | (口径9.2) | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | (内側) (外側) ナド |
| -10 | 31 | 通水器 | 壺 | (口径10.8) | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | (内側) ナド (外側) ヘラケズリ |
| -11 | 31 | 通水器 | 壺 | (つまり強6.6) | (底) やや良好 (側面) 暗褐色 | (内側) ナド (外側) ヘラケズリ、ナド |
| -12 | 31 | 通水器 | 壺身 | (口径11.0) | (底) 良好 (側面) 暗褐色 | (内側) (外側) ナド |
| -13 | 31 | 通水器 | 壺身 | (口径11.0) | (底) 良好 (側面) 暗褐色 | (内側) ナド (外側) ナド、口縁部に沈着一帯 |
| -14 | 31 | 通水器 | 壺身 | (口径16.6) | (底) 良好 (側面) 暗褐色 | (内側) (外側) ナド |
| -15 | 31 | 通水器 | 壺部 | — | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | (内側) ナド (外側) ナド、ケズリ |
| -16 | 31 | 通水器 | 壺身 | (底) 7.8 | (底) 良好 (側面) 優美褐色 | (内側) ナド (外側) ナド、ナド |

第5章 柳II遺跡

第1節 調査の状況と経過

調査前の状況（第56図）

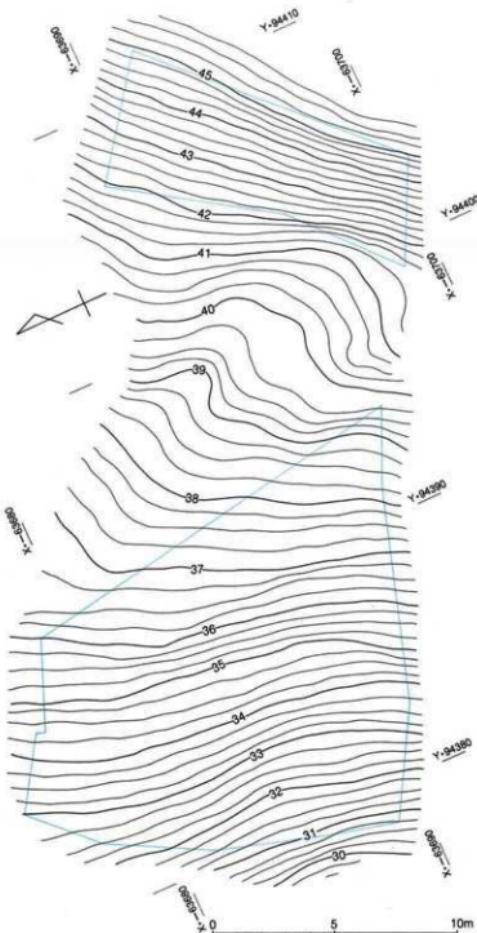
柳II遺跡は島根県安来市荒島町字柳他に所在し、東西にのびる丘陵上に続いている塩津丘陵遺跡群の中で最も西に位置する遺跡である。この付近の丘陵は標高約50mで、細かい谷が幾つも入り組んで支丘を形成している。

柳II遺跡はそれらの谷の中でも比較的大きな、丘陵を横断する谷に面した西側斜面に位置している。比高約25mの比較的急峻な斜面だが、標高40mを境に下部はやや緩やかになっている。

柳II遺跡は昭和63年度の分布調査で確認され、平成6年の試掘調査を経て、平成7年度に本調査を実施した。斜面部に設定したI区では、弥生時代前期の土器棺墓、弥生時代後期末の住居址、古代の遺構、土坑などを検出した。一方、小久白墳墓群に続く丘陵鞍部に設定した。II区では、古墳時代中期の竪穴住居1棟、掘立柱建物5棟以上、土坑3基などを検出した。なかでもSB08から勾玉未製品、砥石等玉作関係の遺物が出土したことが注目される。平成8年度にはこれらの成果をまとめた報告書が刊行している。

調査の経過

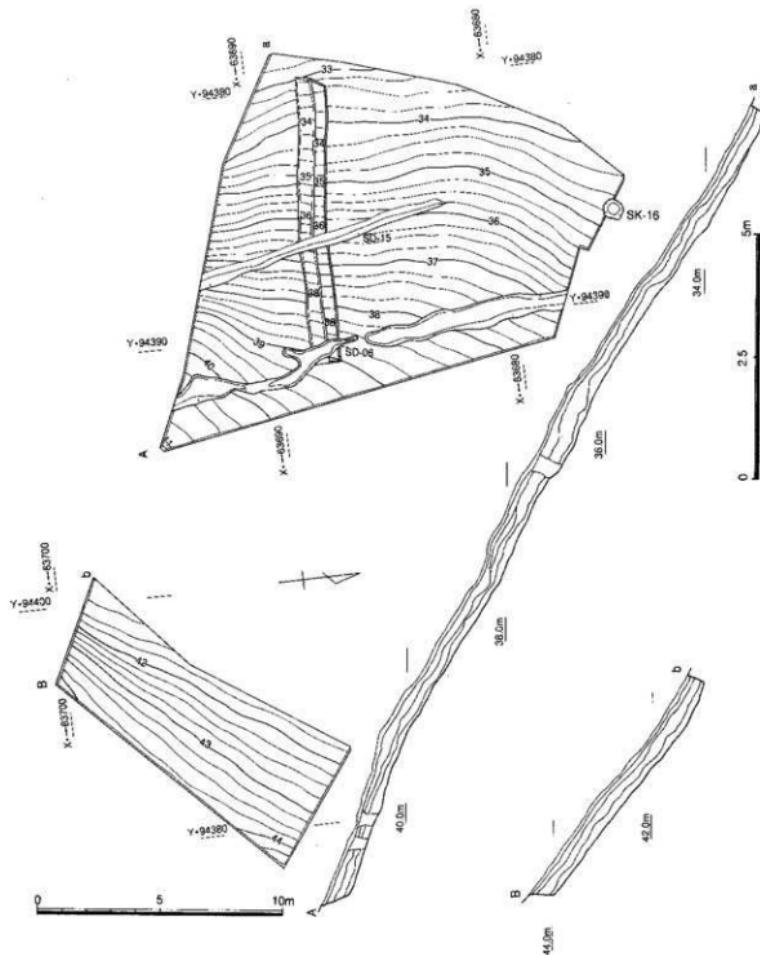
今年度の調査は、工法変更に伴う追加買収部分について行った。調査区は既掘部分の南に隣接しているが、前回の調査結果を考慮してA区・B区の二か所を設定した。A区は標高42~45



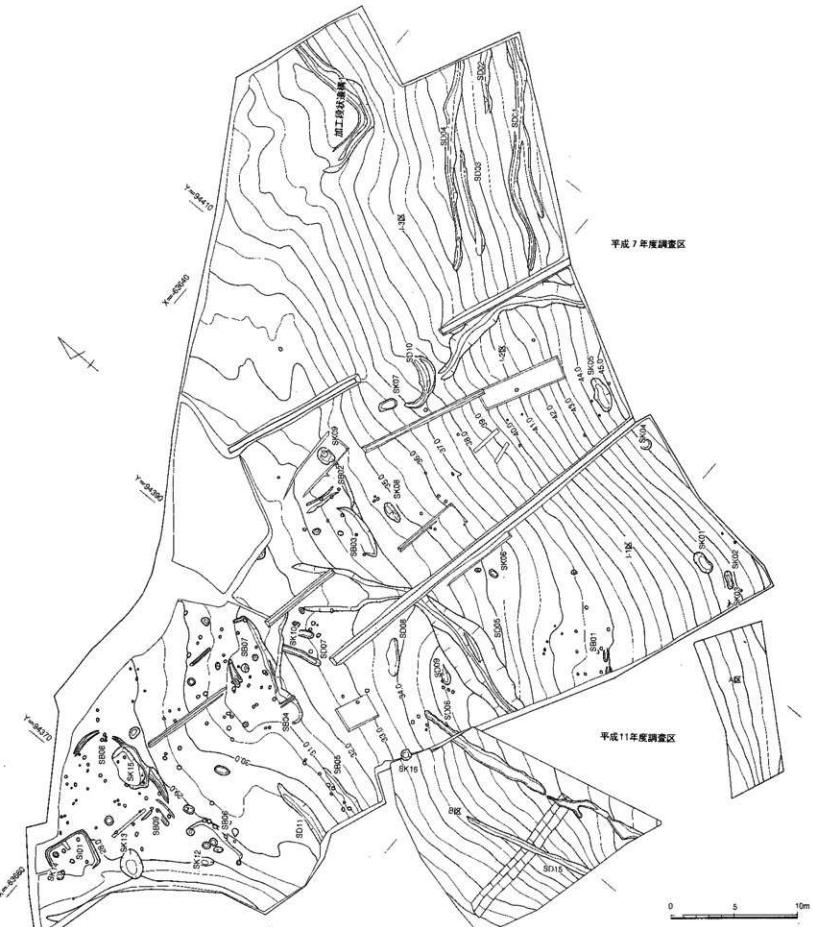
第56図 柳II遺跡調査前測量図 (S=1/200)

mの斜面上部で、前回の調査で弥生時代前期の土器棺墓等が検出された付近である。B区は標高30～41m付近で古墳時代中期を中心とした遺構が多かった場所である。

調査前測量、重機による表土掘削の後、平成11年11月8日から発掘を開始した。廃土処理の関係で、調査はA区からスタートした。現場は斜度が35°を越える急傾斜地で、調査は困難を極めた。足場を固めながらの発掘作業になったが、安全上僅かな降雨でも作業を中止せざるを得なかった。その苦労にも関わらず、遺物・遺構は全く出土せず、A区の調査は終了した。続いて調査に入った



第57図 條II 遺跡遺構配置図 (S=1/200) 調査区南側土層図 (S=1/100)



第58図 柳II遺跡遺構配置図 (S=1/300)

B区は、若干傾斜が緩いものの足場に苦労する状況は変わらず、苦戦を強いられた。ここでは、前回の調査で北半を確認していたSD06を含め、溝状遺構2と古墳時代の土坑1を検出した。遺物はSK16から数片がまとまって出土したが、それを除けば数えるほどである。念の為、斜面に沿って截割を入れたが、人為的な痕跡は認められなかった。

なおA・B両区に挟まれた部分は、近年の掘削により改変を受けており、A・B区の調査結果を見てから調査の可否を判断することとした。そして前記のようにA・B区ともごく僅かな遺物、遺構の検出にとどまったので、調査を中止した。

第2節 調査の結果

各調査区の概要（第57,58図、写真図版32上）

今回の調査では、遺構・遺物とも少なかった。

A区は何ら遺構が無く、出土遺物も全く無かった。表土から地山までは約80cmで、4層に分けられる。これらの土層は調査区のどの場所も、それぞれほぼ同様の厚さで堆積しており、加工されたような痕跡は確認できなかった。B区では既掘区から伸びているSD06の南側部分と、SD15、SK16を検出した。SD06、SD15はほぼ同じ方向に伸びており、どちらも古道状遺構と考えられる。SK16は古墳時代中期の土坑で、土師器甕と赤化した砾が落ち込んでいた。A区同様出土遺物は少なく、遺構外出土の遺物も僅かである。

SD06（第59図、写真図版32中）

B区上部、標高38~39m付近にのびている溝状遺構である。南に向かって僅かに上っており、調査区を突き抜けて区外に続いている。調査区の中程で一端途切れているが、一連の溝と見てよいだろう。溝幅、深さとも一定せず、ちょうどピットが連続するかのように微妙に変化する。幅の広い部分ほど底面が深い傾向にあるが、上部が風化しているため深さは5~15cmと浅い。

平成7年度の調査で、北側の長さ3.3mが確認されており、古道状遺構の可能性が指摘されている。今回の調査区内では、底面に明確な段差こそ無いものの、幅や深さが一定しないという特徴は同様である。また、溝内には3cmから拳大の円礫が点々と埋っている様子が確認された。この状況は既掘区部分も同様である。しかし、いずれの砾も覆土である淡黒茶褐色土内に含まれ、溝の底面から明らかに浮いていたことから、後に流れ込んだものと考えたい。

SD15（第60図、写真図版32下）

B区の中段、標高35m付近に検出した溝状遺構である。調査区北壁から4m程離れた場所から南に向かって伸びている。小規模な加工段といった形状で、断面逆「へ」の字形に地山を削り込んで



第59図 柳II遺跡SD06実測図 (S=1/100)

幅20~25cmの平坦面を作り出している。今回の検出部分は長さ10.5mで、南側はさらに調査区外に続いている。南に行くにつれ僅かに上っている状況は、SD06と同様である。平坦部はやや山側に傾斜している部分もあるが、ほぼ水平で凹凸が無く、幅も一定である。

SD15はその構造から考えて、古道状遺構と考えられる。平坦面の幅は僅かであるが、急傾斜地であることを考えると、本来はもう少し幅のあったものが、流失してしまった可能性が高い。

SK16（第61図、写真図版33上）

B区の北西端に検出した土坑である。既掘区との境に位置し、厳密には約2/3が既掘区内にある。おそらく前回の調査で、調査区端の法面内に残されたままだったのであろう。東西約90cm、南北約80cmで、やや潰れた円形である。底面は径約60cmで、ほぼ水平に掘り込まれている。付近は斜度20°の傾面で、深さは山側で55cm、谷側で20cmである。

覆土は2層に分かれるが、底部に堆積する暗黄褐色粘質土層から10~25cmの大の礫が9点、土師器壺片3点が出土した。礫は円礫もしくはその破片である。程度の差はあるもののいずれも赤化しており、熱を受けた可能性が高い。土師器片は壺と高坏の坏部で、他の遺物は出土していない。

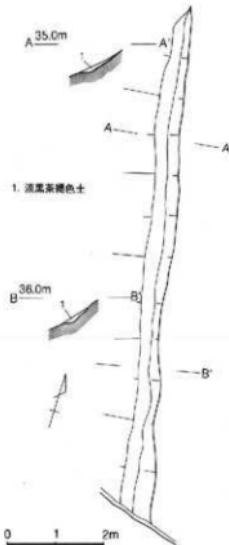
SK16出土遺物（第62図-1,3、写真図版33中）

62-1は単純口縁の壺である。口径13.2cmで口縁はくの字に立ち上がり、口縁はわずかに外傾する。口縁外面はナデ調整で、胴部外面はやや荒い刷毛目を施す。内面は不鮮明だが口縁部を横ナデ、胴部にケズリを施す。-3は土師器高坏の坏部もしくは坏である。口径は不明だが、口縁部がわずかに内傾する楕形である。暗褐色を呈し、焼成は良好だが、表面の劣化が著しい。

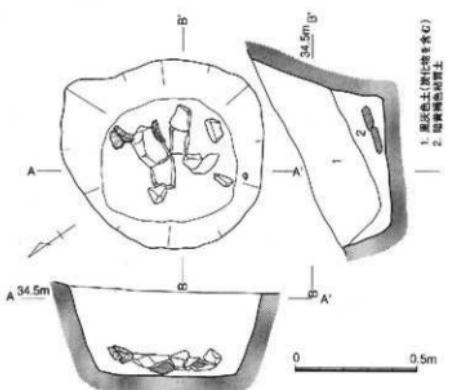
その他の出土遺物

（第62図-2,4、写真図版33下）

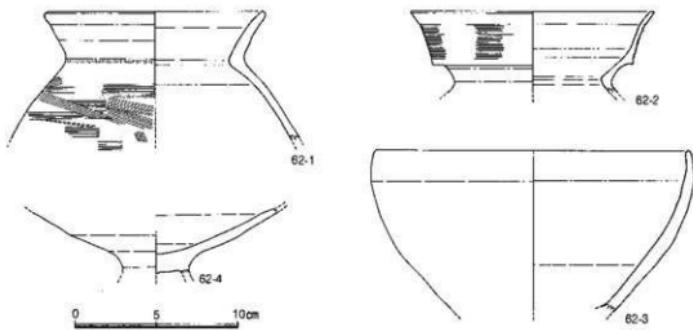
前記の通り出土遺物は遺構外でも少なく、固化したもの以外も数える程度である。62-2は、復元口径15cmの壺である。口縁外面に擬凹線を施すが、複合口縁の稜と口縁端部付近はナデ消しているようだ。口縁部は薄く伸び、ほとんど厚さが変わらないが中途で折れて外反する。こうした特徴から、塩津3期に対応すると考えられる。-4は高



第60図 横II遺跡SD15実測図(S=1/100)



第61図 横II遺跡SK16実測図 (S=1/20)



第62図 柳II遺跡出土遺物 (S=1/3)

坏の坏部である。暗黄褐色を呈し、坏部外面はナデ調整のようだが、表面の風化が著しい。坏部は直線的に広がり、丁度内傾をはじめる部分から欠損している。坏部と脚部は差し込み法で接合し、外面はナデつける。

第3節まとめ

調査前、柳II遺跡の集落を形成する遺構はさらに南に続いていると予想されていた。前回の調査結果を見ても、遺跡の範囲が南に広がる可能性が高かったのである。しかし今回の調査では、SK16を除いてそうした遺構は確認できなかった。遺物に関しては、数mと離れていない既掘区に比べて驚くほど少なかった。柳II遺跡のある丘陵はさらに南側に続いているが、調査結果を考慮すると集落の範囲を再考せざるを得ない。SK16は今回の調査区で最も既掘区寄りに位置しており、時期が不明な溝状遺構を除いて、SK16より南側に遺構は全くない。地滑りによりこの一帯の遺構が失われた可能性もあるが、土層観察からはその痕跡を確認できなかった。

こうしたことから、遺跡の南側にのびている丘陵の、少なくとも西向きの斜面は集落から外れていると言えそうである。実際この斜面は険しく、利用には大がかりな造成が必要だろう。一方で丘陵上には幅の広い平坦面が南・東に向かってそれぞれ伸びているので、集落はむしろこの平坦面に広がっていた可能性が高い。この部分は近年の果樹園造成により削平されており、試掘調査時も遺構、遺物は確認されていない。しかし広く塩津丘陵遺跡群の立地を見た場合、柳II遺跡にいたるこの平坦面も含めて、丘陵東端の塩津山遺跡から柳II遺跡までが一体の遺跡として捉えられるだろう。

以上のように、今回の調査では遺物・遺構とも僅かだったが、土地利用・空間利用の把握という観点から一定の成果を得られたと言えるだろう。

註1 島根県教育委員会編『塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・雨龜ノ尾古墳）』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅸ 1998

註2 島根県教育委員会『柳II遺跡 小久白墳墓群 神庭谷遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅸ 1996

註3 平成11年度の調査で新規に検出した遺構の名称は、既掘区の遺構番号を引き継いで命名している。

第6章 小久白墳墓群

第1節 調査の状況と経過

調査前の状況（第63図）

小久白墳部群は島根県安来市久白町字小久白他に所在し、標高50～65mの丘陵尾根部に位置している。塩津丘陵遺跡群のある丘陵から南東方向へ枝分かれした支丘にあたり、丘陵上には幅3～12

mの平坦面が続いている。丘陵の両側は比高20mほどの谷となっており、谷を挟んだ東には柳II遺跡のある斜面を望み、西には神庭谷遺跡のある丘陵が広がっている。

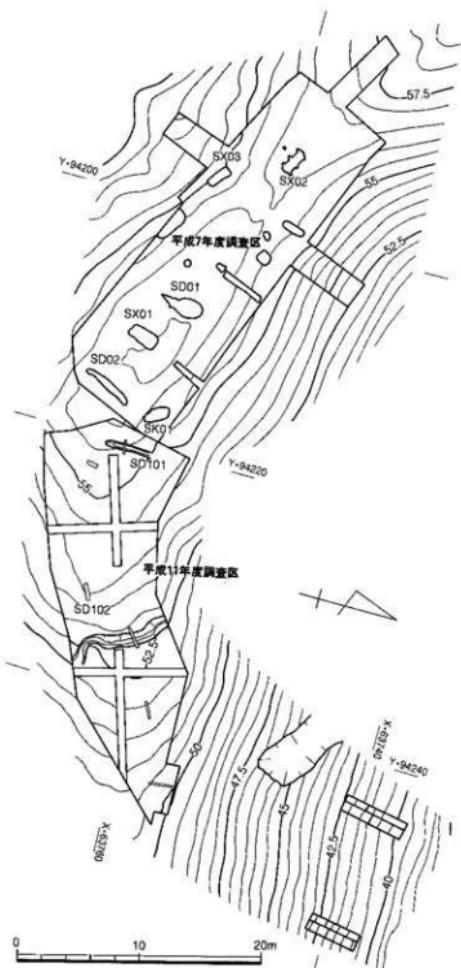
小久白墳墓群の調査は、既に平成7年度、9年度の2回行なわれている。平成7年度は試掘調査から始められ、丘陵南東部のトレンチから土壙墓の遺構を確認したため、引き続いて本調査を行った。調査の結果、小久白1号墓、土壙墓2基、性格不明の土坑1基を検出し、翌年報告書を刊行している。平成9年度には尾根の最高所付近の用地買収が完了し、その調査を行っている。調査の結果、サエ（サイ）ノ神信仰に関わる石積遺構と道路状遺構を検出し、翌年報告書を刊行している。

調査の経過

今年度の調査区は工法変更に伴う追加買収部分に設定している。既掘区の南側に隣接する丘陵尾根上の平坦面で、標高50～56m、調査面積は約300m²である。発掘調査は地形測量と表土掘削の後、平成12年10月12日から開始した。緊急の工法変更ということもあり、調査区周辺は既に工事が進行中で重機が行き交う姿を間近に見ながらの調査となった。工事箇所は調査区の北側まで迫っていたものの、この時点では既掘区の一部がかろうじて残されており、調査計画の参考となった。



第63図 小久白墳墓群調査前測量図 (S=1/300)



第64図 小久白墳墓群遺構配置図 (S=1/400)

第2節 調査の結果

今回の調査区は長さ30m、幅10mという限られた範囲だったこともあり、2条の溝状遺構を確認したにとどまった。(第64図、写真図版34上) 出土遺物は弥生土器片が出土しているが、数量は僅かである。

SD101 (第65図、写真図版34中、下)

調査区西北端で検出した溝状遺構である。尾根のやや東寄りを削り込むようにして小道がのびて

調査区内は風化した地山の上に薄く腐植土があるだけで、遺構面自体も風化によりかなり劣化していた。腐植土は場所によっては厚さ5cmにも満たない状態であり、表土掘削の段階で遺構面はある程度削平せざるを得なかつた。また遺構の残りも悪く、外形を確認し、精査するには上部をさらに削り込む必要があった。このため検出した遺構は、上部数cmが実際より目減りしていると考えられる。

作業員出入り時の安全確保や進入路の確保など、工事現場サイドの全面的な協力もあって作業は順調に進んだ。また天候にも恵まれたことから、予定より早い10月30日に調査後写真を撮影して終了した。

なお、追加買収部分の約6割を占める北東斜面については、傾斜がきつく、表面観察でも加工段等の人が痕跡が見られなかったことから、まずトレンチ調査を実施した。斜面のなかでも不自然な凹凸が見受けられる部分を選び、トレンチを2か所設定した。しかし、遺構・遺物とも皆無であった。平成7年度の調査をはじめとする過去の試掘調査でも、この斜面からは遺構・遺物とも検出されていないことなどを考慮し、全面調査は行わないこととした。

いるが、ちょうど遺構の北側を切ってしまっている。残存長は約4m、深さ40~60cmで、底面の幅は約25cmである。表土掘削および精査の段階で若干削りこんでいるため、実際の深さより多少浅くなっていると思われる。断面はいびつな台形で、底面は北に向かって緩やかに傾斜している。覆土は黒褐色土を主体とするが、地山風化土を部分的に含んでいる。遺物はまったく出土しておらず、時期・性格とも不明である。

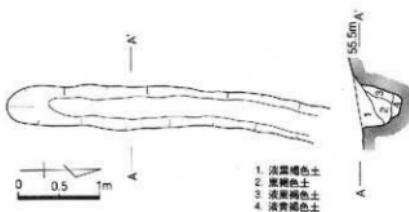
SI102 (第66図、写真図版35上、中)

調査区のほぼ中央部を横断する溝状遺構である。若干の湾曲はあるものの、尾根を切る形で掘り込まれており、最大幅約1m、深さ15~90cmである。北部は深さ90cmで、きつい傾斜面によって形成される。一方南側では傾斜が緩やかになるとともに、深さも浅くなっていく。底部は幅20~45cmで、尾根筋を境に南北の谷に向かって僅かに傾斜している。覆土は黄褐色土であるが、上層では腐植土が混じり、下層では赤褐色の地山風化土が混じる。当遺構も出土遺物はない。

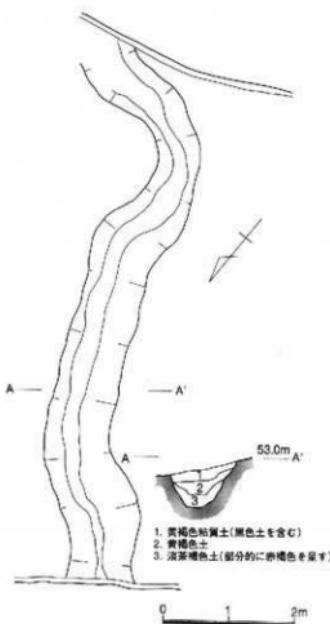
出土遺物 (第67図、写真図版下)

表土下5~10cmで地山層が露出することもあるが、出土遺物はわずかである。風化が激しく個体数はもちろん、器種の判別すら困難なものが大半である。遺構に伴うものではなく、いずれも腐植土からの出土である。かろうじて図化が可能なものを掲載する。

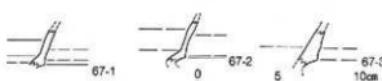
67-1,2は壺の口縁であろう。口縁部の中程からわずかに外傾する。いずれも3cm四方ほどの小片であり、風化も激しいため調整などの詳細は不明である。68-3も同様に小片であるが器台の一部と思われる。風化のため不鮮明であるが、内面にミガキを施すようである。



第66図 小久白墳墓群SD101実測図 (S=1/60)



第66図 小久白墳墓群SD102実測図 (S=1/75)



第67図 小久白墳墓群出土遺物 (S=1/3)

第3節 まとめ

新たな墳丘墓・土壙墓の検出が期待された今回の調査だが、2条の溝状遺構以外に遺構を検出することはできなかった。遺跡のある丘陵は、小久白1号墳以南になると尾根上平坦面が徐々に狭くなる傾向がある。また調査区外に入ると急激に瘦せ尾根になってしまうことを考えると、これ以上遺跡が続していくとは考えにくい。今回の調査区内で、遺跡はひとまず区切られると考えてよいだろう。

問題となるのは今回出土した遺構と墳丘墓・土壙墓の関係である。前記のように、溝状遺構の時期や性格を出土遺物から判断することは出来ない。しかしながら小久白墳墓群の出土遺物は、サエ（サイ）ノ神関連を除けば、今回の調査区、既掘区を通して鍵尾A-5墓式（草田5期）に位置づけられるものばかりである。また小久白1号墓などが築かれて以降、周辺に何ら手を加えられた痕跡も見つかっていない。これらを考慮すると、今回検出した溝状遺構も該当期に位置づけられる可能性が高く、墳墓群を構成する遺構の一つと考えられるのではないだろうか。特に尾根筋を切っているSD-102は、墓域を区切る意味があったのかもしれない。

今回の調査は目立った新発見こそなかったものの、小久白墳墓群の範囲を判断する資料を得たという点で、一定の成果があがったと言える。何分にも判断材料に乏しいため、掘り下げた検討が出来ないのが残念だが、弥生時代後期から末にかけての荒島地域を研究する上で一助になれば幸いである。

註1 烏根県教育委員会編『塙津丘陵遺跡群（塙津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・梅遺跡・附龜ノ尾古墳）』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅲ 1998

註2 烏根県教育委員会『柳Ⅱ遺跡 小久白墳墓群 神庭谷遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅳ 1996

註3 烏根県教育委員会『小久白墳墓群～サエ（サイ）ノカミ信仰遺跡の調査報告～』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅲ

註4 花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究」『鳥根考古学雑誌』第4集 1987

註5 鹿島町教育委員会『勝武地区緊急整備事業発掘調査報告書5 南講武草出遺跡』1992

附編 島田遺跡島田横穴墓群第2号横穴墓

島田遺跡の位置と歴史的環境

一般国道9号安来道路建設地のうち安来道路西地区は、安来市荒鳥町から始まり八束郡東出雲町出雲郷に至る。地方自治体でいえば、東は鳥取県米子市、西は島根県松江市に接している。また、南には京羅木山（標高473m）を始めとする山々が連なり、北には中海が広がっている。現在の人口集中地域やそれを取り巻く集落は概ね平地に形成されている。しかし、その平地は、中海に面した東出雲町域内でも北側の限られた区域と京羅木山を始めとする山々から北方向に派生するいくつかの尾根が形成する谷に限られる。

周辺の遺跡

【縄文時代】

縄文時代の遺跡は少ないが、前期から晩期の土器が出土した。竹の花上遺跡（178）、晩期の土器が出土した春日遺跡（172）、大木権現山2号墳下層（198）が挙げられる。

【弥生時代】

弥生時代の主な遺跡として前期から中期の堅穴住居址が検出された寺床遺跡、中期の壺や打製石斧、粉穀痕のある土器や土錐などが出土した磯近遺跡（223）、後期末の墳丘墓である大木権現山1号墓（198）などがある。

縄文時代・弥生時代の遺跡数は、古墳時代以降に比べると少ない。

【古墳時代】

平野に面した丘陵上を中心に古墳が築かれるようになる。前期には櫛櫛に削竹形木棺が納められ、斜縁神獣鏡などの豊富な副葬品が出土した寺床1号墳（197）、また、内行花文鏡が出土した古城山2号墳などがある。中期になると、箱式石棺を主体部とする大木権現山2号墳（198）、また、舟形に作られた主体部を持つ大草岩船古墳（112）などがある。後期には石棺式石室を持つ栗坪古墳群（180）、箱式石棺を持つ焼田古墳群（234）などがある。島田池古墳群（196）や渋山池古墳群（200）のように丘陵上に築かれる古墳群も一部は中期から後期にかけて築かれたものであろう。

また、この地域は四注式家形の玄室形態をもつ横穴墓の多い地域であり、組合せ式の家形石棺を納めた渋山池古墳群（200）、家形石棺を納め後背墳丘を持つ島田池横穴墓群（195）の他に、古城山横穴墓群（190）、高井横穴墓群（211）、四ツ廻横穴墓群などがある。

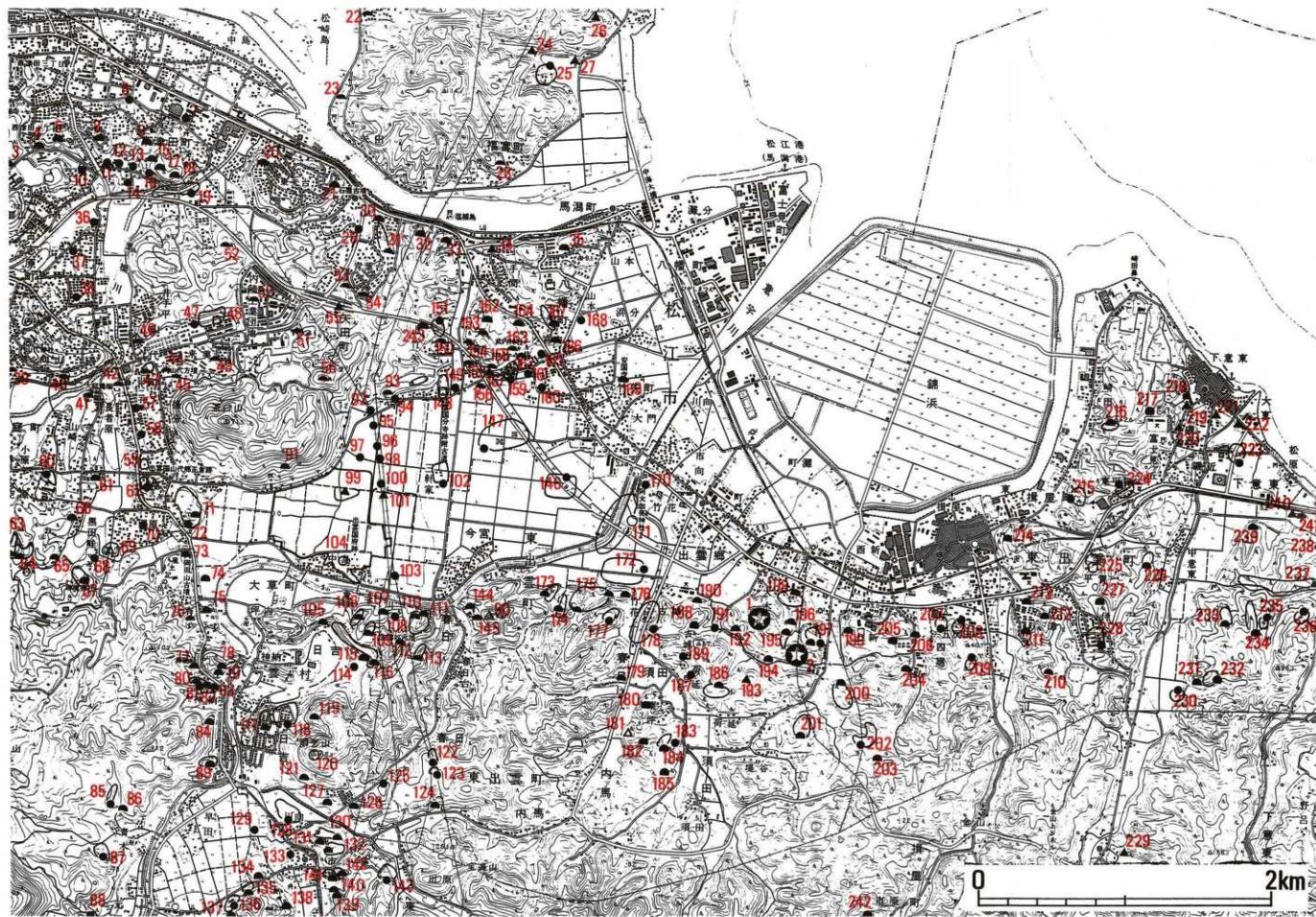
この時代の集落は前期～後期の集落で玉作りも行われた勝負遺跡（図3、表2-15）のほかに、栗坪遺跡（183）、焼田遺跡（235）などがあり、生産遺跡では須恵



第68図 島田遺跡の位置

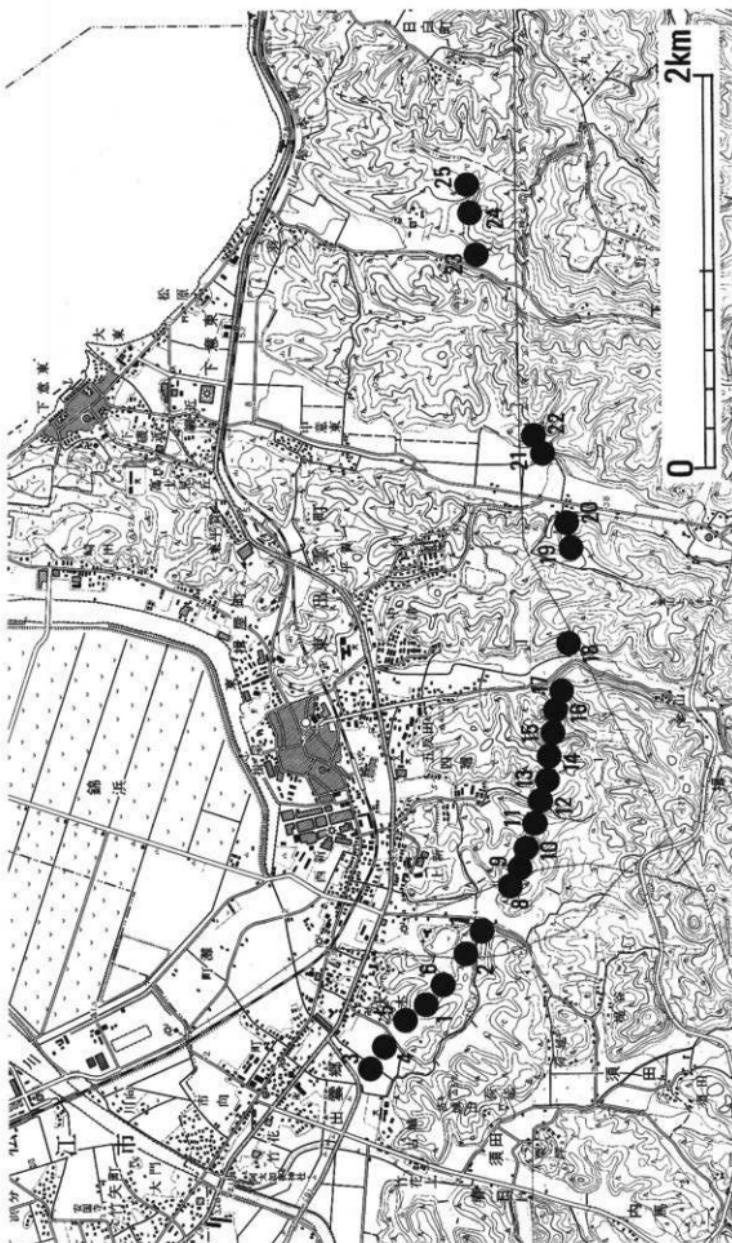
島田遺跡と周辺の遺跡

| No. | 地名 | 地點 | 性質 | 地名 | 地點 | 性質 |
|-----|----|----|----|-----|----|----|
| 1 | 新井 | 新井 | 古墳 | 84 | 坂 | 古墳 |
| 2 | 高井 | 高井 | 古墳 | 85 | 坂 | 古墳 |
| 3 | 中井 | 中井 | 古墳 | 86 | 坂 | 古墳 |
| 4 | 下井 | 下井 | 古墳 | 87 | 坂 | 古墳 |
| 5 | 上井 | 上井 | 古墳 | 88 | 坂 | 古墳 |
| 6 | 原井 | 原井 | 古墳 | 89 | 坂 | 古墳 |
| 7 | 中井 | 中井 | 古墳 | 90 | 坂 | 古墳 |
| 8 | 下井 | 下井 | 古墳 | 91 | 坂 | 古墳 |
| 9 | 上井 | 上井 | 古墳 | 92 | 坂 | 古墳 |
| 10 | 新井 | 新井 | 古墳 | 93 | 坂 | 古墳 |
| 11 | 高井 | 高井 | 古墳 | 94 | 坂 | 古墳 |
| 12 | 中井 | 中井 | 古墳 | 95 | 坂 | 古墳 |
| 13 | 下井 | 下井 | 古墳 | 96 | 坂 | 古墳 |
| 14 | 上井 | 上井 | 古墳 | 97 | 坂 | 古墳 |
| 15 | 新井 | 新井 | 古墳 | 98 | 坂 | 古墳 |
| 16 | 高井 | 高井 | 古墳 | 99 | 坂 | 古墳 |
| 17 | 中井 | 中井 | 古墳 | 100 | 坂 | 古墳 |
| 18 | 下井 | 下井 | 古墳 | 101 | 坂 | 古墳 |
| 19 | 上井 | 上井 | 古墳 | 102 | 坂 | 古墳 |
| 20 | 新井 | 新井 | 古墳 | 103 | 坂 | 古墳 |
| 21 | 高井 | 高井 | 古墳 | 104 | 坂 | 古墳 |
| 22 | 中井 | 中井 | 古墳 | 105 | 坂 | 古墳 |
| 23 | 下井 | 下井 | 古墳 | 106 | 坂 | 古墳 |
| 24 | 上井 | 上井 | 古墳 | 107 | 坂 | 古墳 |
| 25 | 新井 | 新井 | 古墳 | 108 | 坂 | 古墳 |
| 26 | 高井 | 高井 | 古墳 | 109 | 坂 | 古墳 |
| 27 | 中井 | 中井 | 古墳 | 110 | 坂 | 古墳 |
| 28 | 下井 | 下井 | 古墳 | 111 | 坂 | 古墳 |
| 29 | 上井 | 上井 | 古墳 | 112 | 坂 | 古墳 |
| 30 | 新井 | 新井 | 古墳 | 113 | 坂 | 古墳 |
| 31 | 高井 | 高井 | 古墳 | 114 | 坂 | 古墳 |
| 32 | 中井 | 中井 | 古墳 | 115 | 坂 | 古墳 |
| 33 | 下井 | 下井 | 古墳 | 116 | 坂 | 古墳 |
| 34 | 上井 | 上井 | 古墳 | 117 | 坂 | 古墳 |
| 35 | 新井 | 新井 | 古墳 | 118 | 坂 | 古墳 |
| 36 | 高井 | 高井 | 古墳 | 119 | 坂 | 古墳 |
| 37 | 中井 | 中井 | 古墳 | 120 | 坂 | 古墳 |
| 38 | 下井 | 下井 | 古墳 | 121 | 坂 | 古墳 |
| 39 | 上井 | 上井 | 古墳 | 122 | 坂 | 古墳 |
| 40 | 新井 | 新井 | 古墳 | 123 | 坂 | 古墳 |
| 41 | 高井 | 高井 | 古墳 | 124 | 坂 | 古墳 |
| 42 | 中井 | 中井 | 古墳 | 125 | 坂 | 古墳 |
| 43 | 下井 | 下井 | 古墳 | 126 | 坂 | 古墳 |
| 44 | 上井 | 上井 | 古墳 | 127 | 坂 | 古墳 |
| 45 | 新井 | 新井 | 古墳 | 128 | 坂 | 古墳 |
| 46 | 高井 | 高井 | 古墳 | 129 | 坂 | 古墳 |
| 47 | 中井 | 中井 | 古墳 | 130 | 坂 | 古墳 |
| 48 | 下井 | 下井 | 古墳 | 131 | 坂 | 古墳 |
| 49 | 上井 | 上井 | 古墳 | 132 | 坂 | 古墳 |
| 50 | 新井 | 新井 | 古墳 | 133 | 坂 | 古墳 |
| 51 | 高井 | 高井 | 古墳 | 134 | 坂 | 古墳 |
| 52 | 中井 | 中井 | 古墳 | 135 | 坂 | 古墳 |
| 53 | 下井 | 下井 | 古墳 | 136 | 坂 | 古墳 |
| 54 | 上井 | 上井 | 古墳 | 137 | 坂 | 古墳 |
| 55 | 新井 | 新井 | 古墳 | 138 | 坂 | 古墳 |
| 56 | 高井 | 高井 | 古墳 | 139 | 坂 | 古墳 |
| 57 | 中井 | 中井 | 古墳 | 140 | 坂 | 古墳 |
| 58 | 下井 | 下井 | 古墳 | 141 | 坂 | 古墳 |
| 59 | 上井 | 上井 | 古墳 | 142 | 坂 | 古墳 |
| 60 | 新井 | 新井 | 古墳 | 143 | 坂 | 古墳 |
| 61 | 高井 | 高井 | 古墳 | 144 | 坂 | 古墳 |
| 62 | 中井 | 中井 | 古墳 | 145 | 坂 | 古墳 |
| 63 | 下井 | 下井 | 古墳 | 146 | 坂 | 古墳 |
| 64 | 上井 | 上井 | 古墳 | 147 | 坂 | 古墳 |
| 65 | 新井 | 新井 | 古墳 | 148 | 坂 | 古墳 |
| 66 | 高井 | 高井 | 古墳 | 149 | 坂 | 古墳 |
| 67 | 中井 | 中井 | 古墳 | 150 | 坂 | 古墳 |
| 68 | 下井 | 下井 | 古墳 | 151 | 坂 | 古墳 |
| 69 | 上井 | 上井 | 古墳 | 152 | 坂 | 古墳 |
| 70 | 新井 | 新井 | 古墳 | 153 | 坂 | 古墳 |
| 71 | 高井 | 高井 | 古墳 | 154 | 坂 | 古墳 |
| 72 | 中井 | 中井 | 古墳 | 155 | 坂 | 古墳 |
| 73 | 下井 | 下井 | 古墳 | 156 | 坂 | 古墳 |
| 74 | 上井 | 上井 | 古墳 | 157 | 坂 | 古墳 |
| 75 | 新井 | 新井 | 古墳 | 158 | 坂 | 古墳 |
| 76 | 高井 | 高井 | 古墳 | 159 | 坂 | 古墳 |
| 77 | 中井 | 中井 | 古墳 | 160 | 坂 | 古墳 |
| 78 | 下井 | 下井 | 古墳 | 161 | 坂 | 古墳 |
| 79 | 上井 | 上井 | 古墳 | 162 | 坂 | 古墳 |
| 80 | 新井 | 新井 | 古墳 | 163 | 坂 | 古墳 |
| 81 | 高井 | 高井 | 古墳 | 164 | 坂 | 古墳 |
| 82 | 中井 | 中井 | 古墳 | 165 | 坂 | 古墳 |



第69図 島田遺跡の位置と周辺の遺跡

第70図 安来鐵道西地区の東出雲町域内で調査を実施した地點



安来道路西地区の東出雲町域内で調査を実施した遺跡

| No. | 道 路 名 | 種 別 等 | 所 収 報 告 書 名 |
|-----|----------------------------|--|---|
| 1 | 岸 尾 遺 跡 きしおいせき | 集落跡（8c後半～9c前半） | 岸尾遺跡・鳥田遺跡 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区V1997年鳥取県教育委員会編 |
| 2 | 島 田 遺 跡 しまだいせき | 古墳群・横穴墓群・ピット群 | 同上および猪津丘陵遺跡群・小久白墳墓群 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区III 2001年鳥取県教育委員会編 |
| 3 | 恵 比 須 遺 跡 えびすいせき | 須恵器分布（奈良時代～） | 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区I（御崎谷・土元・清水遺跡ほか） 1993年鳥取県教育委員会編 |
| 4 | 鶴 貨 遺 跡 ばんぬきいせき | 土坑・溝状遺構 | 鳥川池遺跡・鶴貨遺跡 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区III 1997年鳥取県教育委員会編 |
| 5 | 島 田 池 遺 跡 しまだいけいせき | 集落跡・古墳群・横穴墓群 | 同上 |
| 6 | 長 猫 遺 跡 ながねこいせき | 須恵器（古墳時代後期） | 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区I 1993年鳥取県教育委員会編 |
| 7 | 長 猫 古 墳 群 ながねこふんぐん | 石斧・石器分布 | 同上 |
| 8 | 淡 山 池 古 墳 群 しづやまいけこふんぐん | 集落跡・古墳群・横穴墓群 | 淡山池古墳群 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区III 1998年鳥取県教育委員会編 |
| 9 | 淡 山 池 遺 跡 しづやまいけいせき | 集落跡（弥生時代後期・古墳時代中期・古墳時代終末期・奈良時代・平安時代） 須恵器群（平安時代） | 淡山池遺跡・原ノ前遺跡 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区III 1997年鳥取県教育委員会編 |
| 10 | 原 ノ 前 遺 跡 はらのまえいせき | 集落跡（淡山池遺跡に同じ） | 同上 |
| 11 | 四 ツ 窓 II 遺 跡 よつごにいせき | 集落跡（古墳時代後期） 玉作工房跡（古墳時代前期後半～中箱削前） | 四ツ窓II遺跡・林羅り遺跡・受馬遺跡 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区III 1996年鳥取県教育委員会編 |
| 12 | 四 ツ 窓 I 遺 跡 よつごこいせい | 土師器分布（古墳時代前期） | 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区I（御崎谷・土元・清水遺跡ほか） 1993年鳥取県教育委員会編 |
| 13 | 大 島 遺 跡 おおとりいせき | 土師器分布（古墳時代前期） | 同上 |
| 14 | 林 題 り 遺 跡 はやしまわりいせき | 集落跡（奈良～平安時代） | No.11四ツ窓II遺跡に同じ |
| 15 | 勝 負 遺 跡 しょうぶいせき | 集落跡（古墳時代前期～奈良・平安時代） 土作工房跡（古墳時代中期） | 勝負遺跡・堂井古墳 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区III 1998年鳥取県教育委員会編 |
| 16 | 堂 井 古 墳 どうとこふん | 古墳？基壇状加工段（近世） | 同上 |
| 17 | 堂 井 遺 跡 どうといせき | 不明 | 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区I（御崎谷・土元・清水遺跡ほか） 1993年鳥取県教育委員会編 |
| 18 | 受 馬 遺 跡 うけまいせき | 祭祀跡（中世～近世） | No.11四ツ窓II遺跡に同じ |
| 19 | 毛 無 遺 跡 けなこふん | 不明 | 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区I（御崎谷・土元・清水遺跡ほか） 1993年鳥取県教育委員会編 |
| 20 | 毛 無 古 墳 けなこふん | 須恵器片分布 | 同上 |
| 21 | 土 元 遺 跡 つちもといせき | 須恵器片分布 | 同上 |
| 22 | 御 崎 谷 遺 跡 みさきだいいせき | 施土塙・溝状遺構・ピット | 同上 |
| 23 | 清 水 遺 跡 しみずいせき | 溝状遺構 | 同上 |
| 24 | 巻 林 遺 跡 まきばやしいせき | 焼土塙・土築 | 同上および中山遺跡・巻林遺跡 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区II 1994年鳥取県教育委員会編 |
| 25 | 巻 林 横 穴 まきばやはよこあな | 不明 | 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区I（御崎谷・土元・清水遺跡ほか） 1993年鳥取県教育委員会編 |

器の窯址である古窯跡（229）がある。

【奈良～平安時代】

意宇平野の意宇川沿いは、航空写真によって条里制が敷かれていたことが推定されている。意宇平野には出雲国庁、出雲国分寺（148）、国分尼寺などの址が確認されており、これに隣接する東出雲町内の出雲郷地区が出雲国の政治的中心地と深くかかわっていた様子がうかがえる。

【鎌倉時代～室町時代】

町内の城址は、春日城址（90）、古城山城址、京羅木山城址、福良城址（117）などが知られている。春日城址は下河原氏の居城であったが、尼子氏との激しい攻防戦を繰り広げた末に落城したと伝えられる。現在でも本丸、出丸、空堀が残っている。古城山城址は、砦として利用されていたと考えられ、現在でも井戸や郭が残されている。京羅木山城址からは広瀬町にある月山富田城を一望することができ、毛利氏が尼子氏の本拠地を攻める攻防戦の際に重要な城であったと考えられる。福良城址は急峻な山腹に郭が設けられているが、尼子氏の家臣である作間左右衛門入道の居城であったと考えられており、この城もまた毛利氏が尼子氏の本拠地を攻める攻防戦の際に重要な城であったと推定される。

参考文献

『東出雲町の遺跡』東出雲町教育委員会1988

『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区I（御崎谷・土元・清水遺跡ほか）』島根県教育委員会編1993年

『中山遺跡 卷林遺跡 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区II』島根県教育委員会編1994年

発掘調査の経過と概要

平成7年度一般国道9号安来道路建設予定地内島田遺跡発掘調査の際、道路用地内の斜面に造られた横穴墓は島田横穴墓群として調査された。今回発掘調査した横穴墓はこれに含まれるもので、当時の調査担当者の番号付けの順序に従えば、「第2号横穴墓」となる。平成11年5月、道路用地外の区域から掘り込まれた横穴墓の玄室部分が、本道法面工事にかかるて右側壁部分が崩落し、その存在が明らかとなった。発掘調査は、島根県教育委員会（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）が同年5月17日から緊急的に対応し、同月31日に終了した。道路用地内の玄室すべて（7m²）と、崩落の危険性のない範囲内での横穴墓閉塞施設について発掘調査した。玄室の右側壁の崩落によってその存在が明らかになったため、発掘調査も普段見ることのできない角度から横穴墓の玄室の様子を記録することができた。

第2号横穴墓

前庭部、閉塞施設については、崩落の危険のない範囲で若干の発掘調査を試みたが、前庭方向に傾斜した荒石右切石（縦80cm以上、幅50～60cm、厚さ10cm）の閉塞石一つを確認するに止まった。このため、閉塞部分や前庭部および墓道等を含めたこの横穴墓全体の構造についての類型は明らかにできなかった。

一方、調査した玄室の構造はドーム形で、奥行き2.05m、最大幅2.5m、高さ最高1.15mを測る。床面には、玄室入口近くで35cmの土層堆積が認められ、その上に、法面工事で玄室の天井部付近から右側壁が破壊されて以後流入した土砂が最高50cm近くまで堆積していた。もともとの土砂の流入堆積が少なく薄いことから、追葬なり盗掘を受けていたにしても、その後しっかり埋め戻されていた

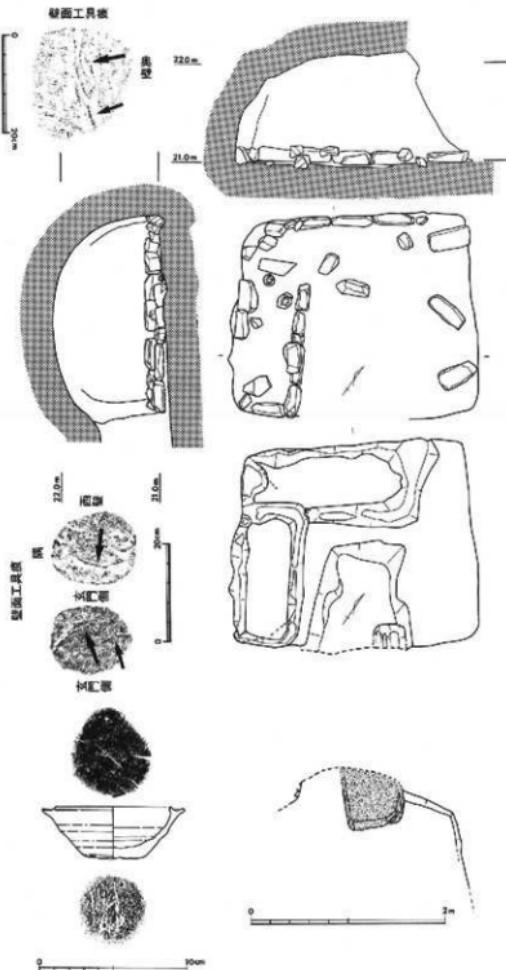
ということになろうか。

直接の埋葬施設としては、荒島石製の細長い四角柱状ブロックを整然と並べて、おそらく伸展位の遺骸を安置する囲み石としている。囲み石は、玄室床面に刻まれた割付溝に従って並べられている。それぞれのブロックは、大きな板石に割付線を刻みつけた後、割っているようだが、割付線のとおりに割られているブロックはほとんどない。四角柱ブロック六面の内、五面は比較的滑らかに加工しているが、接地する長面は割付線に沿って割られたときのままにして、割付溝を掘りくぼめたり、土を盛ったりして、上面や側面がほかのブロックと揃うようにしている。また、これらの中

にはコーナー用に造えられたものもあり、念入りに作られているようにも見える。

この囲み石は、玄室左側壁に沿って造られているもの（A）と、もう一つ、玄室奥壁に沿って造られていた形跡（割付溝と散乱した若干の四角柱ブロック）がある（B）。この2つの同様の構造を持つと見られる囲み石は、たがいに重複しており、発掘調査の結果、Aの囲み石とその割付溝が優先していることがわかった。また、以上のことからAの囲み石はBの囲み石の部材ブロックを転用した可能性があることが考えられる。

Aの囲み石の最も奥壁寄り、幅中間の位置で須恵器蓋壺の身が出土した。器の中、底部中央とやや立ち上がった側面に、それぞれへラ状工具の先端で「×」印と一文字印が付けられていた。また、器の外底（出土状況からいえば検出面であるが）にもヘラ記号らしき条痕が3方向に数単位付けられていたが、これは板状



第71図 第2号横穴墓造構 (S=1/4) 遺物 (S=1/50, 1/10) 実測図

工具による調整痕の可能性が高い。この須恵器が出土した位置は埋葬頭位であった可能性がある。

今回の発掘調査で出土した器物はこれだけだった。この蓋坏の身は、須恵器蓋坏が極小化した時期のもので、出雲須恵器編年6期（飛鳥編年Ⅱ～Ⅲ期）、7世紀の第2～3四半期までの年代観が与えられる。したがって、Aの囲み石のみで見れば、この須恵器の時期以降にかかる設営となり、Bの囲み石はそれ以前の設営であったこととなる。しかし、Aに使用されている石材同様、須恵器もBからの転用とすれば、Bの囲み石が7世紀第3四半期以降ということになり、Aはさらに後の設営となる。しかしながら、囲み石部材の転用については、ある程度の類推を導き出せる状況があるが、須恵器の転用については非常に根拠薄弱であり、また、候道や閉塞施設の余容が把握できず、他の遺物が出土していないので前者の時期比定が穩當と思われる。いずれにしても7世紀代に入ってからの造営と考えておきたい。

平成7年度島田遺跡の調査では、3穴の横穴墓（第1号、第3号、第4号）が検出されている。これらはいずれも用地境界付近で検出されており、道路設計の都合による用地買収の結果、地続きの同じ向きの斜面にありながら第1号・第4号と第2号・第3号に分かれて検出されることとなつた。直線距離にして87m隔たっている。今回調査した第2号横穴墓も前庭入口は完全に用地外であった。

第2号横穴墓と第1・第3・第4号横穴墓の玄室部分を比較すれば、規模は第2号横穴墓が最小である。また、玄室断面形はドーム型で隣り合う第3号横穴墓と同様である。さらに、第3号横穴墓とは玄室入口の床面構造も似ている。入口の床面を玄門そのままの幅とレベルで掘り窪め玄室の他の部分を屍床状に若干高いレベルで床面を保つという構造である。しかし、追葬にあたり玄室の一部を改変しているという点においては第1号横穴墓と共通している。また、造営時期についても、同時期の須恵器が出土している段階があることから、第1号・第4号の造営時期と重なっている可能性がある。

囲み石の埋葬施設は、付近に例がなく特徴的であるが、他の第1号・第4号の立派な家形石棺や石床などの石造物埋葬施設と比較すると、気の毒なくらい貧弱である。

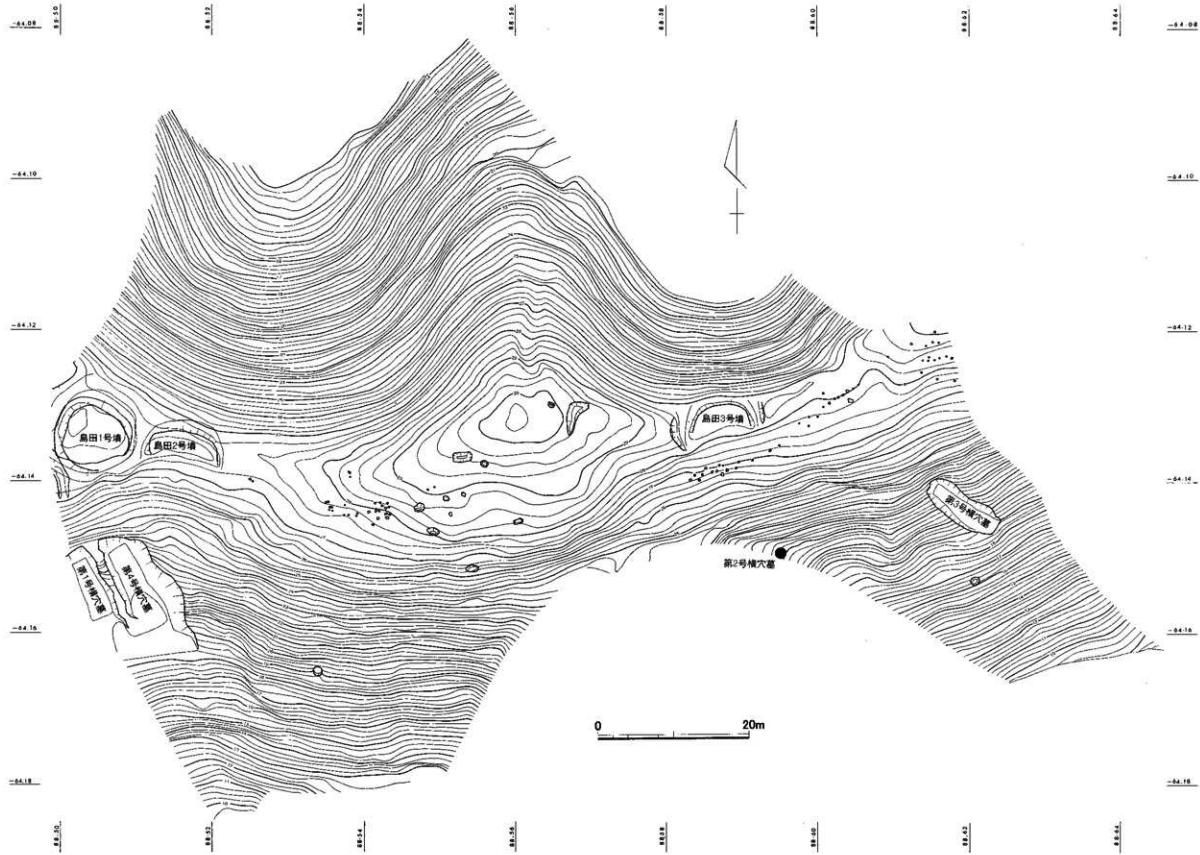
なお、第3号横穴墓の前庭先端部からは8世紀初頭頃の須恵器坏蓋が出土しており、これらの横穴墓祭祀の下限を示すものとされている。

註

- 註1 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地城色」『島根考古学会誌』第11集1994年
大谷晃二「出雲地方の須恵器編年表」『出雲の横穴墓』-その型式・変遷・地城性-第7回山陰横穴墓調査検討会資料
山陰横穴墓研究会編1997年
中村 浩「研究入門 須恵器」柏青房1990年
- 註2 島根県教育委員会編「岸尾遺跡・島田遺跡」一般国道9号建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
西地区V-1997年



第72図 島田遺跡周辺の地形 (S=1/2500)



写 真 図 版



加工段1～3検出状況
(北から)



加工段1～3土器出土
状況（東から）



加工段1～3床面・柱
穴・ビット等検出状
況（南東から）

塩津山遺跡図版2



加工段2床面・柱穴・
ピット等検出状況
(北東から)



SI05検出状況
(南から)



SI05土層堆積状況
(西から)



SI05床面検出状況
(南から)



SI05土器出土状況
(南から)



SI05床面・柱穴・
ピット等検出状況
(東から)

塩津山遺跡図版4



SI05発掘状況その1
(東から)



SI05発掘状況その2
(東から)



加工段5検出状況
(西から)